

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第15号

《研究ノート》

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相
— 中岳Ⅱ式土器を中心に —

宮崎 大和

南九州市松木園遺跡で出土した弥生時代後期の鉄鏃について

川口 雅之

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文

岩川官軍墓地の昭和8（1933）年の手紙について
— 岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の墓地の配置 —

湯場崎 辰巳

令和3年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2023. 3

『縄文の森から』第15号 目次

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広・・・・・・・・ 3

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相
—中岳Ⅱ式土器を中心に—

宮崎 大和・・・・・・・・ 19

南九州市松木藪遺跡で出土した弥生時代後期の鉄鏃について

川口 雅之・・・・・・・・ 29

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文・・・・・・・・ 33

岩川官軍墓地の昭和8（1933）年の手紙について
—岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の墓地の配置—

湯場崎 辰巳・・・・・・・・ 43

令和3年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広

Emergence and Development of Pointers in Kagoshima Prefecture

Kurokawa Tadahiro

要旨

本稿では、鹿児島県における尖頭状石器の出土事例をまとめ、その特徴を整理した。そして、尖頭状石器周辺から出土する土器の特徴等から、出現期を縄文時代早期中葉と位置づけ、早期末まで出土する石器であることを指摘した。

キーワード 縄文時代早期中葉 尖頭状石器 尖頭器 押型文土器

1 はじめに

鹿児島県の縄文時代早期前半には、角筒形という全国的にも例を見ない器形に代表される南九州貝殻文系土器がある。早期後半になると、平椀式土器や塞ノ神式土器といった一群が多種多様な遺物と共に出土する。その中間にあたる早期中葉には、押型文土器や中原式土器といった他地域の土器が南九州でも出土し、その受容と展開に関しては研究の途上にある。このような、器形と文様等の属性分析を進めた土器研究に対し、石器研究はどちらかと言えば低調で、小稿で扱う尖頭状石器も例外ではない。

筆者は、霧島市上野原遺跡の報告書において尖頭状石器を取り上げ、「貝殻文と押型文との関係を解明する手がかりとなる石器である」と述べたことがある(黒川2000)。それから20年が経ち、志布志市有明町に所在する春日堀遺跡の報告書作成に従事する機会を得、多量の尖頭状石器を目の当たりにすることが出来た(公財セ2022)。しかしながら、報告書では基礎資料の提示のみで、十分に考察できたとは言いがたい。

そこで、小稿では、鹿児島県における尖頭状石器の現状を把握し、その時間的な位置付けについて検討することを目的とした。

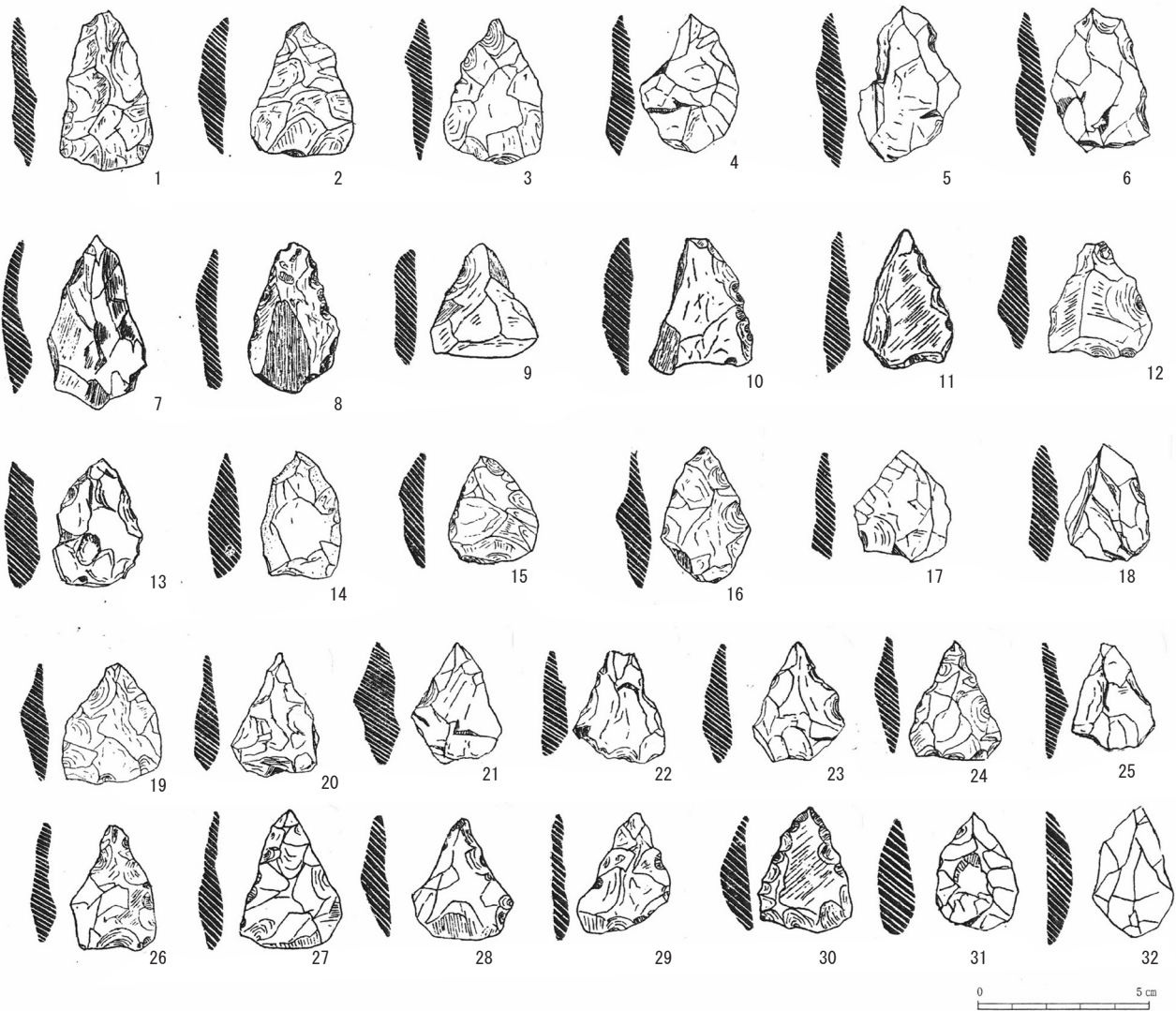
2 研究史

尖頭状石器とは、大分県速見郡日出町早水台遺跡において、尖頭石器として紹介されたものである(八幡・賀川1955)。設定以来、大分県を中心に縄文時代早期遺跡の報告書で尖頭石器あるいは尖頭状石器として紹介されてきた。早水台遺跡では、「三角形をなして、先端が剥取りなどで尖頭状をなし、明かにその部分を使用した」ものとして、5つに細分された。「a式」は、「一面に剥離面を残し他面は数回の打欠を加えて、其の先端を尖頭状に加工」するもの(第1図1~8)。「b式」は、「一面には一時的な剥離面を残し、他面には更に頂上より強度な打撃を加えた痕と見られる平坦面を残し数条の剥離面を修正することなく残している。先端は剥離の際

生じた尖頭を利用し、多少修正を加えたもの」で、「二次的な剥離面を一面にそのまま放置している」もの(第1図9~12)。「c式」は、「丸みを帯び先端が栗状に尖っている」もの(第1図13~19)。「d式」は、「錐状に尖った先端部を有し、比較的大きい剥片を入念に打ち欠き、その先端を細く尖らせたもの」である(第1図20~26)。「e式」は、「錐状の尖頭を有する」が、「d式と異なる点は周縁が非常によく修正されている」ことで、「底部はや丸みを帯びる」もの(第1図27~32)。これらは石材についても、「黒曜石の使用が皆無」であることを指摘した。用途は、a b c式はスクレイパーを兼ね、d e式はポイントと指摘し、これらは、「押型文土器に共伴する石器」として定義された(八幡・賀川1955)。

その後、大分県杵築市稲荷山遺跡においては、チャート製の石鏃を黒曜石製のものと比較し、「やや大型で挟入の深い脚部の発達した精巧な作りのグループ」と「基部挟入のない大形で幅広のグループ」に分け、後者について「早水台遺跡において分類している尖頭石器」に類似する点を述べ、重量から「鏃として同一視すべきではないかも知れない」と指摘した(横山1970)。

これらの調査を経て、大分県直入郡荻町(現在の竹田市)政所馬渡遺跡では、「使用素材が、厚味のある破片であったためか、断面は厚い」尖頭形石器と、「柳葉状」の形状であり現在石槍に分類されるものと同様に分類して報告された(井ノ上1982)。これを軸に、報告書の総括では、「尖頭形石器は、瀬戸内地方の押型文土器出土遺跡からも知られ、西北九州地方にも、多くの尖頭形石器を出土する遺跡が、分布している」ことを述べ、「西北九州の影響を考えなければならない」と指摘した(賀川・下村1982)。このように、尖頭状石器の研究は、大分県を中心に進められ、坂本嘉弘氏の菅無田遺跡の指摘によってまとめられることとなる。大分県大野郡野津町(現在の臼杵市)に所在する菅無田遺跡をまとめた坂本氏は、「尖頭石器、へう状石器、尖頭形石器、円基式石鏃と呼ばれる一群で、瀬戸内海や西九州等の早



第1図 早水台遺跡の尖頭石器

期遺跡で出土すること、「形体は縦長，横長比を見ると，縦長がやや優位な二等辺三角形を呈する。基部は若干平基が混じるが，大半は円基である」こと，石鏃などと比較して，「完形遺存率が非常に高い」こと，「量的にも石鏃と同等程度が製作されていることから，単に石鏃の一形式とは考えられず，別器種として把握される」ことを指摘した上で，「押型文土器に伴う定形石器」であるとした（坂本1986）。

大規模開発が急増する1990年代になると，出土事例は九州各地で見られるようになり，鹿児島においても認識されるようになっていく。ここからは，鹿児島県の状況を報告書を中心に整理していく。

霧島市上野原遺跡10地点では，「やや厚めの剥片を素材とし，全体的におおぶりである。調整の仕方も他と異なり，ラフな器面調整と周縁の細かな調整で先端部を作る」とその特徴をまとめている（富田2001）。これを

石鏃Ⅱ類と分類し，いわゆる石鏃であるとしながらも，「形態的にも，調整のあり方からも西北九州の縄文後期以降に見られる石鏃となら変わることはないが，時間的に掛け離れていることや漁労具として分類するための積極的傍証に欠けることから，先の基準に基づいて石鏃と分類」したことを述べている。

霧島市上野原遺跡2～7地点では，尖頭状石器について「押型文土器と共に出土することで知られている。粗い剥離と厚みのある特徴から，石鏃に形態的に類似するが用途は異なると考えられている」とした（黒川2002）。

始良市建昌城跡では，尖頭状石器を「肉厚で尖頭状の先端を伴う木葉形の平面形の石器」とし，「石鏃とは違い明確な基部を作り出さない点を重視」している。その上で，尖頭状石器や石鏃状磨石を挙げて，「時期を特定することは難しい状況にあるが，特定の時期の石器組成

を特徴づけている可能性がある」ことを指摘した（上杉2005）。

霧島市城ケ尾遺跡では、VI・VII層及びV層出土の石器において尖頭状石器を挙げている。この中で、VI・VII層が縄文時代早期に該当し、4点が図化されている。「二次加工の特徴や形態的特徴から石鏃と様相の異なる資料」を分類し、「最大長が20mm以上で基部がすぼまる形状に加工」するものとしている。この他に大型の石鏃として最大幅が20mmを越え分厚く整形されるものについて「大型石鏃」の類を設定している（馬籠・長野2003）。

薩摩川内市山口遺跡では、「ラフな剥離によって器面調整を行ういわゆる石銛型の石鏃」として石鏃の範疇で紹介された（富田2013）。

秋成雅博氏は、船引地区における様相をまとめ、「早期中葉以降の土器が主体となる遺跡では出土量が多い印象」と「定義が曖昧で、なお且つ用途等も不明瞭」と指摘し、「本石器の検討は当時の生業にかかわる問題となる可能性があり、今後定義等を明確にした上で」明らかにする必要を言及した（秋成2015）。

鹿屋市田原迫ノ上遺跡では、尖頭状石器の特徴を「先端の尖った石器で、剥片を素材とし、押圧剥離によって形状を整える。形状は石鏃もしくは石鏃の未製品に類するが、厚みがある」と紹介した（徳永・平2017）。

堂込秀人氏は、磨製石鏃を考察する中で、「尖頭器の小型のものは、石鏃よりやや大ぶりのもので石銛状であるとして、器種の消長を表で示した。この中で、石銛は草創期から早期後葉の塞ノ神式土器まで見られるとした（堂込2019）。また、南九州の縄文時代早期の石鏃を編年する際に、「石坂式土器の頃までは、石槍や石銛がかなり顕著で、その後は減少する」とより踏み込む（堂込2020）。堂込氏の指摘する石銛が筆者の言う尖頭状石器と同じものを指すかは不明だが、石器器種の消長を土器型式と組み合わせた点は、長らく低調だった南九州の石器研究を再び注目させるきっかけとなった。

大崎町荒園遺跡では、「尖頭器」として石鏃と明確に区別し紹介している（堂込ほか2022）。その中には、石銛の形状を呈する資料も含まれている。

志布志市春日堀遺跡では、「尖頭状石器は、多くの場合、石鏃未製品と報告されている例が多い」という現状を述べ、比較的大型の石鏃の重量と、尖頭状石器の平均重量とを比べ、尖頭状石器が石鏃よりも重いことを指摘した。そして、尖頭状石器の中で、最大長が2cm程度の比較的小さなグループでも平均重量が重く、自ずと厚みがあることを示し、「厚手の剥片を素材とし、縁辺部を大きく剥離している。押圧剥離をあまり用いないこともあり、素材中央部に厚みが残ることもあり断面は厚い」という特徴を改めて述べ、「大分県菅無田遺跡において坂本氏が指摘した傾向に概ね合致する」点と「尖頭状石器が出土している遺跡を概観すると、押型文土器が出土している遺跡に多く見られ」、押型文土器と共に出土する石器として指摘した（黒川2022）。

3 尖頭状石器の特徴

ここでは、尖頭状石器の特徴について先行研究や先に挙げた調査報告による事例や分析を元に整理する。

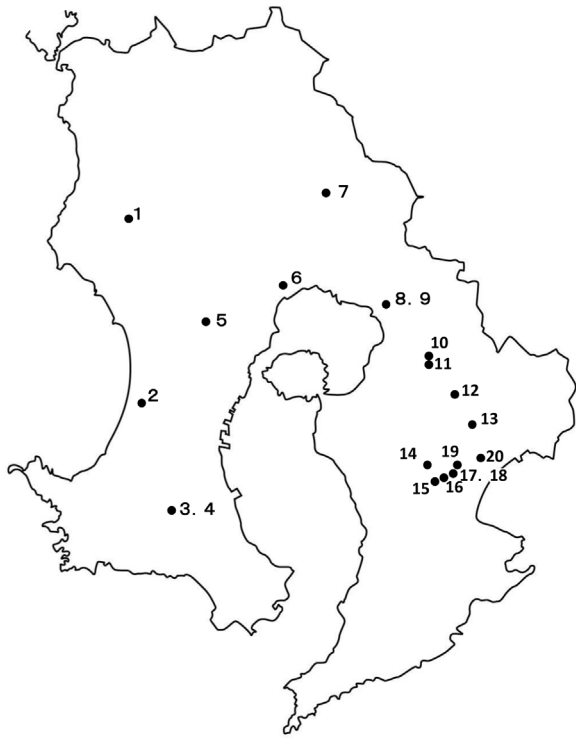
はじめに、形状を整理すると、やや長めの正三角形から二等辺三角形より短いものが多く、短軸を1とした時、対する長軸は数例を除いて1.5以下となり、槍先や長身鏃程の形状とはならない。1つ1つの剥離面が大きく、素材面を残すものも見られるなど、調整は石鏃ほど入念には行われぬ傾向にある。このため、断面観がきれいな紡錘形になるものは少なく、凸凹とした印象に仕上がる。厚みは、石鏃よりも厚く、短軸の半分程に近いものもあるため、コロコロとした印象を受ける。この厚みは、先端部に比べて中央から基部にかけて極端に厚く、また、最大厚は、中央よりもやや基部側になるものが多い。この場合、断面形状がシイの実状を呈する。先端部は、石鏃や尖頭器と同様に鋭利で、突き刺すことを目的としていると理解出来るが、必ずしもいねいな作出ではない。基部は、平基やわずかに円基を呈するもの、小さな抉りを施すものが見られる。これは、坂本氏が「大半は円基」と指摘した状況（坂本1986）とはやや異なる。本県においては、平基を呈するものも一定数存在し、具体的な比率は不明ながらも、平基と円基状を呈するものが多く、抉りを施すものは少ない傾向のようである。この平基と円基の差は、大ぶりの剥離の影響が大きいと考えられ、両側端部の加工においてこのことが作用したと考えたい。形状はこのように整理できるが、一方でスクレイパーや石鏃未製品との区別は難しく、尖頭器等との境界も難しい。このため、小稿では尖頭状という表現を用いており、将来機能面が明確になった場合、ふさわしい名称が付与されることを期待する。また、近年の調査において、早期の各時期では木葉形の尖頭器の出土事例が増加しているが、この点は別稿で検討したい。

次に、この特徴を元に鹿児島県下の尖頭状石器出土遺跡をまとめてみたい。報告書に掲載されているものを中心に可能な範囲で実見し、出土遺跡を表1・第2図のとおりまとめた。第4～6図はその主な実測図で、表2・3が観察表である。第3図で使用石材について見ると、チャートが多く、坂本氏の指摘と同様の結果が導き出される（坂本1986）。一方で黒曜石の利用も一定数認められることから、非黒曜石の石材利用を意識しながらも、柔軟に獲得できる石材を用いていると言えよう。確認出来たものについて石材別にその割合を示したものが第3図である。

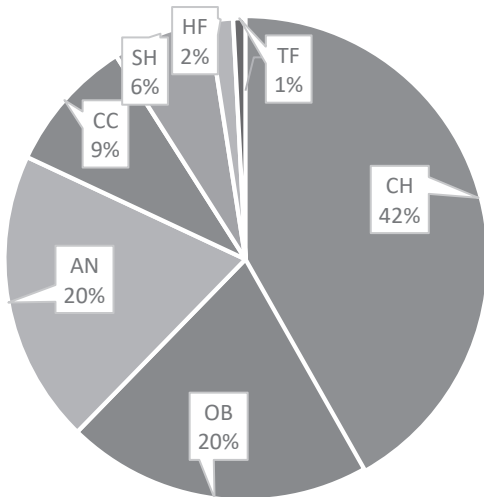
次に、出土遺跡の分布を見ていきたい。筆者が知り得た限りでの遺跡数であり、どの程度実態に迫れたかやや不安であるが、薩摩半島と大隅半島間わずら範囲に分布している状況が認められる。特に大隅半島に多いが、これは、近年の発掘調査の件数が大隅半島に多いということが考えられ、地域的な偏りはほとんど見られないと推察する。加えて、沿岸部や山間部と言った地理的環境の

表1 尖頭状石器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地
1	山口遺跡	薩摩川内市都町
2	桜谷遺跡	南さつま市金峰町大野
3	南一ノ谷遺跡東側	南九州市知覧町東別府
4	前原遺跡西側	南九州市知覧町東別府
5	湯屋原遺跡	鹿児島市郡山町東俣
6	建昌城跡	始良市始良町西餅田
7	中尾田遺跡	霧島市横川町中ノ
8	上野原遺跡4地点	霧島市国分上野原縄文の森
9	上野原遺跡10地点	霧島市国分上野原縄文の森
10	城ヶ尾遺跡	霧島市福山町佳例川
11	桐木耳取遺跡	曾於市末吉町諏訪方
12	出水平遺跡	曾於市大隅町月野
13	蕨野B遺跡	志布志市松山町新橋
14	天神段遺跡	曾於郡大崎町野方
15	田原迫ノ上遺跡	鹿屋市串良町細山田
16	細山田段遺跡	曾於郡大崎町西持留
17	永吉天神段遺跡	曾於郡大崎町永吉
18	荒園遺跡	曾於郡大崎町仮宿
19	浜場遺跡	志布志市有明町野神
20	春日堀遺跡	志布志市有明町蓬原



第2図 尖頭状石器出土遺跡位置図



第3図 使用石材の状況

差もないようである。このことから、本県における石器の一器種として位置付けが可能であると言えよう。

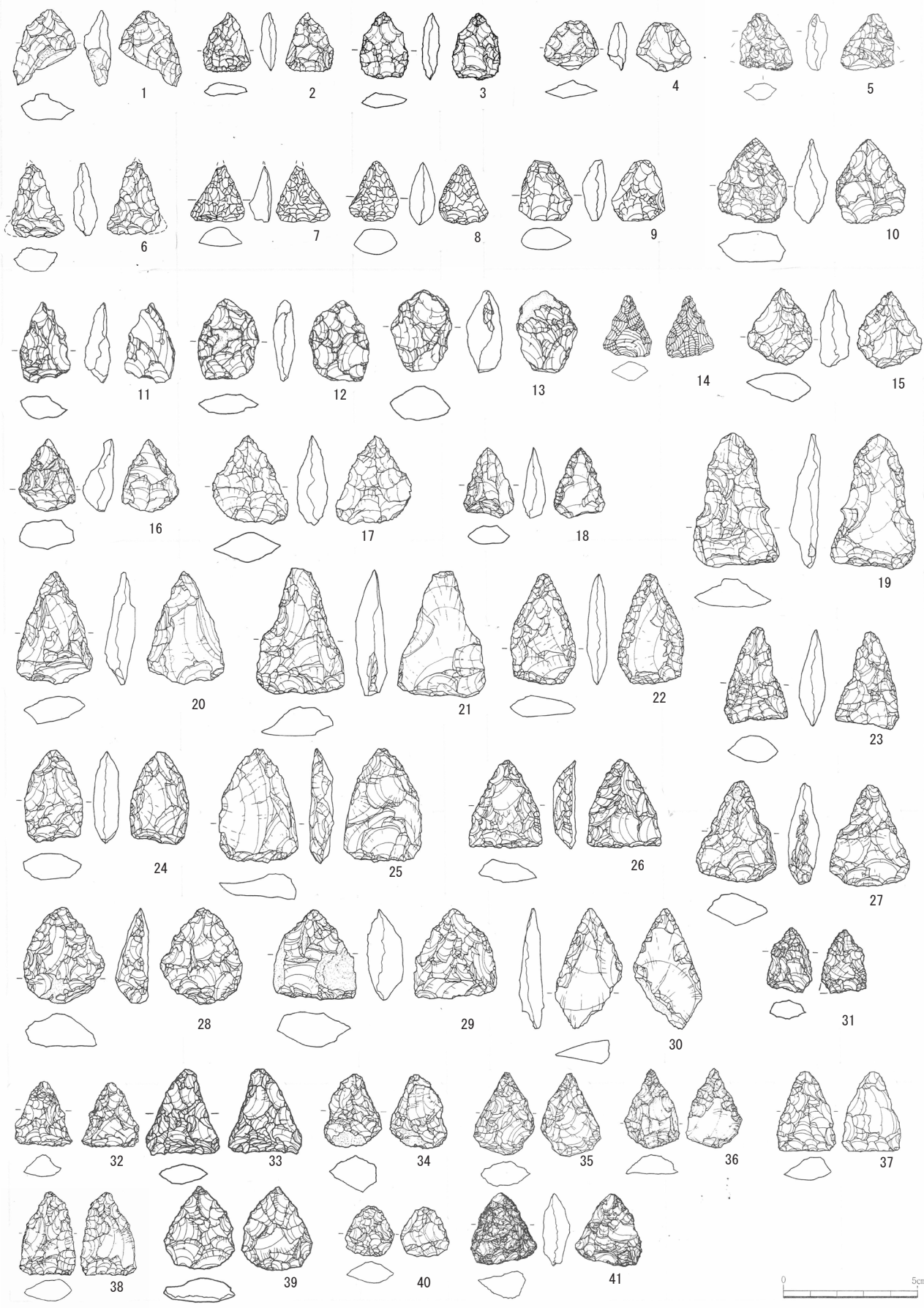
4 尖頭状石器と土器型式

ここでは、尖頭状石器がどのような土器型式と共に出土しているかを整理する。鹿児島県では、桜島テフラである薩摩火山灰層と鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰

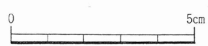
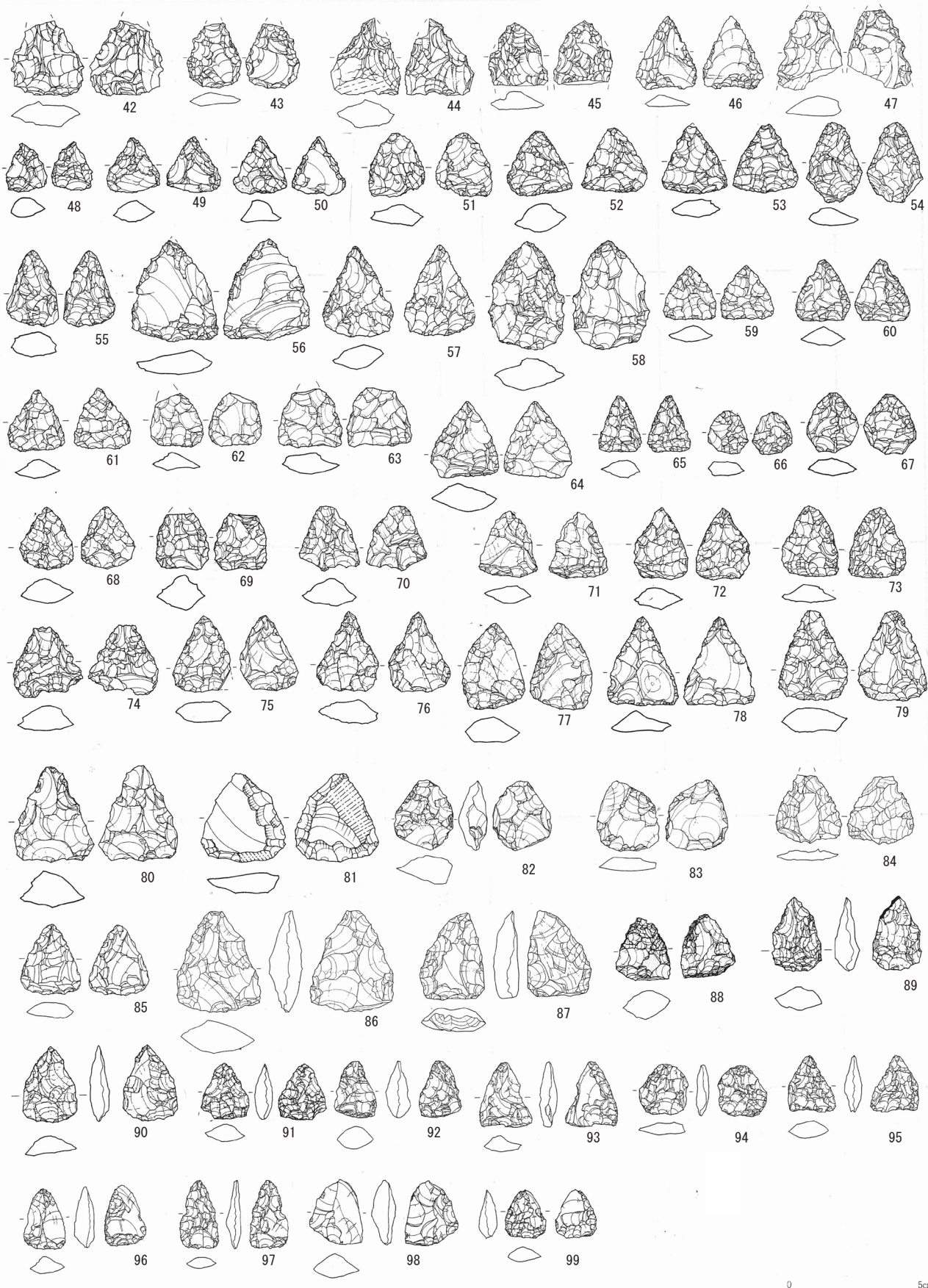
層とに挟まれた層を縄文時代早期の遺物包含層として広く認識している。両者に挟まれたこの層からは、多くの場合、早期前葉から後葉にかけての複数の土器型式が混在して出土する。上下2層に分層出来る遺跡もあるが、この場合下層の黒褐色土層からは前葉から中葉の土器が、上層の茶褐色土層からは中葉から後葉の土器が出土する傾向がある。だが、厳密に尖頭状石器に伴う土器型式を特定することは難しい。その中であって、平面分布などから比較的時期を絞り込める可能性のある遺跡が認められる。よって、これらの遺跡を抽出し、その出土状況等を紹介していきたい。

山口遺跡（第7図）

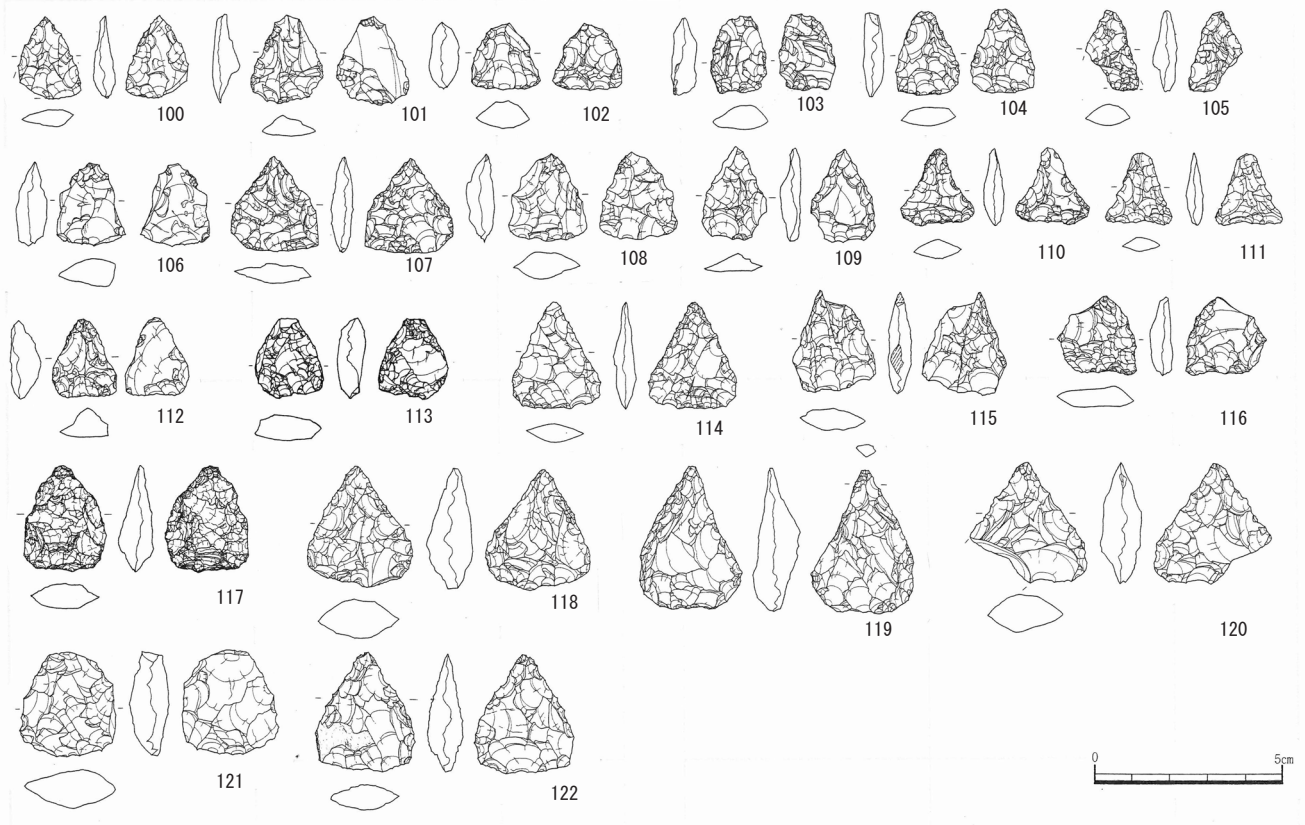
薩摩川内市都町に所在する。土器は1類から7類に分類され、このうちの7類が当遺跡の主体を成す。この7類は細部の特徴からさらに9つに分けられているが、これらの土器はいわゆる二重口縁の塞ノ神式土器である。石器は、4箇所所で石材の集中ブロックを検出し、このうち隣接する第1ブロックと第2ブロックの中間地点から1点が出土している。この資料と同一区から出土している土器を観察表から抽出すると第7図に掲載したとおりとなり、この多くは7類である。よって、当該資料は二重口縁の塞ノ神式土器期と絞り込むことが出来る（鹿理セ2013）。



第4図 鹿児島県下の尖頭状石器①



第5図 鹿児島県下の尖頭状石器②



第6図 鹿児島県下の尖頭状石器③

上野原遺跡4地点(第8図)

霧島市国分に所在する。第4地点は、国指定史跡の範囲である2・3地点の東に浅い谷を挟んで隣接する。土器は、倉園B式土器と石坂式土器、辻タイプ、下剥峯式土器をわずかに含むが、桑ノ丸式土器と押型文土器を中心に、平栴式土器と塞ノ神式土器もわずかに出土している。尖頭状石器は4点確認出来る。加栗山式土器や吉田式土器といった南九州貝殻文系土器は出土しておらず、時期を中葉から後葉に絞ることの出来る遺跡である(鹿埋セ2002)。

城ヶ尾遺跡(第9図)

霧島市福山町に所在する。遺跡は、A・B・Cの3つの調査区に分かれる。土器は、IからX類に分類されている。このうち、IからIII類は前平式土器、吉田式土器、石坂式土器で、B・C区に集中し、A区にはわずかに数点出土するにとどまる。一方のA区には、中原式土器や押型文土器、手向山式土器・平栴式土器・塞ノ神式土器などが出土し、このA区に尖頭状石器4点が確認出来る。さらに、C3・D2区とE・F6区の2箇所出土が分かれ、塞ノ神A・B式土器を中心とする環状分布と重なる(鹿埋セ2003)。

出水平遺跡(第10図)

曽於市大隅町に所在する。土器は12類に分類されている。南九州貝殻文系土器の中でも後半の一群である下剥

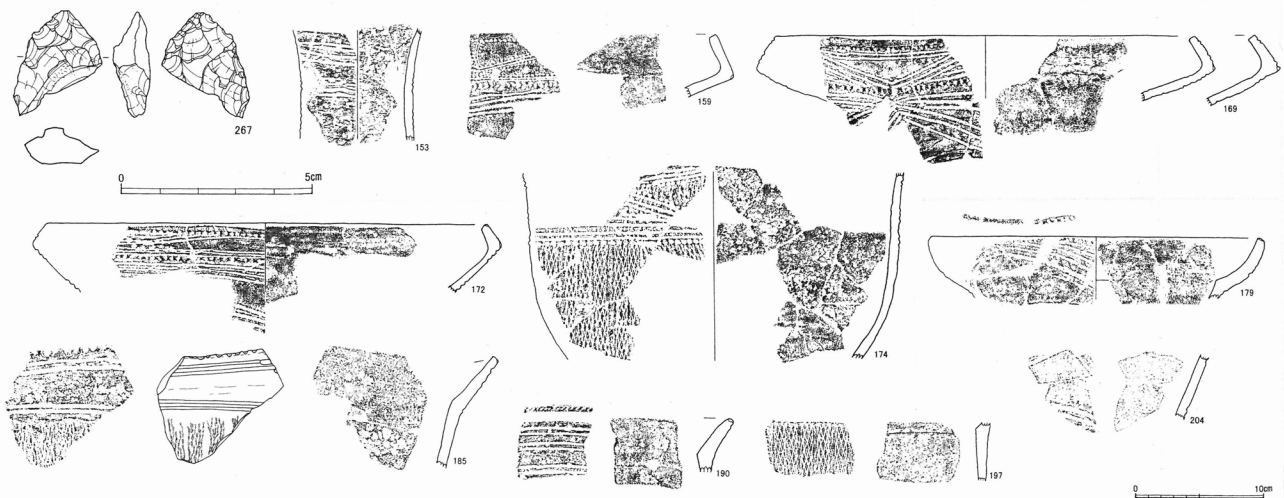
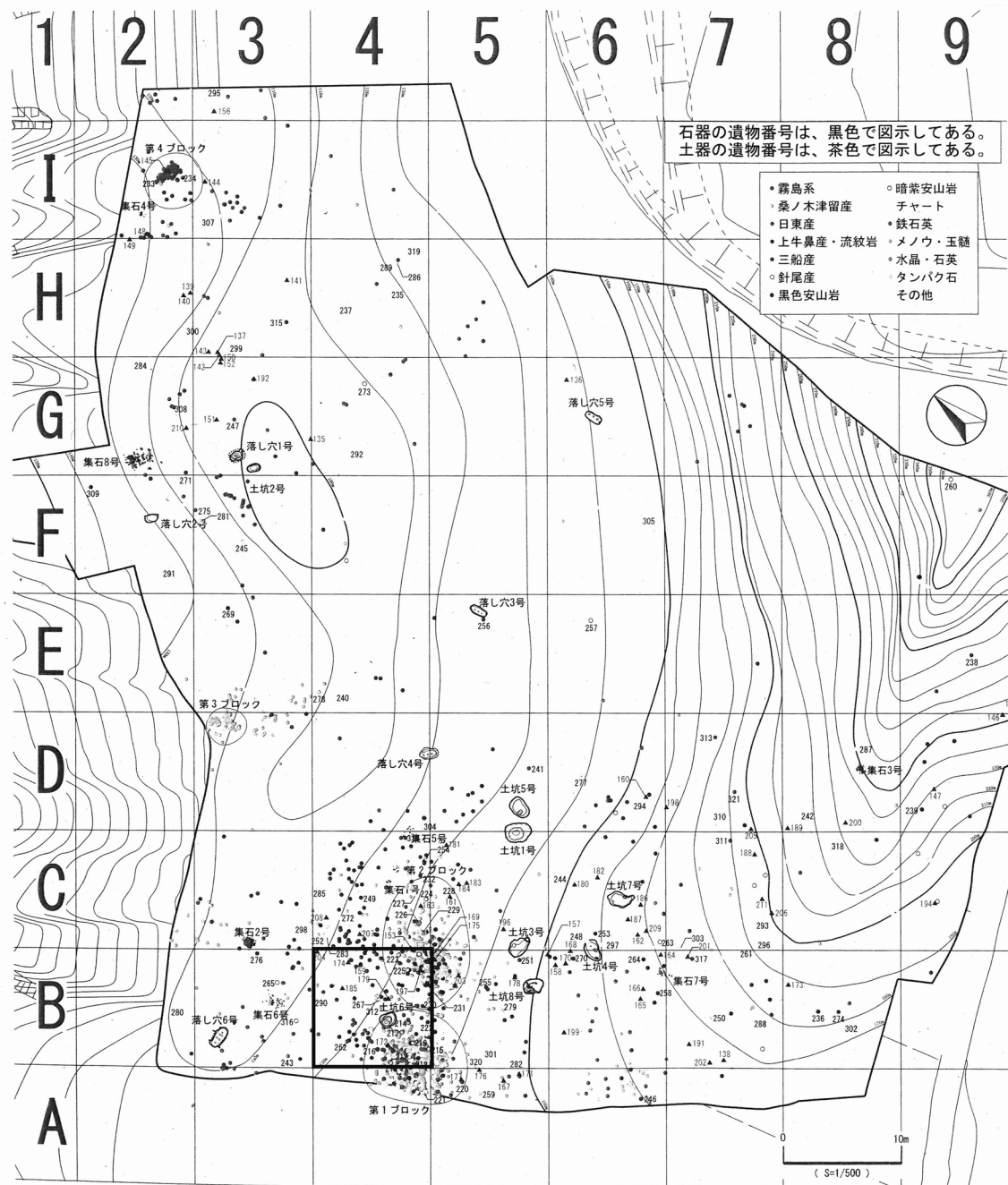
峯式土器や桑ノ丸式土器が出土しているが、約4割が押型文土器である。これらの土器の包含層は、VII・VIII層であり、この層から尖頭状石器1点が確認出来る(鹿埋セ2002)。

蕨野B遺跡(第11図)

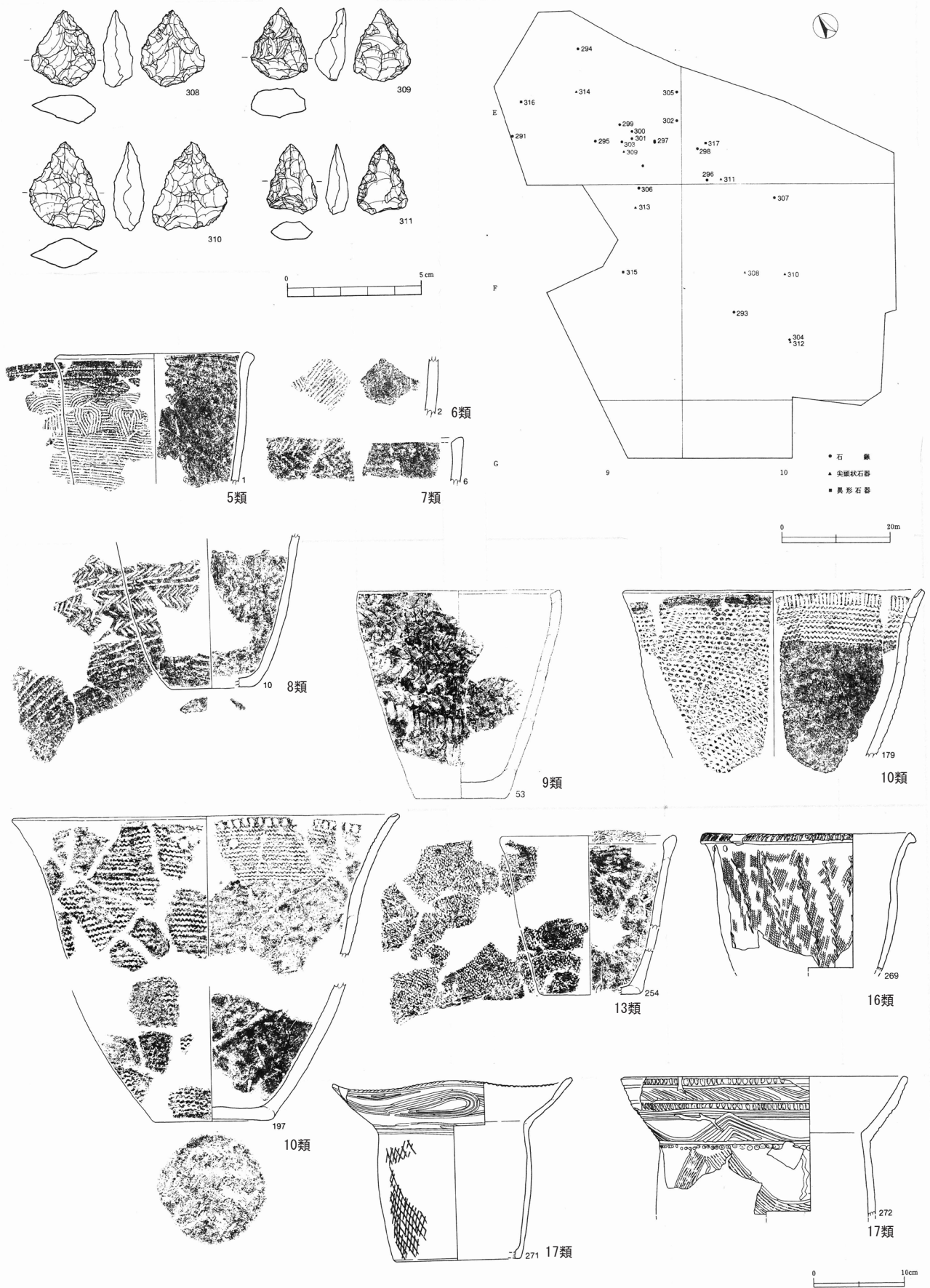
志布志市松山町に所在する。土器はI類からXIII類に分類され、前葉から後葉の各土器型式が出土している。石器は、4つのエリアに大別され、さらに18のブロックが確認されている。尖頭状石器は、遺跡全体で6点報告されている。これらの内、第1エリア第2ブロックでは、1点の尖頭状石器が出土しており、土器は、XII・XIIIb類土器のみが出土し、時期を絞り込む良好な出土状況と言える。このブロックは、C・D-5・6区であり、ここから出土した土器は第11図に示したように変形撚糸文土器とその底部である。よって、この尖頭状石器は変形撚糸文土器が顕著に見られる手向山式土器期のもものと絞られよう(鹿埋セ2007)。

5 鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

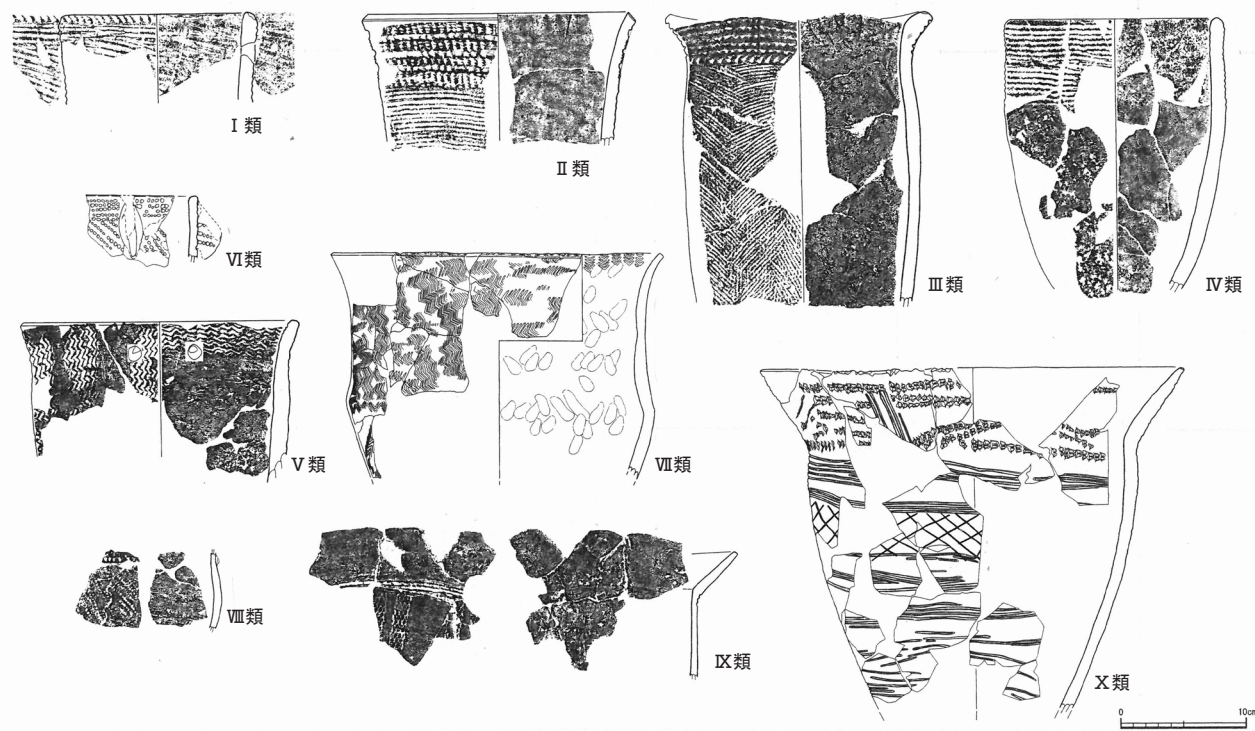
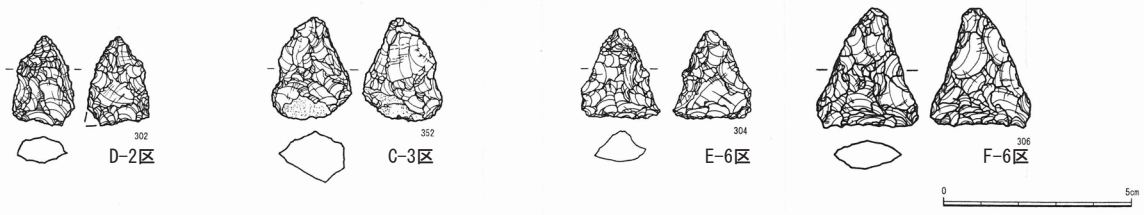
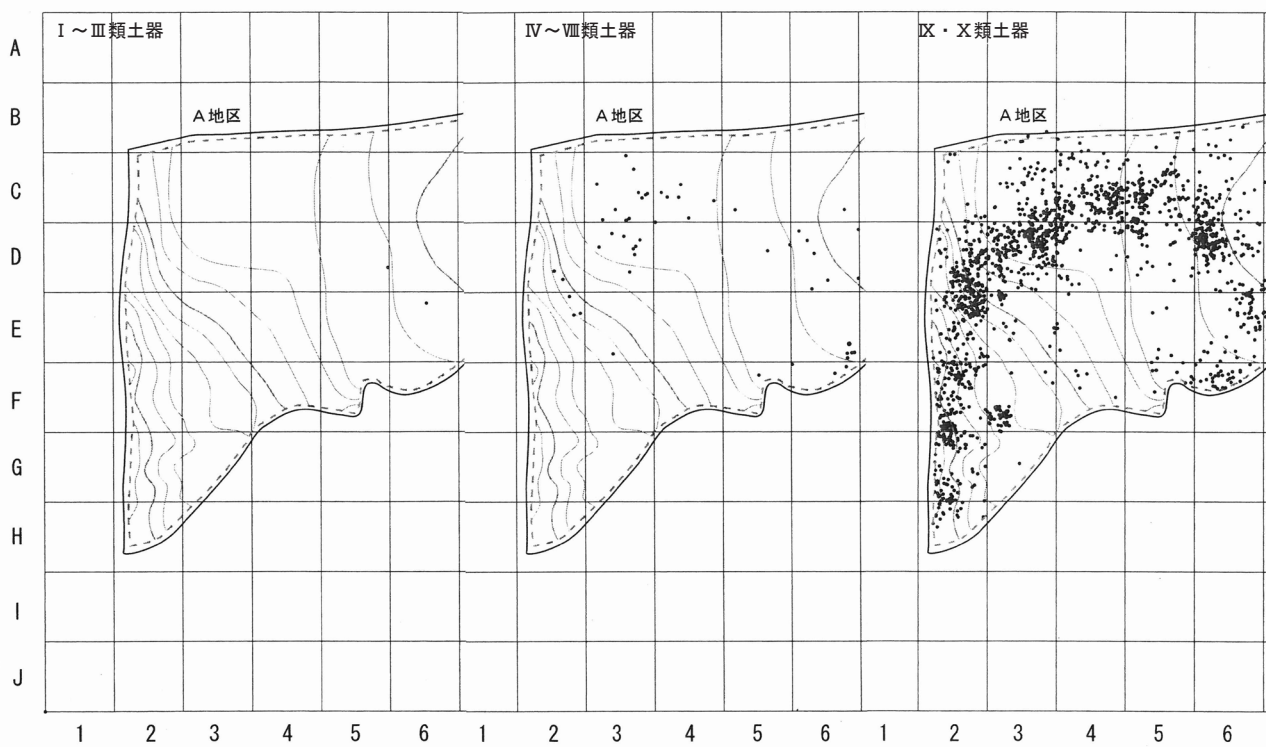
各遺跡ごとの尖頭状石器と土器型式の出土状況を見てきた。現時点では、明確に時期を特定できる資料は少ないながらも、早期中葉から後葉を通して形状変化が少なく、また、その期間を通じて存在していた可能性が見えてきた。繰り返しになるが、城ヶ尾遺跡や上野原遺跡4地点のように、南九州貝殻文系土器の岩本式土器から吉



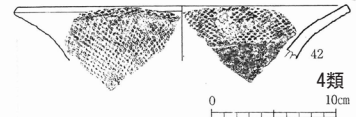
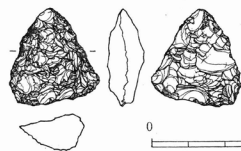
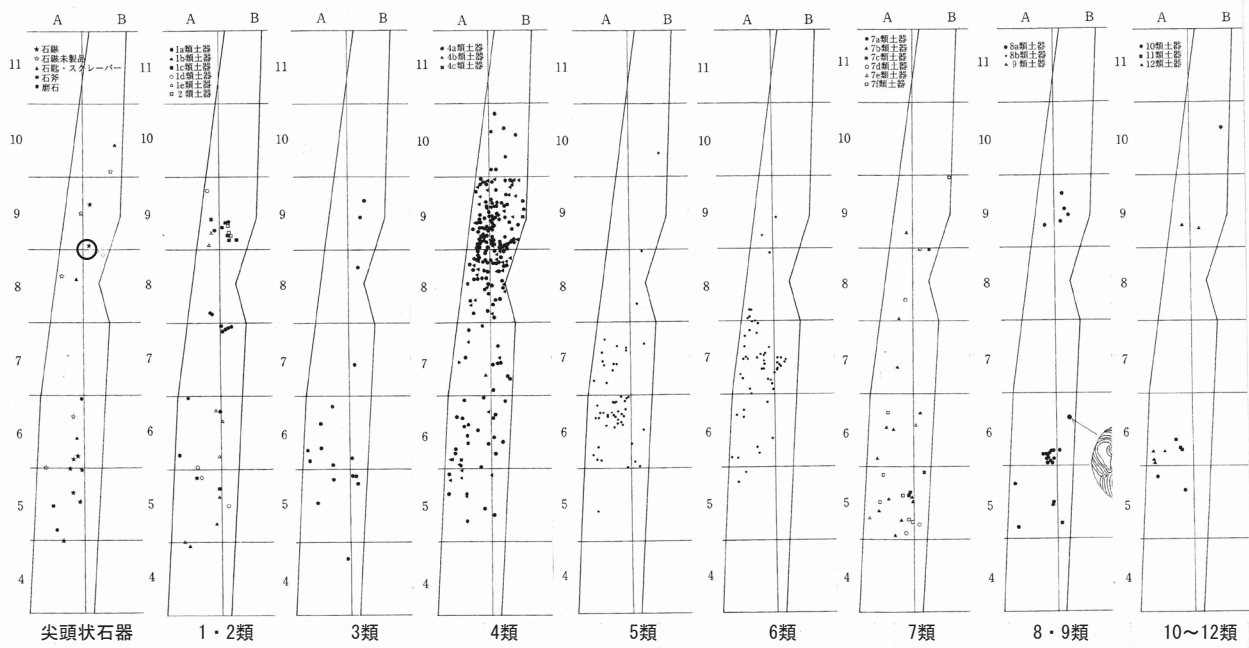
第7図 山口遺跡・B-4区出土の尖頭状石器と土器



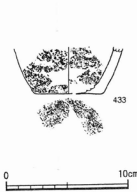
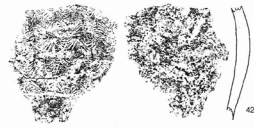
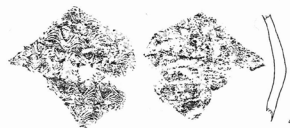
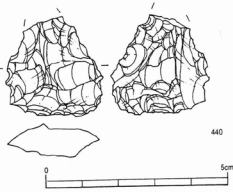
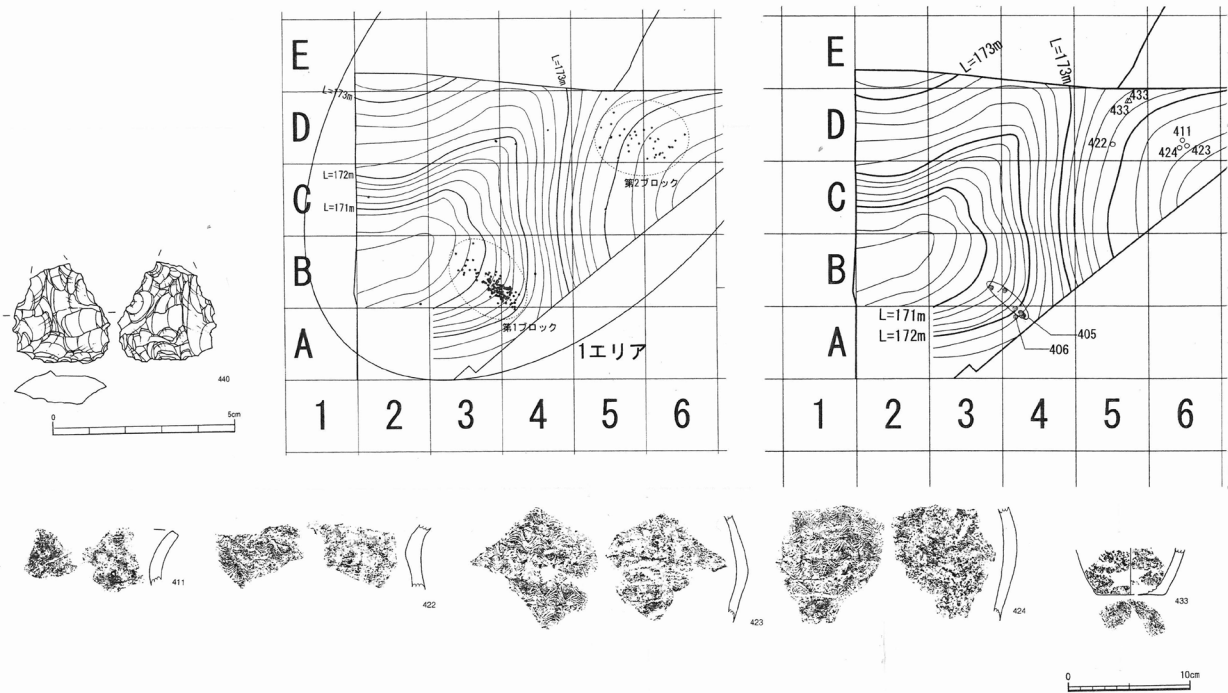
第8図 上野原遺跡4地点出土の尖頭状石器と土器



第9図 城ヶ尾遺跡A地区出土の尖頭状石器と土器



第10図 出水平遺跡出土の尖頭状石器と土器



第11図 蕨野B遺跡1エリア第2ブロック出土の尖頭状石器と土器

田式土器にかけての段階の遺跡ないしは遺物出土区域からは尖頭状石器はほとんど確認出来ない。その一方で、押型文土器や平椀・塞ノ神式土器と言った早期中葉から後葉にかけての土器が出土する遺跡では尖頭状石器も出土している。

以上の点をまとめると、尖頭状石器の出現は、南九州貝殻文系土器においては石坂式土器以降、外来系土器としては、押型文土器や中原式土器などを含む早期中葉とし、平椀・塞ノ神式土器の後葉にかけての土器とも共伴する石器であると言える。筆者はこれまで出現期を押型文土器と漠然と述べるにとどまっていたが、今回の作業でより踏み込んで紹介出来たと思う。鹿児島県の発掘調査では、包含層から出土する遺物を点上げしてその位置を記録しており、この成果を丹念に積み重ねていくことで、共伴関係は整理されていくものと期待したい。

尖頭状石器とは突き刺すことを目的とした重量のある石器である。石材選択に特徴があり、チャートや珪質岩、安山岩や玉髓などの非黒曜石を多用する。前期以降に見られる石銛と出自や系譜が同じであるのかは現時点では不明であり（註1）、石鏃未製品やスクレイパーなどとの区別も容易ではない。このことは先学によって指摘されているところである。そして、尖頭状石器は、鹿児島県では縄文時代早期中葉に出現し、早期後半まで出土していることがわかった。この早期中葉段階の本県を含む南九州は、南九州貝殻文系土器の分布域に押型文土器や中原式土器と言った外来系とされる土器が見られる段階である。その前段階において器種として確認されない石器が出土すると言うことは、単に土器のみが移動あるいは展開するのではなく、様々な生活様式の変化をもたらしたとことを示唆していると考えたい。むろん、時間的な前後関係も考慮しなくては行けないが、尖頭状石器そのものは、前平式土器や吉田式土器といった早期前葉の南九州貝殻文系土器を使用する集団には見られない石器の器種である。今後は、筆者の見落としも含め、異なる素材の道具など、無いことの証明を改めて進め、その出現の背景をより明らかにしていく必要がある。一方で、木葉形の尖頭器は鹿児島市前平遺跡や前原遺跡といった古手の南九州貝殻文系土器と共に出土している。この点は注意が必要である（註2）。

さて、石坂式土器以降に押型文土器との接点が生まれ、南九州で出土する土器の施文手法が貝殻施文から回転施文へと変化する。その背景には、食料獲得に対する変化、気候や動植物相も含めた環境の変化とそれによる生活様式の変化等が想定されるが、未だに解決できていない。多角的な検討がより求められよう（註3）。

6 おわりに

今回の報告のきっかけとなった春日堀遺跡は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査された縄文時代早期の集落遺跡で、竪穴建物跡30軒、連穴土坑121基をはじめとする遺構群と1万点以上の遺物から成る。これらの

膨大な情報は、個々の情報を鈍らせ、また、担当の力量によって未消化のまま問題の先送りを余儀なくさせてしまった。加えて、過去に報告したものが今回改めて検討した結果、自身の器種認定の甘さを露呈する結果にもなった。反省である。だが、春日堀遺跡の整理作業に従事でき、尖頭状石器について考えることが出来たことは幸いであった。東九州自動車道建設に伴って発掘調査された遺跡は数多く、その調査対象面積も広大で遺物量も多い。この30年余りで得られた情報は計り知れない。今後も、遺跡から得られる情報をより多く活用し、当該期の研究を進めて行かなくてはと思う。引き続き精進していきたい。

謝辞

春日堀遺跡報告書作成では、長野眞一、西谷彰、鮫島慎吾、佐藤武大、上床真、兒島直美、松山初音の各氏から、業務に従事しながら多くの示唆を得た。また、資料の実見や小稿執筆において多くのご教示を得ることが出来た。末筆であるが、名前を記し感謝申し上げたい。

岩元康成 今村結紀 相美伊久雄 坂本嘉弘
高吉伸弥 堂込秀人 深野信之 馬籠亮道 宮崎大和

註

1) 枕崎市奥木場遺跡では、縄文時代早期とされる石銛が出土している。研究史において触れた荒園遺跡も同様である。また、城ヶ尾遺跡においても石銛の形状に酷似する資料が出土している。これらが尖頭状石器とどのような関係になるか、事例の増加を待ちたい。

2) 縄文時代草創期から早期の尖頭器をまとめた高吉伸弥氏は、資料集成を行った上で、これらを製作技術の観点から2つに大別している（高吉2021）。

3) 重量が必要な狩猟具は、対象動物が中・大型で比較的近い距離から強い殺傷能力が必要な場合と、水の抵抗や浮力に対する場合の2つしか頭に浮かばない。文明社会住人の経験と思考力の限界である。この点に関して民俗事例などを含めて精査したい。

【引用・参考文献】

- 秋成雅博(2015)「船引地区遺跡群における縄文時代早期の石器の様相」『貝殻文と押型文』宮崎県考古学会県南実行委員会
- 井ノ上秀文(1982)「第3章遺物 b 石器類」『政所馬渡』別府大学附属博物館
- 上杉彰紀(2005)「第三章 3 出土遺物の分類」『第IX章 2 第VI・VII層の調査』『建昌城跡』始良町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)始良町教育委員会
- 賀川光夫・下村悟史(1982)「第4章 研究と考察」『政所馬渡』別府大学附属博物館
- 黒川忠広(2000)「第9章第4節縄文時代早期の石器につ

- いて」『上野原遺跡第2～7地点縄文時代早期編』
鹿兒島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(41)
- 黒川忠広(2022)「第VI章第2節 2石器」『春日堀遺跡
2縄文時代早期編』(公財)埋蔵文化財調査センター
発掘調査報告書(48)
- 坂本嘉弘(1986)「2縄文時代早期の遺物(2)石器2」
尖頭状石器」『菅無田遺跡』野津町教育委員会
- 高吉伸弥(2021)「第VI章総括 第2節遺物 3尖頭器」
『山ノ段遺跡』(公財)埋蔵文化財調査センター 発
掘調査報告書(36)
- 堂込秀人(2019)「南九州縄文時代の磨製石鏃考」『中山
清美と奄美学』奄美考古学会
- 堂込秀人(2020)「南九州縄文時代早期の石鏃の編年につ
いて」『遺跡学研究の地平—吉留秀敏氏追悼論文集
—』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会
- 堂込秀人ほか(2022)「第IV章第2節4遺物(石器)」
『荒園遺跡2』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘
調査報告書(43)
- 徳永愛雄・平美典(2017)「第3節出土遺物の分類2石
器」『田原迫ノ上遺跡2』(公財)埋蔵文化財調査セ
ンター発掘調査報告書(15)
- 富田逸郎(2001)「第4章第8節2(3)石器・石製品」
『上野原遺跡(第10地点)』鹿兒島県立埋蔵文化財セ
ンター発掘調査報告書(28)
- 富田逸郎(2013)「第4節 縄文時代早期の調査 3遺物
(2)石器」『山口遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(179)鹿兒島県立埋蔵文化財セ
ンター
- 馬籠亮道・長野眞一(2003)「第IV章第4節 縄文時代
の石器」『城ヶ尾遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(60)
- 八幡一郎・賀川光夫(1955)『早水台』大分県文化財調査
報告第3輯 大分県教育委員会
- 横山邦継(1970)「V 石器」『稻荷山遺跡緊急発掘調査』
大分県文化財調査報告第20・21合輯 大分県教育委員会
- センター発掘調査報告書(25)
- (2022)『荒園遺跡2』(公財)埋蔵文化財調査セン
ター発掘調査報告書(43)
- (2022)『春日堀遺跡2縄文時代早期編』(公財)
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(48)
- 鹿兒島県立埋蔵文化財センター
- (2001)『上野原遺跡(第10地点)』鹿兒島県立埋
蔵文化財センター発掘調査報告書(28)
- (2002)『上野原遺跡第2～7地点縄文時代早期編』
鹿兒島県立埋蔵文化財センター発掘調査報
告書(41)
- (2002)『出水平遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(43)
- (2003)『城ヶ尾遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(60)
- (2005)『桐木耳取遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(91)
- (2007)『蕨野B遺跡ほか』鹿兒島県立埋蔵文化財セ
ンター発掘調査報告書(109)
- (2009)『桜谷遺跡ほか』鹿兒島県立埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書(138)
- (2013)『山口遺跡』鹿兒島県立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書(179)
- 郡山町教育委員会(2003)『湯屋原遺跡』郡山町埋蔵文
化財発掘調査報告書(2)
- 知覧町教育委員会(2003)『前原遺跡群』知覧町埋蔵文
化財発掘調査報告書第11集

【発掘調査報告書】

- 始良町教育委員会(2005)『建昌城跡』始良町埋蔵文化
財発掘調査報告書(10)
- 有明町教育委員会(2004)『浜場遺跡・下堀遺跡』有明
町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
- 鹿兒島県教育委員会(1981)『中尾田遺跡』鹿兒島県埋
蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 鹿兒島県教育委員会・(公財)埋蔵文化財調査センター
(2017)『永吉天神段遺跡2第2地点—1』(公財)
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(13)
- (2017)『田原迫ノ上遺跡2』(公財)埋蔵文化財調
査センター発掘調査報告書(15)
- (2018)『天神段遺跡3』(公財)埋蔵文化財調査セ
ンター発掘調査報告書(18)
- (2019)『細山田段遺跡1』(公財)埋蔵文化財調査

表2 尖頭状石器観察表①

遺跡番号	遺跡名	資料番号	報告書掲載番号	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	短軸 : 長軸	幅 : 厚さ
1	山口遺跡	1	267	CC	2.8	2.3	1.0	3.9	1 : 1.2	1 : 0.4
2	桜谷遺跡	2	659	CH	2.2	1.8	0.6	1.7	1 : 1.2	1 : 0.3
2	桜谷遺跡	3	661	CC	2.5	1.8	0.7	2.7	1 : 1.4	1 : 0.4
2	桜谷遺跡	4	702	CH	1.8	2.0	0.7	2.2	1 : 0.9	1 : 0.4
2	桜谷遺跡	5	703	CH	2.3	(2.0)	0.6	(2.6)	-	-
2	桜谷遺跡	6	713	CC	(2.7)	(2.0)	0.9	(3.6)	-	-
3	南一ノ谷遺跡東側	7	9	OB	2.0	2.0	0.8	2.0	1 : 1.0	1 : 0.4
3	南一ノ谷遺跡東側	8	10	CC	2.3	1.8	1.0	1.8	1 : 1.3	1 : 0.5
4	前原遺跡西側	9	52	OB	2.3	2.0	0.9	3.3	1 : 1.1	1 : 0.5
5	湯屋原遺跡	10	885	CC	3.1	2.6	1.3	8.1	1 : 1.2	1 : 0.5
6	建昌城跡	11	1	CC	2.9	1.8	0.8	4.0	1 : 1.6	1 : 0.4
6	建昌城跡	12	5	CC	3.0	2.2	0.7	4.0	1 : 1.4	1 : 0.3
6	建昌城跡	13	8	OB	3.0	2.3	1.1	9.0	1 : 1.3	1 : 0.5
7	中尾田遺跡	14	430	OB	2.3	1.8	0.7	1.9	1 : 1.3	1 : 0.4
8	上野原遺跡4地点	15	308	CH	2.9	2.4	1.1	5.7	1 : 1.2	1 : 0.5
8	上野原遺跡4地点	16	309	CH	2.7	2.2	1.2	5.4	1 : 1.3	1 : 0.5
8	上野原遺跡4地点	17	310	CH	3.3	2.8	1.2	7.3	1 : 1.2	1 : 0.4
8	上野原遺跡4地点	18	311	CH	2.6	1.9	0.9	3.0	1 : 1.4	1 : 0.4
9	上野原遺跡10地点	19	7	AN	4.9	3.1	1.0	10.8	1 : 1.6	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	20	8	AN	4.2	2.8	0.9	9.7	1 : 1.5	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	21	9	AN	4.7	3.2	1.1	4.0	1 : 1.5	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	22	10	AN	4.1	2.5	0.8	7.8	1 : 1.6	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	23	11	OB	3.7	2.4	0.9	5.6	1 : 1.5	1 : 0.4
9	上野原遺跡10地点	24	12	AN	3.3	2.2	0.9	7.9	1 : 1.5	1 : 0.4
9	上野原遺跡10地点	25	13	AN	4.1	2.9	0.9	9.9	1 : 1.4	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	26	14	OB	3.2	2.7	0.9	6.0	1 : 1.2	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	27	15	AN	3.7	3.0	1.0	9.7	1 : 1.2	1 : 0.3
9	上野原遺跡10地点	28	16	OB	3.5	3.0	1.2	10.8	1 : 1.2	1 : 0.4
9	上野原遺跡10地点	29	17	OB	3.3	3.1	1.3	11.8	1 : 1.1	1 : 0.4
9	上野原遺跡10地点	30	18	AN	4.5	2.5	0.8	7.3	1 : 1.8	1 : 0.3
10	城ヶ尾遺跡	31	302	OB	(2.4)	(1.7)	0.8	(3.0)	-	-
10	城ヶ尾遺跡	32	304	SH	2.4	2.2	0.8	3.1	1 : 1.1	1 : 0.4
10	城ヶ尾遺跡	33	306	SH	3.2	2.7	0.9	5.7	1 : 1.2	1 : 0.3
10	城ヶ尾遺跡	34	352	OB	2.7	2.2	1.3	5.4	1 : 1.3	1 : 0.6
11	桐木耳取遺跡	35	1017	OB	3.1	2.3	1.0	6.6	1 : 1.4	1 : 0.4
11	桐木耳取遺跡	36	1327	CH	3.0	2.1	0.6	3.5	1 : 1.4	1 : 0.3
11	桐木耳取遺跡	37	1329	CH	3.0	2.2	0.9	4.7	1 : 1.4	1 : 0.4
11	桐木耳取遺跡	38	1330	AN	3.1	2.1	0.8	4.6	1 : 1.5	1 : 0.4
11	桐木耳取遺跡	39	1331	SH	3.1	2.6	0.9	5.8	1 : 1.2	1 : 0.3
11	桐木耳取遺跡	40	1751	OB	1.9	1.8	0.8	2.4	1 : 1.0	1 : 0.4
12	出水平遺跡	41	273	CC	2.8	2.5	1.1	5.0	1 : 1.1	1 : 0.4
13	蕨野B遺跡	42	440	SH	(2.8)	2.7	0.9	6.8	-	1 : 0.3
13	蕨野B遺跡	43	518	CH	(2.6)	2.2	0.5	2.9	-	1 : 0.2
13	蕨野B遺跡	44	519	CH	(3.1)	2.8	1.1	8.0	-	1 : 0.4
13	蕨野B遺跡	45	522	OB	(2.5)	2.4	0.7	3.8	-	1 : 0.3
13	蕨野B遺跡	46	570	CH	2.9	2.4	0.5	3.3	1 : 1.2	1 : 0.2
13	蕨野B遺跡	47	571	CH	(3.2)	(2.6)	0.8	5.9	-	-
14	天神段遺跡Ⅶ層	48	1917	OB	1.7	1.5	0.7	1.4	1 : 1.2	1 : 0.5
14	天神段遺跡Ⅶ層	49	1919	CC	2.0	1.9	0.9	3.0	1 : 1.0	1 : 0.5
14	天神段遺跡Ⅶ層	50	1922	AN	2.0	1.9	0.8	2.0	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅶ層	51	1924	CC	2.3	2.1	0.9	3.2	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅶ層	52	1926	AN	2.4	2.4	1.1	4.2	1 : 1.0	1 : 0.5
14	天神段遺跡Ⅶ層	53	1928	CH	(2.5)	2.4	0.7	3.0	-	1 : 0.3
14	天神段遺跡Ⅶ層	54	1930	CH	2.9	2.0	0.6	3.2	1 : 1.5	1 : 0.3
14	天神段遺跡Ⅶ層	55	1931	OB	2.8	1.9	0.9	4.0	1 : 1.5	1 : 0.5
14	天神段遺跡Ⅶ層	56	1933	CH	(3.7)	3.2	0.9	9.4	-	1 : 0.3
14	天神段遺跡Ⅶ層	57	1934	CH	3.3	2.6	1.0	6.8	1 : 1.3	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅶ層	58	1935	CH	4.0	2.8	1.2	10.4	1 : 1.4	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅵ層	59	2307	CH	2.0	1.9	0.7	1.9	1 : 1.0	1 : 0.3
14	天神段遺跡Ⅵ層	60	2308	CH	2.3	2.0	0.9	3.3	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡Ⅵ層	61	2309	CH	2.2	2.1	0.7	2.4	1 : 1.1	1 : 0.3

表3 尖頭状石器観察表②

遺跡番号	遺跡名	資料番号	報告書掲載番号	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	短軸 : 長軸	幅 : 厚さ
14	天神段遺跡VI層	62	2310	AN	(2.0)	2.0	0.7	2.2	-	1 : 0.3
14	天神段遺跡VI層	63	2314	AN	(2.1)	2.4	0.8	3.6	-	1 : 0.3
14	天神段遺跡VI層	64	2315	AN	2.8	2.5	1.0	5.2	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡VI層	65	2502	CH	2.0	1.6	0.8	1.6	1 : 1.3	1 : 0.5
14	天神段遺跡VI層	66	3169	OB	1.6	1.5	0.6	1.1	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡VI層	67	3182	OB	2.2	1.9	0.8	2.9	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡VI層	68	3184	AN	2.3	2.0	0.9	3.2	1 : 1.1	1 : 0.4
14	天神段遺跡VI層	69	3191	OB	(2.1)	2.0	1.4	5.2	-	1 : 0.7
14	天神段遺跡VI層	70	3195	CH	2.4	2.2	1.0	3.0	1 : 1.1	1 : 0.5
14	天神段遺跡VI層	71	3197	AN	2.4	2.2	0.8	3.1	1 : 1.1	1 : 0.3
14	天神段遺跡VI層	72	3198	CH	2.6	1.9	0.9	4.2	1 : 1.3	1 : 0.4
14	天神段遺跡VI層	73	3200	CH	2.6	2.1	0.7	3.3	1 : 1.2	1 : 0.3
14	天神段遺跡VI層	74	3201	CH	2.5	2.5	1.0	5.1	1 : 1.0	1 : 0.4
14	天神段遺跡VI層	75	3208	CH	(2.8)	(2.1)	0.8	4.4	-	-
14	天神段遺跡VI層	76	3210	AN	3.0	2.3	0.9	4.3	1 : 1.3	1 : 0.4
14	天神段遺跡VI層	77	3211	AN	3.2	2.3	0.9	5.8	1 : 1.4	1 : 0.4
14	天神段遺跡VI層	78	3213	SH	3.2	2.6	0.9	4.5	1 : 1.3	1 : 0.3
14	天神段遺跡VI層	79	3218	CH	3.3	2.5	1.0	6.3	1 : 1.3	1 : 0.4
14	天神段遺跡VI層	80	3219	CH	3.5	2.9	1.3	10.2	1 : 1.2	1 : 0.5
15	田原迫ノ上遺跡	81	1034	OB	3.2	3.1	0.8	7.1	1 : 1.0	1 : 0.3
15	田原迫ノ上遺跡	82	1035	OB	2.6	2.2	1.1	4.7	1 : 1.2	1 : 0.5
15	田原迫ノ上遺跡	83	1036	HF	2.6	2.3	0.6	4.1	1 : 1.1	1 : 0.3
15	田原迫ノ上遺跡	84	1037	CH	(2.5)	2.4	0.4	2.6	-	1 : 0.2
16	細山田段遺跡	85	320	SH	2.6	2.3	0.5	3.5	1 : 1.1	1 : 0.2
17	永吉天神段遺跡	86	476	SH	3.7	3.0	1.2	11.5	1 : 1.2	1 : 0.4
17	永吉天神段遺跡	87	508	AN	3.4	2.4	0.9	7.4	1 : 1.4	1 : 0.4
18	荒園遺跡	88	726	AN	2.3	2.0	1.1	4.0	1 : 1.1	1 : 0.5
19	浜場遺跡	89	110	AN	2.8	1.7	0.9	3.4	1 : 1.6	1 : 0.5
19	浜場遺跡	90	111	AN	2.8	2.0	0.7	3.1	1 : 1.4	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	91	277	OB	2.2	(1.6)	0.4	0.7	-	-
20	春日堀遺跡	92	278	CH	2.1	1.6	0.9	2.6	1 : 1.3	1 : 0.6
20	春日堀遺跡	93	279	CH	2.4	1.9	0.7	2.5	1 : 1.3	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	94	280	CH	1.9	1.8	0.5	1.6	1 : 1.1	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	95	281	CH	(2.1)	(1.8)	0.6	(1.9)	-	-
20	春日堀遺跡	96	282	HF	2.2	1.6	0.8	2.0	1 : 1.4	1 : 0.5
20	春日堀遺跡	97	283	CH	2.5	1.5	0.5	1.3	1 : 1.7	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	98	284	CH	2.4	2.0	0.9	3.1	1 : 1.2	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	99	285	CH	1.8	1.5	0.7	1.5	1 : 1.2	1 : 0.5
20	春日堀遺跡	100	286	CH	(2.1)	(1.4)	0.6	(1.6)	-	-
20	春日堀遺跡	101	287	CH	2.3	1.9	0.7	1.9	1 : 1.2	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	102	288	CH	(1.7)	(1.8)	0.8	(2.2)	-	-
20	春日堀遺跡	103	289	OB	(2.0)	(1.5)	0.7	(1.9)	-	-
20	春日堀遺跡	104	290	CH	2.2	1.7	0.5	2.0	1 : 1.3	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	105	291	OB	(2.1)	(1.4)	0.6	(1.1)	-	-
20	春日堀遺跡	106	292	OB	2.2	1.8	0.8	2.7	1 : 1.2	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	107	293	SH	2.5	2.3	0.6	2.8	1 : 1.1	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	108	294	CH	2.3	2.1	0.8	3.0	1 : 1.1	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	109	295	AN	(2.4)	(1.7)	0.5	(1.4)	-	-
20	春日堀遺跡	110	296	CH	2.0	1.9	0.5	1.4	1 : 1.0	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	111	297	AN	(1.9)	(1.8)	0.5	(0.9)	-	-
20	春日堀遺跡	112	298	CC	2.0	1.7	0.8	2.2	1 : 1.2	1 : 0.5
20	春日堀遺跡	113	299	OB	3.0	1.4	0.4	0.8	1 : 2.1	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	114	300	CH	2.8	2.3	0.5	2.8	1 : 1.2	1 : 0.2
20	春日堀遺跡	115	301	CH	(2.7)	(2.1)	0.6	(3.3)	-	-
20	春日堀遺跡	116	302	CH	2.8	2.0	0.6	2.4	1 : 1.4	1 : 0.3
20	春日堀遺跡	117	303	CH	2.8	2.2	2.9	4.2	1 : 1.3	1 : 1.4
20	春日堀遺跡	118	304	CH	3.2	2.8	1.2	7.8	1 : 1.1	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	119	305	CH	3.7	2.7	1.2	9.1	1 : 1.4	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	120	306	CH	(3.1)	(3.1)	1.1	(7.4)	-	-
20	春日堀遺跡	121	307	CH	2.7	2.5	1.1	7.4	1 : 1.1	1 : 0.4
20	春日堀遺跡	122	308	TF	3.1	2.6	0.9	6.2	1 : 1.2	1 : 0.4

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相 —中岳Ⅱ式土器を中心に—

宮崎 大和

Aspects of pottery from Latter half of the late Jomon Period on the Osumi peninsula with
a focus on Nakadake pottery

Yamato Miyazaki

要旨

本稿では、大隅半島の遺跡から出土した中岳Ⅱ式土器を対象とし、口縁部形態から分類を行い形態変化の検討を行った。検討の結果、中岳Ⅱ式は肥厚した口縁部に2条の凹線をもつものだけでなく、肥厚しないものや無文のものなどのバリエーションがあり、その組み合わせに時期差がみられた。

キーワード 中岳Ⅱ式土器、縄文後期後葉

1 はじめに

近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査により、大隅地域の縄文時代の調査成果が多く上がっており、資料も増加している。

1980年に型式設定された中岳Ⅱ式土器は近年良好な資料が増加しているが、研究例が少なく未解明な点が多い型式である。近年の資料では、中岳Ⅱ式土器の中でも、従来型式設定されているものに該当しない異なる特徴をもつものが散見されており、従来の研究成果では中岳Ⅱ式土器をすべて把握することが難しい現状にある。

そこで、本論では中岳Ⅱ式土器を中心として、その共存関係や型式変化、バリエーション等について再検討を行い、縄文時代後期後葉の土器の様相を示す一端とした。

2 研究史

中岳Ⅱ式土器は、曾於市末吉町南之郷中岳に所在する中岳洞穴を標式遺跡とする。中岳洞穴は、昭和53年(1978)～昭和54年(1979)にかけて、河口貞徳らによって調査された。河口は新発見の深鉢形土器を1～4類に分類した(河口1980)。その中の2類が現在の中岳

Ⅱ式に該当する。その特徴は以下のとおりである。

- ・胴部から頸部へ「く」の字状に屈曲して内湾し、再び口縁部へ外反する器形をもつ。

- ・口縁が屈曲して立ち上がり、肥厚し、口唇部は平坦面をつくる。

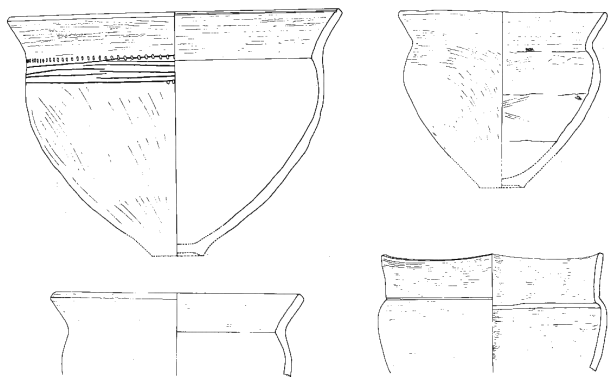
- ・口縁部側面および肩部に2条の凹線を施す。

河口は、1類は西平式の深鉢形の器形・文様(口縁部文様帯と磨消縄文)が簡略化したものであるとし、中岳1類(中岳Ⅰ式)から中岳2類(中岳Ⅱ式)への変遷を考え、西平式土器から三万田式土器への移行過程を示すものであるとした。この時点で中岳Ⅱ式は三万田式土器の直前に位置づけられた。(第1図)

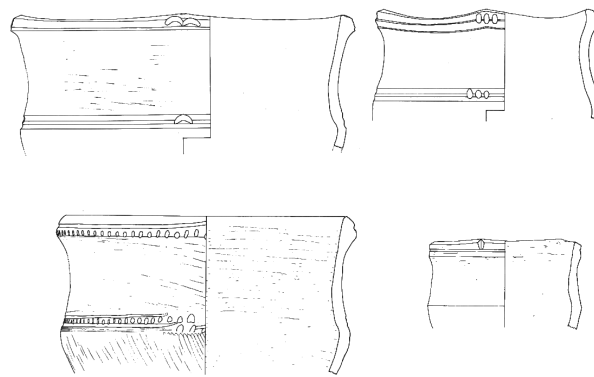
日高孝治は、中岳Ⅱ式土器を中村遺跡(宮崎県山田町)の報告書内で「御領式土器の系譜を引くものであろう」とし、「時期的には晩期初頭」に位置づけている(日高1983)。

北郷泰道は、平畑遺跡(宮崎県宮崎市)の報告書の中で、縄文晩期に位置づけた竪穴住居から出土した中岳Ⅱ式土器について「後期からの伝統を強くうけるこの一連の土器群」と表現し、後期末から晩期前葉に位置づけている(北郷1985)。また、菅付和樹は、同報告書内にお

1 類土器



2 類土器

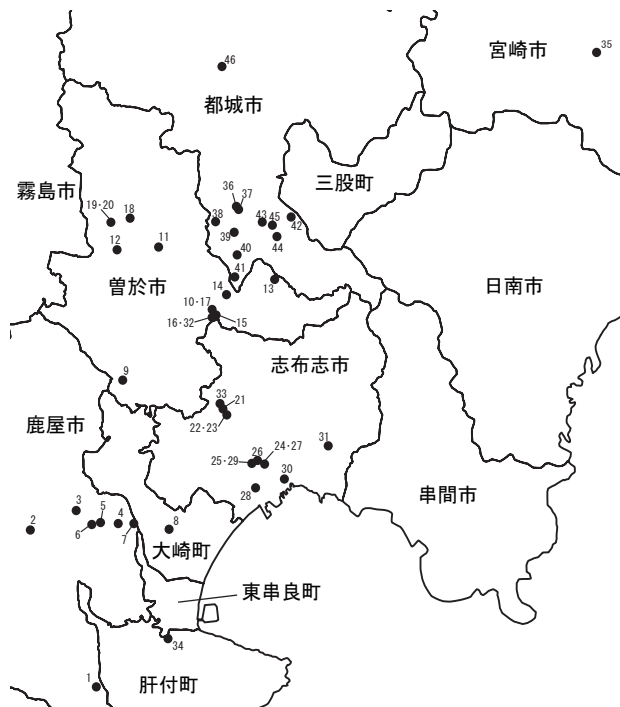


第1図 中岳洞穴出土土器

いて包含層から出土した中岳Ⅱ式土器について「御領式土器の系統を引き晩期初頭」に位置づけたが、口縁部内面が凹むものについては三万田式・御領式に併行するという案を提示している（菅付1985）。

栗畑光博は、鹿児島県及び宮崎県内8遺跡出土の中岳Ⅱ式土器を対象として、口縁部形態を6種類、胴部形態2種類に分類し、その相関関係から1～5の器形群に分類した（栗畑1989）。中村遺跡の包含層出土土器の出土層位関係から、口縁内面に段をもつものを段が緩やかになるものよりも古く位置づけた。そして新たに中岳Ⅱ-1型式・中岳Ⅱ-2型式・中岳Ⅱ-3型式を設定し、中岳Ⅱ-1型式（1群）→中岳Ⅱ-2型式（2群）→中岳Ⅱ-3型式（3群）と変遷するとした。4群はⅡ-2型式の空間的亜型式、5群はⅡ-3型式以降と位置付けた。口縁部内側の段が明瞭なものから無段へと変化し、それに伴い胴部の張り出しも強いものから弱くなっていく。文様もそれに対応し、凹線文から沈線文へ変化する。この文様変化が凹線文系三万田式から御領式への変化と対応するとして、中岳Ⅱ式土器は三万田式と御領式に併行する可能性が高いと指摘している。また、中岳Ⅱ式は深鉢形のみであり、凹線文系三万田式や御領式の浅鉢・鉢形土器とセットになる可能性にも言及している。

中村耕治は、町田堀遺跡（鹿児島県鹿屋市）の報告書の中で、同遺跡から出土した中岳Ⅱ式を口縁形態から深鉢A～F、浅鉢G～Iに分類した。それを栗畑の分類に当てはめ、A類が中岳Ⅱ-1型式に、B・C・D類が中岳Ⅱ-2型式に、E類が中岳Ⅱ-3型式にそれぞれ該当するとした（中村2016）。



第2図 中岳Ⅱ式出土遺跡分布図

幸泉満夫は中岳Ⅱ式とその後継の土器群を「中岳系土器群」と呼称し、器形・口縁部の断面形状・肩部（頸胴屈曲部）の形状・文様から深鉢の属性分類を行った。そして新たな編年案として、中岳系Ⅰ期：中岳系竹ノ内式段階→中岳系Ⅱ期：中岳系東田式段階→中岳系Ⅲ期：中岳系町田堀式段階→中岳系Ⅳ期：中岳系水の谷式段階→中岳系Ⅴ期：中岳系布平式段階を示した。口縁部の断面形状からⅠ期は外面に密な併行凹線を二条施すβ①形が主流であり、Ⅱ期で凹線が沈線化したβ②・③形へ変化し、Ⅲ期で口縁部が拳上に肥厚するβ④ab形が登場し、Ⅳ期では1条沈線の特徴とするβ⑥形となるとしている。Ⅰ期は中岳系成立期、Ⅲ期は中岳系最盛期、Ⅳ期は中岳系崩壊期、Ⅴ期は中岳系終焉期としている。中岳系土器に特徴的な、2センチほどの極小な接地面を有する底部を「中岳型底部」と呼称し、Ⅲ期によく見られるとしている。また、無刻突帯文系土器の源流が中岳系土器群にあるとした。

3 問題の所在と研究の目的

先行研究を概観してみると、中岳Ⅱ式の編年的位置づけは、①三万田式直前、②三万田式～御領式併行、③御領式以降と研究者によって異なっている。また年代観についても、①縄文時代後期末～晩期初頭、②縄文時代後期後葉、③縄文時代晩期初頭と定まっていない。

器形や文様については栗畑（栗畑1989）及び幸泉（幸泉2021）によって検討が行われているが、中岳Ⅱ式と同じ器形の無文の個体についての検討はなされていない。同器形の無文個体は、中岳式の標式遺跡の中岳洞穴から

第1表 中岳Ⅱ式出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺構
1	中尾	鹿屋市吾平町上名中尾	
2	水の谷	鹿屋市七蔵川町水の谷	
3	十三塚	鹿屋市串良町細山田十三塚	
4	町田堀	鹿屋市串良町細山田	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑
5	牧山	鹿屋市串良町細山田	
6	田原迫之上	鹿屋市串良町細山田	
7	細山田段	鹿屋市串良町・曾於郡大崎町	
8	永吉天神段	曾於郡大崎町永吉天神	
9	宮ヶ原	曾於市太陽町大谷宮ヶ原	
10	牧B	曾於市未吉町岩崎牧	竪穴建物跡
11	中尾段	曾於市未吉町胡摩地内	
12	関山	曾於市未吉町諏訪方関山	
13	中岳洞穴	曾於市未吉町南之郷市林	
14	平松城跡	曾於市未吉町南之郷陣之山	
15	土合原	曾於市未吉町南之郷土合原	
16	西原	曾於市未吉町南之郷西原	竪穴建物跡
17	原村	曾於市未吉町南之郷原村	竪穴建物跡
18	田平下	曾於市財部町下財部字田平下	
19	九義岡	曾於市財部町南俣九義岡	
20	財部城ヶ尾	曾於市財部町南俣	
21	松ヶ尾	志布志市有明町伊崎田松ヶ尾・茗ヶ谷	
22	山ノ口	志布志市有明町伊崎田山ノ口	
23	下原	志布志市有明町伊崎田	竪穴建物跡
24	高直B	志布志市志布志町安楽宇都上	
25	炭床	志布志市志布志町安楽炭床	
26	船迫迫	志布志市志布志町安楽中島	
27	船迫	志布志市志布志町安楽船迫	
28	安島	志布志市志布志町安楽勢園	
29	山角B	志布志市志布志町安楽山角	
30	見婦	志布志市志布志町志布志	溝状遺構
31	家野	志布志市志布志町帖字家野	
32	牧ノ原B	志布志市松山町新橋	
33	蔵野B	志布志市松山町	
34	東田	肝属郡肝付町野崎東田	竪穴建物跡
35	平畑	宮崎市学園木花台西	竪穴建物跡
36	大岩田村ノ前	都城市大岩田町5449ほか	
37	黒土	都城市大岩田町5597ほか	
38	上針谷ノ下針谷	都城市今町8917	
39	鎌ヶ崎	都城市梅北町	
40	塚坂	都城市梅北町9723番地1号ほか	竪穴建物跡
41	大浦	都城市梅北町10792番地2号ほか	竪穴建物跡
42	豊満大谷	都城市豊満町宇大谷	
43	王子原第2	都城市姫城町6-21	
44	野添	都城市安久町宇前畑	竪穴建物跡
45	王子原ノ上安久	都城市安久町	
46	中村	都城市山田町山田	

も出土しており、その関係性についても明らかにする必要があります。

中岳Ⅱ式の器種構成については深鉢と浅鉢が確認されているが、一括資料の少なさから全体像の把握が不十分である。中岳Ⅱ式と中九州土器との関係については柴畑（柴畑1989）によって触れられているが、中岳Ⅱ式に併行すると考えられる上加世田式との比較は行われていない。中岳Ⅱ式に後続するとされる入佐式についても、中岳Ⅱ式からの型式変化の様相が分かっていない。

中岳Ⅱ式については、編年的位置づけや年代観、器種構成、他地域との比較などまだ未解明な部分が多い現状にある。このことから本論では、中岳Ⅱ式土器について型式学的な再検討を行い、型式変化やバリエーションといった様相の解明を試みる。

4 研究の方法と対象資料

(1) 研究の方法

鹿児島および宮崎県南部出土の中岳Ⅱ式土器の集成を行い、良好な遺構一括資料を中心に検討対象とする。対象資料を分類し、形態の変化について検討を行う。また、一括資料のセット関係の変化についても検討を行う。

(2) 対象資料

集成を行った結果、鹿児島県及び宮崎県内の中岳Ⅱ式出土遺跡は、鹿児島県31遺跡、宮崎県12遺跡の計43遺跡である（第2図・第1表）。

(3) 型式分類（第3図）

柴畑（柴畑1989）は口縁部形態を6種類、胴部形態を2種類に分類した。幸泉（幸泉2021）は口縁部形態を17種類、胴部形態を6種類に分類した。両者とも口縁部内側に段を有するものが胴部が張り出すものに対応し、口縁部に段を持たないものが胴部が張り出さないものに対応するとし、前者から後者へ移行していくことを指摘した。両分類とも口縁部に凹線または沈線を施したものを対象としている。そのため本論では口縁部形態を、口縁部に凹線または沈線を施すもの2種類と無文のもの1種類に大別し、その後細分をおこなった。

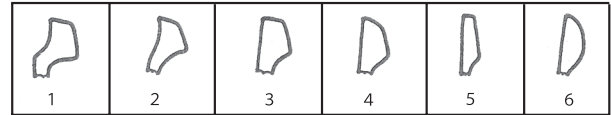
深鉢A：2条の凹線又は沈線を施した口縁部が内傾または直口するタイプ

A-1：口縁部が内傾または直口し、口縁内面に明瞭な段をもつ。頸部の屈曲が強く、肩部が強く張り出し明瞭な稜をもつものが多い。文様は凹線または沈線である。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施される。

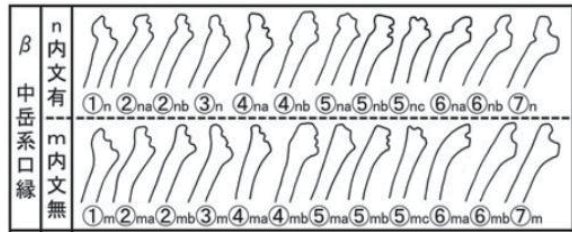
A-2：口縁部が直口し、口縁内面に段をもつ。頸部がやや屈曲し、肩部もやや張り出す。文様は凹線・沈線に加え、凹点文・連続凹点文が施されるものもある。波状口縁のものもある。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施されるものや、内面はナデ調整のものがある。

A-3：口縁部が直行し、口縁内面に浅い段をもち、

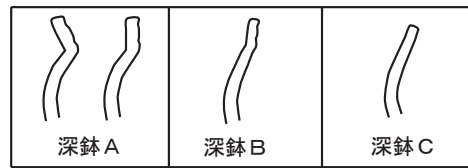
柴畑による口縁部形態分類（柴畑1989より一部転載）



幸泉による口縁部形態分類（幸泉2021より一部転載）



本稿での口縁部形態分類



第3図 口縁形態分類図

三角形に肥厚する。頸部がやや屈曲し、肩部もやや張り出す。文様は凹線・沈線に加え、三日月文が施されるものもある。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施されるものや、内面のみナデ調整が施されるものもある。

深鉢B：2条の凹線又は沈線を施した口縁部が外反するタイプ

B-1：口縁部が外反し、口縁内面に緩やかな段をもつ。頸部はほとんど屈曲せず、肩部の張り出しも弱い。文様は凹線文である。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施される。

B-2：口縁部が外反し、口縁内面に段をもたず、三角形に肥厚する。頸部はほとんど屈曲せず、肩部の張り出しも弱い。文様は沈線に加え、凹点や三日月文を施すものもある。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施される。

B-3：口縁部が外反し、口縁内面に段をもたず、丸みを帯びて肥厚する。頸部はほとんど屈曲せず、肩部の張り出しも弱い。文様は沈線に加え、連続凹点文・三日月文が施されるものもある。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施される。

深鉢C：無文の口縁部が外反するタイプ。頸部がやや屈曲し、肩部が張り出すものもある。調整は丁寧なミガキが施されるものや粗雑なナデ調整が施されるものがある。

5 結果

(1) 各遺跡の相伴関係（第4～6図・第2表）

各遺跡の主な一括資料について、以下に記す。なお、報告書内で竪穴住居跡として紹介されているものは、その機能が断定できないため今回は竪穴建物跡として表現を統一している。

① 牧B遺跡

1号竪穴建物跡（第4図1～15）

深鉢A-1（第4図1）、深鉢A-2（第4図2）、深鉢B-1（第4図5～8）、深鉢C（第4図7～10）、浅鉢（第4図13～15）が出土する。主体となるのは深鉢B-1である。口縁文様帯が広く、器形が鳥井原式と似る土器（第4図1）や、三万田式でみられるような無文で波状口縁の土器（第4図10）を確認できる。文様は凹線が主体であり、凹点を加えるものもある。底部は平底（第4図11～12）である。浅鉢は器壁が厚いものが目立つ。そのほかの共伴遺物は磨製石斧、磨石、敲石、軽石である。

②原村遺跡

3号竪穴建物跡（第4図16～21）

深鉢A-1（第4図16）、深鉢A-2（第4図17～20）が出土する。主体となるのは深鉢A-2である。文様は凹線が主体であり、凹点を加えるものもある。底部は平底（第4図21）である。そのほかの共伴遺物は打製石鏃である。

4号竪穴建物跡（第4図22～29）

深鉢A-1（第4図22）、深鉢A-2（第4図5～8）が出土する。主体となるのは深鉢A-2である。22は文様帯が長く、内側に強く屈曲する。文様は凹線が主体であり、凹点を加えるものもある。底部は小平底である。そのほかの共伴遺物は磨石である。

③町田堀遺跡

町田堀1-1号竪穴建物跡（第5図30～41）

深鉢A-2（第5図30～32）、深鉢A-3（第5図33～35）、深鉢B-2（第5図36）、深鉢C（第4図37）、浅鉢（第5図40～41）と多様なバリエーションが出土する。A-2では波状口縁のものが目立つ。文様は沈線が主体であり、凹点文・連続凹点文・三日月文を加えるものもある。底部は小平底から尖底（第5図38～39）である。そのほかの共伴遺物は打製石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨敲石、石皿である。

④下原遺跡

1号竪穴建物跡（第5図42～46）

深鉢B-2（第5図42～43）、深鉢C（第5図44）が出土する。主体となるのは深鉢B-2である。文様は沈線が主体であり、三日月文を施すものもある。底部は小平底から尖底（第5図45～46）である。そのほかの共伴遺物は打製石鏃、打製石斧である。

⑤野添遺跡

1号竪穴建物跡（第5図47～52）

深鉢B-3（第5図47～50）のみが出土する。文様は沈線が主体であり、凹点文・連続凹点文を施すものもある。底部は尖底（第5図51～52）である。そのほかの共伴遺物はスクレイパーである。

⑥嫁坂遺跡

8号竪穴建物跡（第6図53～60）

深鉢C（第6図58）が、入佐式と推定される土器とともに出土する。そのほかの共伴遺物は円盤形土製品、スクレイパー、有溝砥石である。

（2）各分類からみる共伴関係（第2表）

各遺跡の共伴関係から分類を検討すると、以下のことが確認できる。

口縁部が強く屈曲し、肩部も強く張り出す深鉢A-1は、口縁部が肥厚しないタイプ（A-2・B-1）と共伴することが多い。牧B遺跡では深鉢A-1と共に三万田式のような波状口縁をもつ無文の土器も出土しており、この無文土器は牧B遺跡のみで確認できる。町田堀遺跡では、口縁部が肥厚するものと肥厚しないものが混在し、深鉢A-1、A-2、A-3、B-1、B-2、C、浅鉢といった多様なバリエーションが共伴する。下原遺跡、西原遺跡、嫁坂遺跡などでは、口縁部が肥厚した深鉢B-2が主体となり、深鉢Cが共伴することもあるが、浅鉢は共伴しない。野添遺跡では深鉢B-3のみ出土し、深鉢Cも浅鉢も共伴せず、他の遺跡とは異なる様相を示す。

以上の結果から、各分類の共伴関係が下記の3つのグループに分かれることが明らかとなった。

グループ1：深鉢A-1、A-2、B-1、C、浅鉢（牧B～町田堀）

グループ2：深鉢A-1、A-2、A-3、B-1、B-2、C、浅鉢（町田堀～）

グループ3：深鉢B-2、B-3、C（下原・西原～）

6 考察

（1）中岳Ⅱ式土器の型式変化（第7図）

結果により分けることができた3つのグループについて、詳細を述べながら形態の変化について考察する。

グループ1：深鉢A-1、A-2、B-1、C、浅鉢・A-1、A-2、B-1といった肥厚しない口縁をもつグループである。

- ・深鉢A-1のように「く」の字状に曲がる口縁部に強い屈曲を持つ頸部、強く張り出す肩部といった鳥井原式と同じような器形をもつ土器が見られる。

- ・口径が胴部最大径よりも大きいものが多い。

- ・底部は平底。

- ・文様は凹線文が主体であり、凹点文を施すものもある。肩部に文様を施すものは少ない。

- ・調整は深鉢A-1、A-2、B-1、浅鉢には内外面ともに丁寧なミガキを施す。深鉢Cはナデ調整を施す。

- ・浅鉢は精製で薄手のものと、それを模倣したような粗雑で厚手のものがみられる。

グループ2：深鉢A-1、A-2、A-3、B-1、B-2、C、浅鉢

- ・肥厚しない口縁（A-1、A-2、B-1）と肥厚する口縁（A-3、B-2）が混在するグループである。

・器形は深鉢A-2と同じであるが、口縁内面の段が浅くなり口縁外面が三角形に肥厚するA-3が出現する。

・底部は小平底～尖底へ。
・文様は沈線文が主体となり、連続凹点文や三日月文を施すものもある。肩部にも文様を施す。

・調整については、深鉢A、Bは内外面ともに丁寧なミガキを施すものと外面はミガキで内面はナデ調整を施すものがある。深鉢Cは内外面ともに丁寧なミガキを施す。

・グループ1と同じように薄手の浅鉢と厚手の浅鉢が伴う。連続凹点文を施すものもある。

グループ3：深鉢B-2、B-3、C

・B-2、B-3といった肥厚する口縁をもつグループである。

・グループ1、2と比較して、口縁部がさらに肥厚し、頸部の屈曲が弱く肩部の張り出しも弱くなる。口径と胴部最大径がほぼ等しくなる。

・底部は尖底のみとなる。

・文様は沈線が主体で、凹点文、連続凹点文、三日月文を施すものがある。肩部にも文様を施す。

・調整は内外面ともに丁寧なミガキを施す。

・浅鉢は共伴しない。

グループ1は三万田式～御領式に似た器形の土器が共伴しており、口縁部が肥厚しない土器が主体である。グループ2では口縁部が肥厚しないものと肥厚するものが混在する。グループ3では口縁部が肥厚するものが主体である。肩部の張り出しについては、グループ1一番強く張り出し、グループ2からグループ3へと弱くなっていく。底部については、グループ1が平底、グループ2が平底～小平底、グループ3が尖底になる。文様については、グループ1では凹線文が主体であり、グループ2・3では沈線文が主体となる。グループ1では凹点文を施すものが少量ある程度だが、グループ2・3では連続凹点文や三日月文を施すものが目立つ。グループ1・2では浅鉢が共伴するが、グループ3では共伴しない。

3グループの共伴関係及び型式変化から、1期（グループ1）→2期（グループ2）→3期（グループ3）と変遷することが考えられる。

1期から2期への変遷過程において、口縁部の肥厚化が始まり、形態のバリエーションが増える。また、凹線の沈線化が始まるとともに、連続凹点文や三日月文などの文様のバリエーションも出てくる。2期から3期への変遷過程においては、口縁部の肥厚、器形の屈曲の減少、底部の尖底化が進行し、形態のバリエーションがなくなる。また、浅鉢も共伴しなくなる。3期の深鉢B-3は深鉢B-2と器形がほぼ同じであるため、B-2とB-3に時期差は無い可能性がある。

1期は中九州系のような古い様相をもち、2期・3期は従来の中岳Ⅱ式のような新しい様相をもち、2期でバリエーションが増えるため明確に線引きすることはできないが、全体で見ると新旧関係があり、おおよそ1期を

中岳Ⅱ式古段階、2期・3期を中岳Ⅱ式新段階にわけることができる。

（2）従来研究との比較

本稿での型式分類を従来研究の型式分類に当てはめると以下ようになる

深鉢A-1：（幸泉分類）竹ノ内式段階

深鉢A-2：（桑畑分類）中岳Ⅱ-1型式、
（幸泉分類）東田式段階

深鉢A-3：（桑畑分類）中岳Ⅱ-2型式、
（幸泉分類）町田堀式段階

深鉢B-1：該当なし

深鉢B-2：（桑畑分類）中岳Ⅱ-3型式、
（幸泉分類）町田堀式段階

深鉢B-3：該当なし

深鉢C：（河口分類）中岳Ⅰ式

深鉢A-1は幸泉分類竹ノ内式段階に該当する。まだ口縁部が肥厚する前の段階であり、鳥井原式及び三万田式に器形が酷似する深鉢A-1の確認により、桑畑（桑畑1989）が指摘していた中九州系土器との関係性が確かなものとなった。

深鉢A-2は桑畑分類中岳Ⅱ-1型式・幸泉分類東田式段階に、深鉢A-3は桑畑分類中岳Ⅱ-2型式・幸泉分類町田堀式段階にそれぞれ対応する。先行研究においては時期差があるとされていたが、今回深鉢A-2と深鉢A-3が共伴することを確認した。

深鉢B-1は該当する型式がなく、深鉢B-2は桑畑分類中岳Ⅱ-3型式・幸泉分類町田堀式段階に対応する。深鉢B-1の確認により、深鉢B-1から深鉢B-2へ変遷することが明らかとなった。

深鉢B-3は従来研究では該当する型式がない。深鉢B-2と同じ器形なため、B-2と併存する可能性が考えられる。

深鉢Cは河口分類の中岳Ⅰ式に該当する。河口は中岳Ⅰ式を中岳Ⅱ式に先行する土器として設定したが、今回の結果から深鉢Cは全時期から出土しており、中岳Ⅰ式は中岳Ⅱ式と共伴することが判明した。

また浅鉢については、中岳Ⅱ式の深鉢に三万田式や御領式の浅鉢が伴う可能性があることを指摘されていた。浅鉢が伴うのは2期までであり、三万田式・御領式の浅鉢が伴う例は少なく、三万田式・御領式を模倣して作った浅鉢が伴う例が多いことがわかった。

（3）中岳Ⅱ式土器の位置づけ

ここでは今回の検討結果をまとめ、中岳Ⅱ式土器の位置づけを行う。

1期では口縁部が肥厚しない土器群が主体となり、三万田式～御領式に似た器形の土器と共伴している。頸部が強く屈曲し、肩部の張り出しも強い土器が多く、底部は平底である。2期になると口縁部が肥厚しない土器と肥厚する土器が混在するようになる。形態のバリエー

ションが1番多いのが2期である。3期になると口縁部が肥厚する土器群が主体となる。頸部の屈曲と肩部の張り出しが弱くなり、底部は尖底となる。

文様については、1期は凹線文主体で2期からは沈線文が主体となる。それに伴い、1期では凹点文を施すものが少量であるが、2期からは連続凹点文や三日月文を施すものが目立つようになる。

器種構成については、三万田式・御領式の浅鉢が伴う可能性が指摘されていた(桑畑1989)が、1期～2期において三万田式・御領式に似た精製浅鉢だけではなく、深鉢と同じく厚い器壁の浅鉢も共伴することがわかった。従来中岳Ⅱ式とされてきた土器と同じ器形をもつ深鉢Cが1～3期を共伴することも分かった。

従来の中岳Ⅱ式土器は、肥厚した口縁部を持ち、口縁部外面に2条の凹線又は沈線を有する深鉢形土器であるとされてきた。しかし今回の検討の結果、口縁部が肥厚しない土器と肥厚する土器、無文土器、浅鉢のように、中岳Ⅱ式の中にも多様なバリエーションが存在することが明らかになった。

また、嫁坂遺跡8号住居において深鉢Cが、中岳Ⅱ式と入佐式をつなぐような資料に共伴している。入佐式のC14年代は、中ノ原遺跡(鹿屋市)では 2940 ± 25 、諏訪前遺跡(南さつま市)では 2970 ± 85 となっており、いずれも中岳Ⅱ式の測定年代よりも新しい年代である。

以上のことから、中岳Ⅱ式は三万田式～御領式に併行し入佐式に先行することが考えられるため、縄文時代後期後葉に位置づけることが妥当である。

牧B遺跡出土の三万田式に推定される土器のC14年代が 3120 ± 20 年、深鉢B-2に分類される西原遺跡包含層出土土器のC14年代が 3120 ± 40 年とかなり近い数値となっている。そのため、第7図のような一連の形態変化が時期差によるものなのかは今後も検討が必要である。

7 おわりに

今回中岳Ⅱ式について再検討を行い、形態変化や器種構成の変化といった中岳Ⅱ式の全体像を把握することができた。しかし、薩摩半島や宮崎平野といった他地域との比較を行うことができなかった。薩摩半島においては中岳Ⅱ式と併行すると考えられている上加世田式が多数出土しており、中岳Ⅱ式との関係の解明が今後の課題として残る。また、AMS試料の不足測定試料の不足により、検証が不十分である部分もあるため、今後中岳Ⅱ式土器のさらなる資料数増加やAMS測定資料の増加に期待する。

本研究を進めていく上で、鹿児島県立埋蔵文化財センターの黒木梨絵氏には多くの貴重な御指導御助言をいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

【引用・参考文献】

桑畑光博 1989「東南部九州におけるある縄文土器の型

式組列-中岳Ⅱ式土器の再検討-」『鹿児島考古』第23号
鹿児島県考古学会

幸泉満夫 2021「中岳系土器群の研究」『宮崎考古』第31号
宮崎県考古学会

水ノ江和同 2012『九州縄文文化の研究-九州から見た縄文文化の枠組み-』

宮地聡一郎 2008「黒色磨研土器」『総覧 縄文土器』アムプロポーション
鹿児島県立埋蔵文化財センター

1996『東田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(16)

2008『西原遺跡・牧ノ原B遺跡・原村Ⅰ遺跡・原村Ⅱ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(124)

2011『石縊遺跡・十三塚遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(164)

2017『山ノ口遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(188)

2019『下原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(198)

2021『牧B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(207)

2021『原村遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(208)
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

2016『町田堀遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(7)

2018『町田堀遺跡2』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(20)

末吉町教育委員会 1980『中岳洞穴』

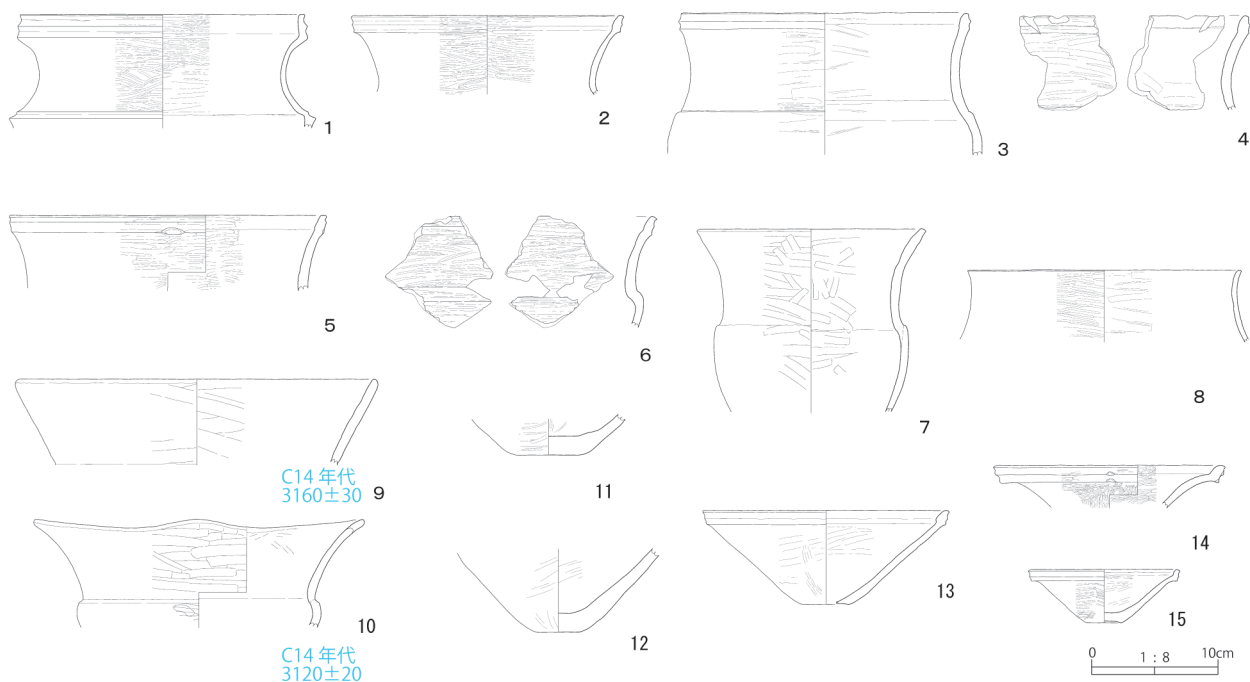
宮崎県教育委員会1985『浦田・入料・堂地西・平畑・堂地東・熊野原』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書(2)
宮崎県埋蔵文化財センター

2004『豊満大谷遺跡・野添遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(83)

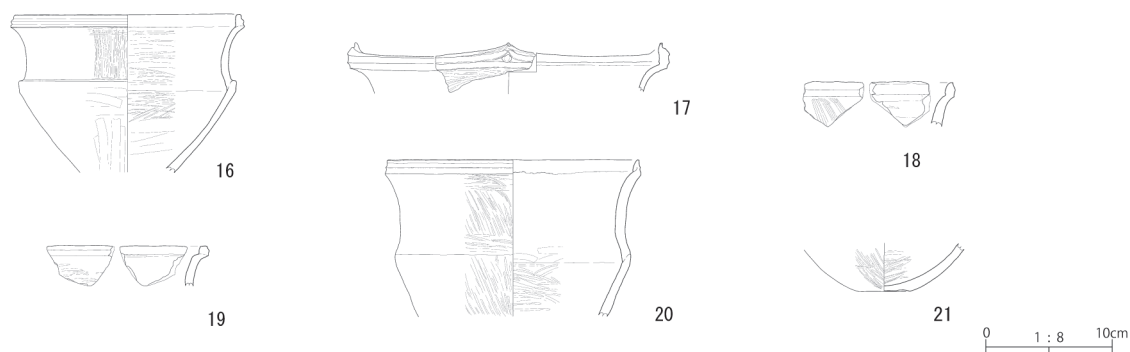
2019『嫁坂遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(249)

山田町教育委員会 1983『中村遺跡』山田町文化財調査報告書(1)

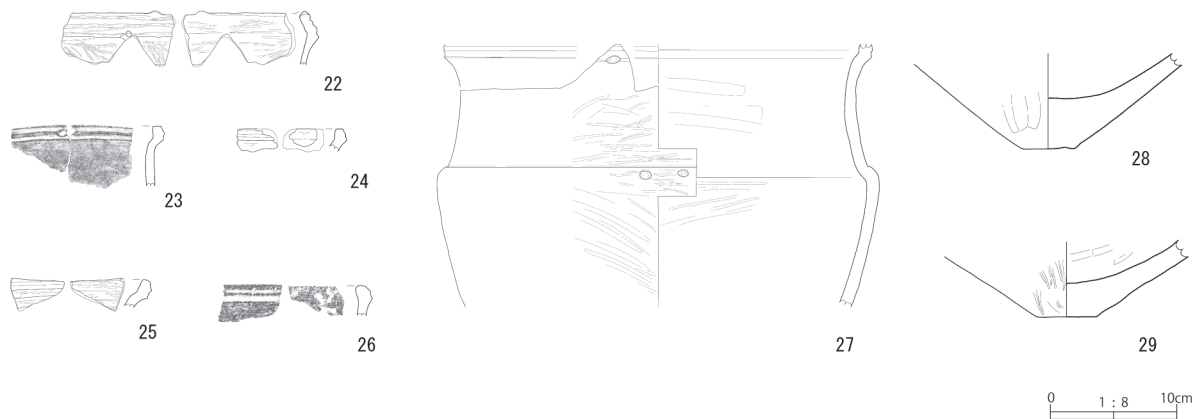
牧B遺跡 1号竖穴建物跡



原村遺跡 3号竖穴建物跡

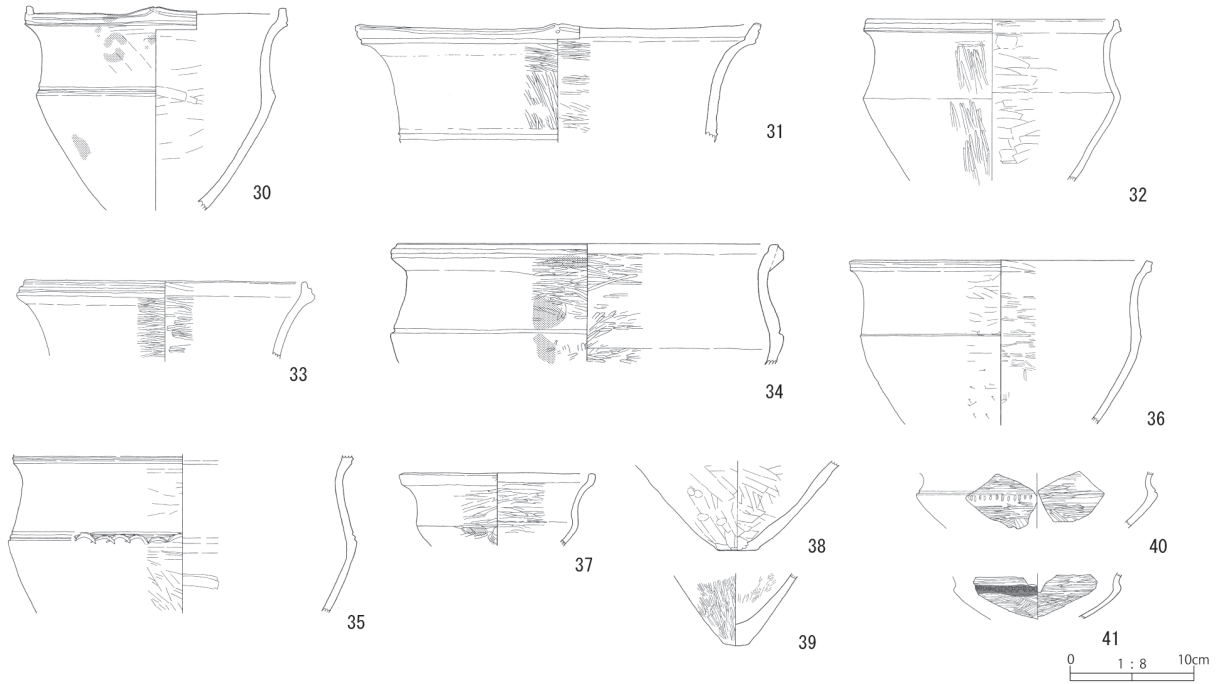


原村遺跡 4号竖穴建物跡

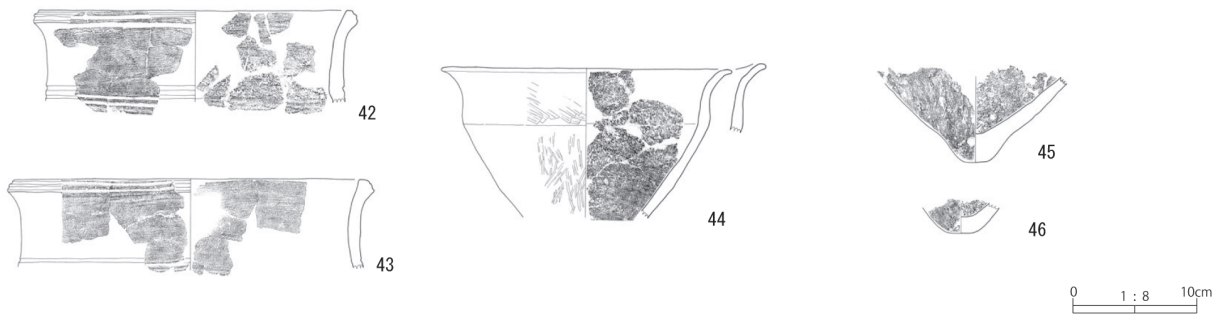


第4図 各遺跡出土遺物(1)

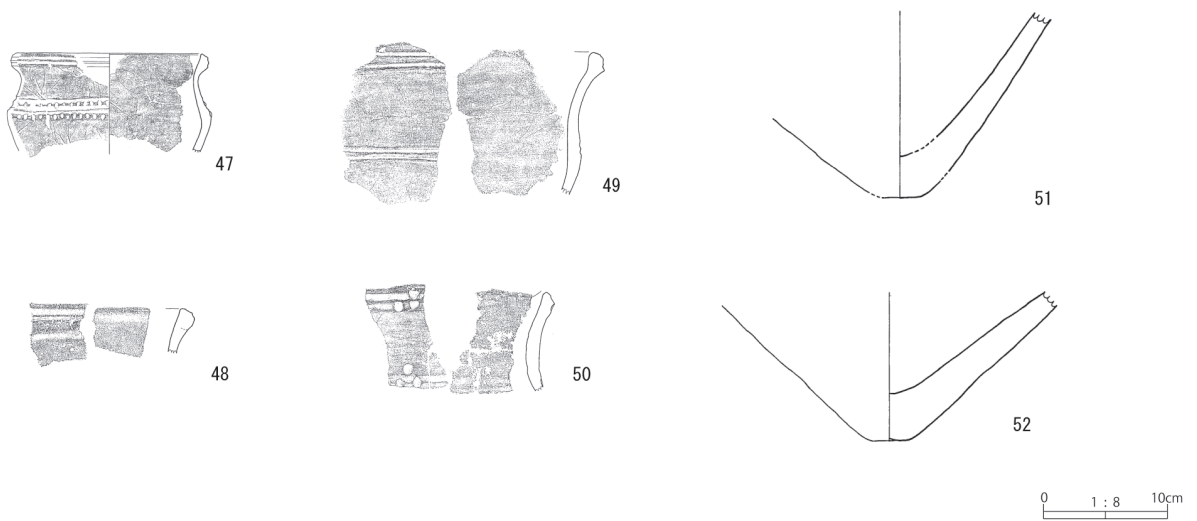
町田堀遺跡 1-1号 竪穴建物跡



下原遺跡 1号 竪穴建物跡

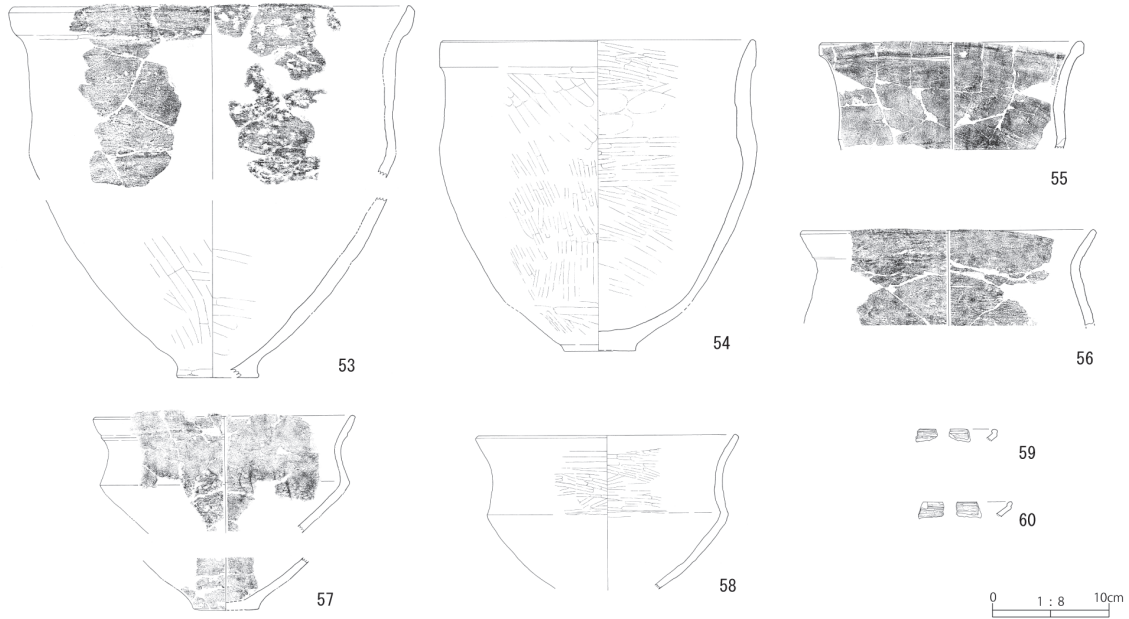


野添遺跡 1号 竪穴建物跡



第5図 各遺跡出土遺物(2)

嫁坂遺跡 8号竪穴建物跡



第6図 各遺跡出土遺物(3)

第2表 各遺跡一括資料共伴関係

		深鉢分類							底部			浅鉢	共伴遺物	
		A-1	A-2	A-3	B-1	B-2	B-3	C	平底	小平底	尖底			
牧B	1号竪穴建物跡	○	○		○				○	○			○	磨製石斧, 磨石, 敲石, 軽石
原村	3号竪穴建物跡	○	○						○					打製石鏃
	4号竪穴建物跡	○	○						○					磨石
東田	竪穴建物跡	○	○										○	
平畑	SA1		○						○	○				打製石鏃, 石匙, 磨製石斧, 磨石, 砥石, 石錐, 勾玉
	SA54	○	○						○	○				打製石鏃, 敲石, 石錐
町田堀1	1号竪穴建物跡		○	○	○	○		○		○	○			打製石鏃, 打製石斧, 磨製石斧, 磨敲石, 石皿
	2号竪穴建物跡			○					○					土製品, 打製石斧, 磨製石斧, 磨敲石, 石皿, 石剣
	3号竪穴建物跡					○			○	○				磨敲石
	土坑6号	○							○	○				打製石斧, 磨敲石
	土坑21号	○			○									
	土坑22号		○											
	土坑24号		○							○				磨敲石
土坑27号	○													
土坑28号		○		○	○			○	○					打製石鏃, 打製石斧, 磨敲石, 石皿
町田堀2	1号竪穴建物跡		○	○				○	○	○				打製石鏃, 打製石斧, 磨敲石, 石皿
	2号竪穴建物跡		○	○		○		○	○					打製石斧, 石皿
	3号竪穴建物跡		○			○		○	○			○		打製石鏃, 打製石斧, 磨敲石, 石皿
	土坑9号	○				○			○					打製石斧
	2号掘立柱建物		○										○	打製石斧
	4号掘立柱建物	○	○						○				○	磨製石斧, 磨敲石, 軽石
5号掘立柱建物		○											磨敲石	
嫁坂	1号竪穴建物跡					○				○	○			
大浦	1号竪穴建物跡					○								
西原	竪穴建物跡								○					打製石鏃, 打製石斧, 磨石, 管玉
下原	1号竪穴建物跡					○		○			○			打製石鏃, 打製石斧
	2号竪穴建物跡					○				○				打製石鏃, 磨石
野添	1号竪穴建物跡									○	○			スクレイパー
	2号竪穴建物跡									○				スクレイパー
	3号竪穴建物跡										○			スクレイパー, 打製石斧, 磨敲石
	4号竪穴建物跡													管玉

<p>五段階</p>	<p>1 期</p>	<p>深鉢 A-1</p>	<p>深鉢 A-2</p>	<p>深鉢 B-1</p>	<p>深鉢 C</p>	<p>深鉢底部</p>	<p>浅鉢</p>
<p>新段階</p>	<p>2 期</p>	<p>深鉢 A-3</p>	<p>深鉢 B-2</p>	<p>深鉢 B-3</p>	<p>深鉢 B-2</p>	<p>深鉢底部</p>	<p>浅鉢</p>
<p>3 期</p>	<p>3 期</p>	<p>深鉢 A-3</p>	<p>深鉢 B-2</p>	<p>深鉢 B-3</p>	<p>深鉢 B-3</p>	<p>深鉢底部</p>	<p>浅鉢</p>
		<p> 深鉢 A-1 号: 1・9 ~ 11・29 ~ 37・53 ~ 55・65・66・81・82), 包含層: 78) 原村 (深鉢 3 号: 3・12・13・67, 深鉢 4 号: 2・14 ~ 17・68・69, 包含層: 56), 平畑 (SA54: 4・19・41・57・70), 東田 (深鉢: 18・83), 十三塚 (包含層: 50), 町田堀 (土坑 6 号: 6・59・88, 土坑 21 号: 5, 土坑 27 号: 7, 埋設 2 号: 43, 埋設 4 号: 8, 深鉢 1 号: 21・22・26・27・40・71・72・85 ~ 87, 深鉢 3 号 20・89), 中岳 (包含層: 23・64) 西原 (深鉢: 24・44・75), 中村 (包含層: 28・62), 下原 (深鉢 1 号: 42・76・77, 包含層: 61), 山ノ口 (包含層: 63) 塚坂 (深鉢 1 号: 47), 野添 (深鉢 1 号: 48 ~ 50・79・80, 深鉢 2 号: 51・52), 山ノ口 (包含層: 63) </p>					

第 7 図 中岳 II 式の形態変化図 (S = 1/20)

南九州市松木藪遺跡で出土した弥生時代後期の鉄鏃について

川口 雅之

The iron arrowhead which is in the latter half of Yayoi period excavated in
Matsukizono remains in Kagoshima Prefecture

Masayuki Kawaguchi

要旨

鹿児島県さつま市松木藪遺跡で出土した鉄鏃と砥石について、実測図を作成し資料報告を行う。鉄鏃の時期は中九州や南九州の出土事例から弥生時代後期から終末頃で、松木藪遺跡で製作されたものと推測される。南九州における鉄器製作の普及を知る上で重要な資料である。

キーワード 弥生時代 拠点集落、鉄器製作

1 はじめに

筆者は、2018年に南九州における鉄器の集成を行った（川口2018）。その際に、本田道輝氏から、松木藪遺跡の大溝で鉄鏃が出土していることを御教示いただいたが、実見・図化することが間に合わず、本田氏から提供いただいた写真のみの掲載となった。弥生時代後期の鉄鏃は、本県において出土事例が少なく鉄器の普及を検討するには重要である。本稿では、松木藪遺跡で出土した鉄鏃と砥石について、改めて資料報告を行うとともに、鉄器の帰属時期について考えてみたい。

なお、資料の実測・公開に当たっては、松木藪遺跡の発掘担当者である本田道輝氏、出土品を保管している南さつま市教育委員会の了解を得ている。

2 松木藪遺跡について

遺跡は鹿児島県南さつま市金峰町尾下に所在する（第1図）。金峰山の西麓から田布施平野中央部へと伸びる尾下台地の先端部近くに位置し、標高は約21mである。周辺には高橋貝塚や阿多貝塚、中津野遺跡など弥生時代の著名な遺跡が平野を囲むように所在し、県下でも有数の遺跡密集地帯として知られている。

遺跡は土取り工事によって存在が明らかとなり、本田道輝氏によって昭和53年に発掘調査が行われた。発掘調査は平成7年の6次調査まで行われ、調査面積は約270㎡である（本田1981・1993・2005）。

発掘調査では、大溝や竪穴住居跡、弥生後期土器、石包丁、扁平片刃石斧、砥石、鉄鏃、磨製石鏃、土製投弾などが出土した（第2図）。土器の中には、北部九州、中九州、瀬戸内地方、大隅半島の特徴をもつものがあり、広範囲な地域と交流していたことが窺える。出土した土器群は、松木藪式土器と命名され、弥生時代後期土器の編年が示された（本田1980）。

注目されるのは、台地を横断する断面V字形の大溝である。大溝は弥生時代中期末頃に掘削されたと推測され、確認した規模は、幅2～4m、深さ2.5～2.3m、長

さ約80mである。溝跡の周囲はシラス上面まで削平されていることから、本来の大きさは、幅4～5m、深さ2.5～3m程で、溝跡の東側には土塁が存在した可能性が指摘されている。大溝はその規模から判断して、集落防衛を目的とし、当時、社会的緊張が存在したと考えられている（本田2005・2006）

このように、松木藪遺跡は、遺構の規模、交流や交易を示す遺物の存在から、田布施平野における拠点集落と位置づけられている。

3 鉄鏃・砥石の報告（第3図）

松木藪遺跡で出土した鉄鏃、鉄器研磨用の砥石について報告する。

鉄鏃は大溝内で出土したもので、同封されていた遺物カードにはMZ5次A-1区溝内1層527と記されている。平面系が五角形を呈する凹基式の無茎鏃で、基部には浅い抉りが入る。刃部の両辺が直線的であるため、厚さ3mm程の鉄板を鑿によって切断し、研磨加工を行い製作されたと考えられる。平面形が左右非対称のため、未製品との区別が難しいが、破面をみると横断面は紡錘形に近く、刃先に向かって先細りしている。そのため、研磨によって刃先を研いだ完成品と考えられる。長さ4cm、幅2.4cmで重さは3～5g程度と推測される。錆が少なく状態は良い。

砥石は細粒砂岩を使用しており、遺物カードには、最新破壊出土と記されている。長さ12.8cm、幅11.7cm、厚み1.4～6.6cm、重さ1050gである。正面と裏面は研磨によって磨り減り、大きく凹んでいる。砥面は著しく白色に変色し、鉄分が付着しているため、鉄器研磨用の砥石と考えられる。正面の上部には、浅い溝が4条確認できる。今回の調査で、鉄器研磨用と考えられる砥石は、本製品を含めて3点確認できた。目の粗い砂岩を使用している砥石もあり、鉄器の種類や仕上げの工程に応じて使い分けていたと推測される。

4 鉄鏃の時代について

平面形が五角形の凹基式無茎鉄鏃は、先行研究（川越1993，村上2003）や中九州・南九州の出土事例では弥生時代後期後葉以降に確認できる（第4図）。代表的な事例を挙げると、本県では、志布志市春日堀遺跡（公財鹿埋セ2020）で古墳時代前期前半の出土事例がある。また、熊本県では熊本市神水遺跡（熊本市2003），阿蘇市下山西遺跡（熊本県1987），阿蘇市幅・都留遺跡（熊本県2019）で弥生後期後葉から終末，宮崎県では川南町尾花A遺跡（宮崎県2011）で弥生時代後期後葉から終末の出土事例がある。

このような出土事例から，松木藪遺跡の鉄鏃の帰属時期は弥生後期後葉から終末頃ではないかと推察される。中九州や南九州の拠点集落では，弥生時代後期後葉から古墳時代初頭に鉄器の生産が行われていることが指摘されている。（村上1992，川口2018）。松木藪遺跡で出土した鉄器研磨用の砥石は，鉄鏃の製作が行われていた可能性を示しており，南九州における鉄器の製作・普及を知る上で重要な考古資料である。

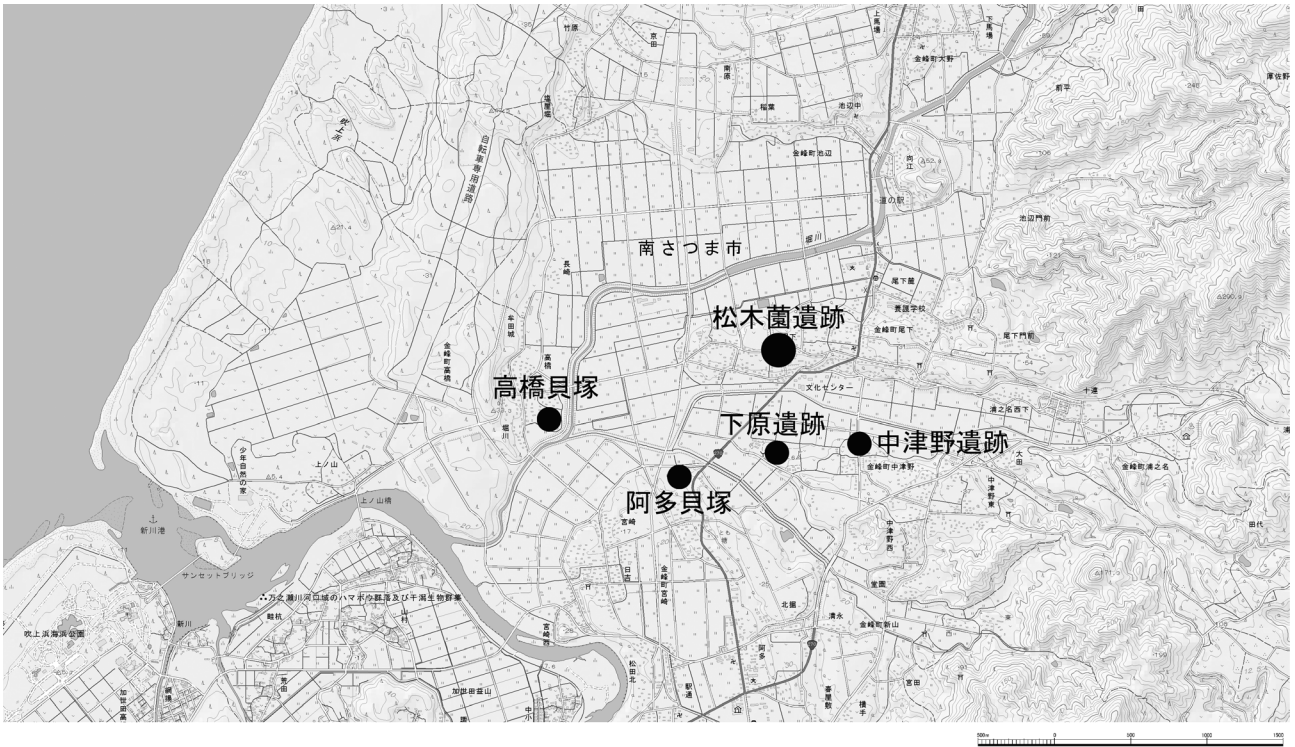
謝辞

本論を作成するに当たり，本田道輝氏には当時の調査状況等について，御教示いただきました。また，資料調査については南さつま市教育委員会に，文献の提供については前迫亮一氏，上床真氏の御協力をいただきました。末筆に記して感謝申し上げます。

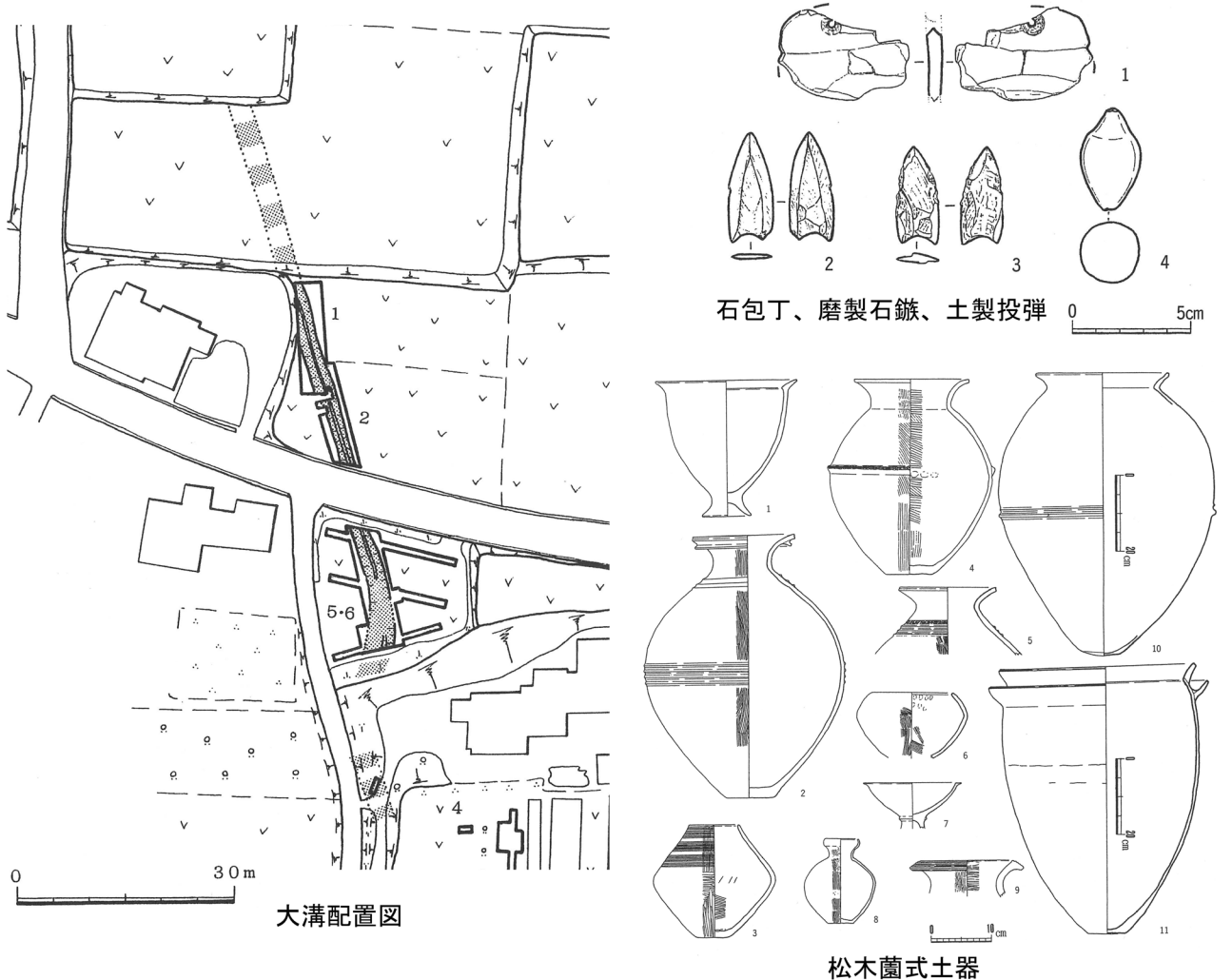
【引用・参考文献】

- 川口雅之2018「弥生時代の南九州における鉄器集成」
『鹿児島考古』第48号
- 川越哲志1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
熊本県教育委員会1987『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告書88
- 熊本県教育委員会1992『二子塚遺跡』熊本県文化財調査報告117
- 熊本県教育委員会2019『幅・都留遺跡』熊本県文化財調査報告336
（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2020『春日堀遺跡1 縄文時代中期～近世編』
（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書32
- 本田道輝1981「松木藪遺跡の調査」『鹿大史学』第29号
鹿大史学会
- 本田道輝1993「松木藪遺跡検出の住居跡について」『大河』第4号 大河同人
- 本田道輝2005「松木藪遺跡」『先史古代の鹿児島（資料編）』鹿児島県教育委員会
- 本田道輝2006「学術所見 鹿児島県域における弥生時代の大溝について」『寺山遺跡』寺山遺跡民間調査会・川辺町教育委員会
- 宮崎県立埋蔵文化財センター2011『尾花A遺跡Ⅱ（弥生

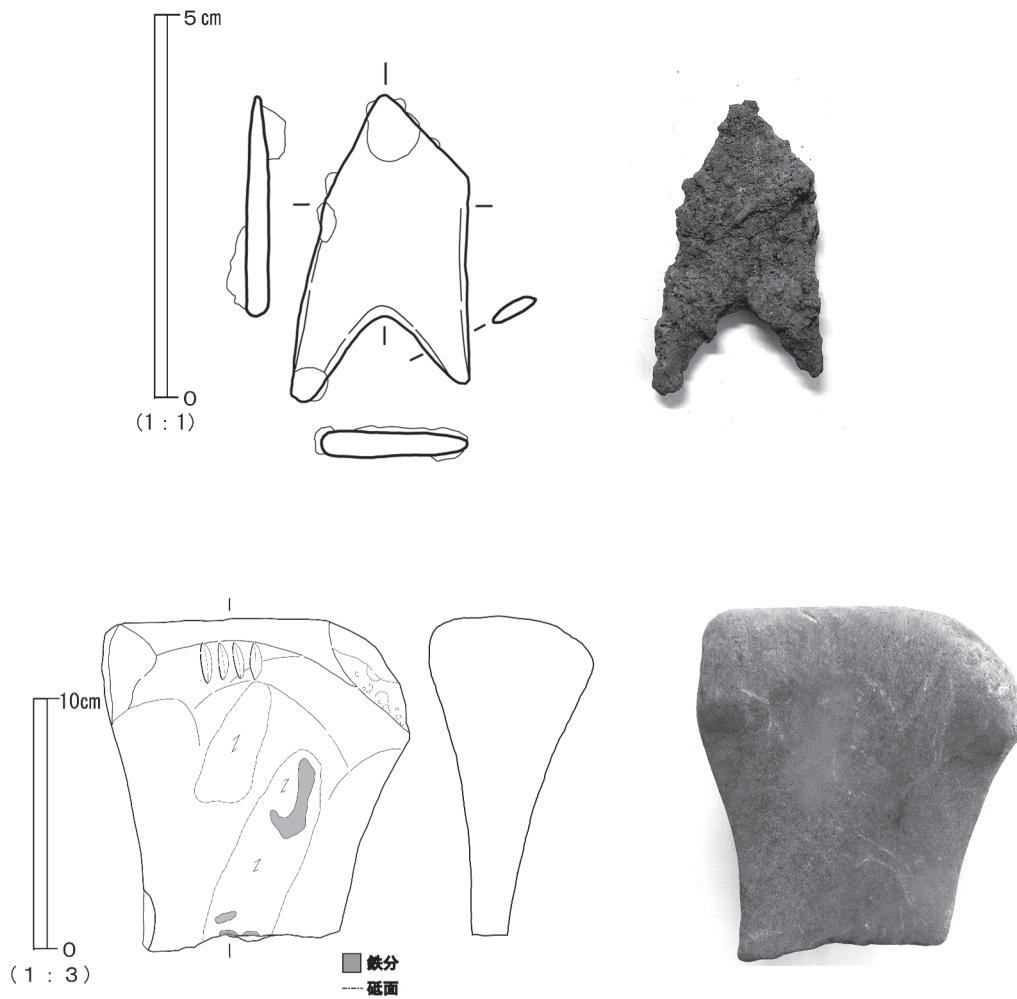
- 時代以降編）』宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書195
村上恭通1992「中九州における弥生時代鉄器の地域性」『考古学雑誌』第77巻第3号
- 村上恭通2003「弥生時代の鉄鏃—古墳時代初頭まで—」
『考古資料大観 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』第7巻 小学館



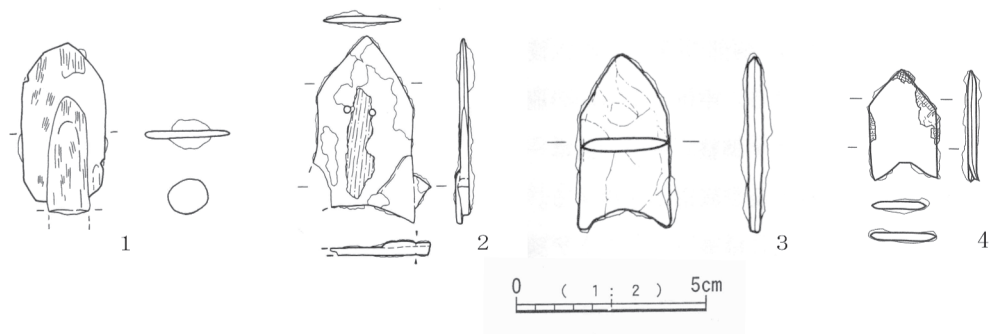
第1図 遺跡位置図 (1/2,500)



第2図 松木菌遺跡の遺構・遺物 (本田2006より転載)



第3図 松木菌遺跡出土鉄鏃・砥石



第4図 中九州・南九州の無茎凹基式鉄鏃（弥生時代後期後葉～古墳時代前期前半）
 （1志布志市春日堀遺跡、2阿蘇市幅・都留遺跡、3熊本市神水遺跡、4川南町尾花A遺跡）

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文

Development of the Sakai River (Manose River tributary) watershed
from the Yayoi Period to the Early Modern Period
Yosifumi Kuramoto

要旨

中津野遺跡の発掘調査成果とこれまでの文献史学による研究成果から境川流域における主に水田開発について検討を行った。湿地帯を区画する道板から弥生時代前期中頃から水田開発が行われ、道跡や畦畔跡から古代末には新しい水田開発技術を取り入れた水田開発が行われていた。水田開発に伴い、尾下台地と中津野台地を繋ぐ主要な道は、時代により上流から下流へと移動していった。

キーワード 境川流域 水田開発 道跡 中津野遺跡

1 はじめに

2006（平成18）年に一般国道270号（宮崎バイパス）の改築工事を起因とする発掘調査が始まり、中断を経て平成29年度に終了した。2022（令和4）年には「中津野遺跡低地部・低湿地部編」が刊行された。この中津野遺跡の低地部・低湿地部が、境川流域にあたる。なお、便宜的に尾下集落の所在する台地を尾下台地、中津野集落の所在する台地を中津野台地と呼ぶこととする。

まずは、中津野遺跡の概要を述べる。中津野遺跡は、南さつま市金峰町中津野に所在し、台地上から台地の北側にある沖積地まで含む広い範囲をもつ遺跡である。遺跡が所在する中津野台地と北側の尾下台地の間には西流する境川（浦之名川）の氾濫による沖積地が形成されている。境川は尾下台地の北側から流れてくる堀川と高橋集落付近で合流し、まもなく万之瀬川に注ぐ。現在、堀川流域には広大な水田が広がる。尾下台地には「V」字形の大溝が松木藪式土器を伴って発見された松木藪遺跡がある。西側には吹上浜砂丘があり、この砂丘の東にある高橋貝塚が所在する高橋集落まで直線距離で約2 kmである。また、南約3.5 kmの万之瀬川右岸には持躰松遺跡や芝原遺跡等がある。

中津野遺跡は1950（昭和25）年に河口貞徳氏により発掘調査が行われ、中津野式土器の標式遺跡になっている。「中津野遺跡低地部・低湿地部編」で報告された調査箇所は中津野遺跡でも北端にあたり、中津野台地の縁辺から万之瀬川支流の境川までの範囲で発掘調査が行われた。中津野遺跡は境川の左岸に位置するが、右岸には中津野遺跡と同じ事業を起因として2006・2007（平成18・19）年に発掘調査を行った南下遺跡が所在し、2011（平成22）年に報告書が刊行されている。

中津野遺跡の低地部・低湿地部の発掘調査では縄文時代早期～晩期・弥生時代・古墳時代・古代・中近世の遺構・遺物が確認された。特に縄文時代後期では、集石・土坑・遺物集中等の遺構が検出されると共に指宿式土器や市来式土器が多量に出土した。また、弥生時代では豎

穴建物跡や土坑などが検出され、前期の刻目突帯文土器が多量に出土した。特に準構造船の一部である舷側板の出土は注目される。この舷側板を含む木製品等は、低湿地部において一定のまとまりをもって検出された。年代測定の結果、弥生時代前期から古代末までの年代を得た。さらに、中世を中心とする道跡や畦畔等の土木遺構が検出された。道跡を構成すると考えられる杭は年代測定を行った結果、古代末から近世までの数値を得た。

そこで、今回刊行された「中津野遺跡低地部・低湿地部編」（以下、報告書と記載する。）に報告された調査成果と尾下台地と中津野台地に挟まれた谷部を流れる境川流域の文献史学における研究成果とを併せて周辺の弥生時代から近世までの様相を検討することとした。具体的には、境川流域の水田開発と道について焦点化して述べてみたい。

2 中津野遺跡（低地部・低湿地部）の調査成果の概要

ここでは、調査成果の中でも境川流域の水田開発と道に関連するものに特化して報告書から引用する。今回報告書が刊行された中津野遺跡（低地部・低湿地部）の位置については第1図に示した。（以下、中津野遺跡とは低地部・低湿地部を指す。）また、中津野遺跡と境川の対岸にある南下遺跡の調査範囲については、第2図に示した。

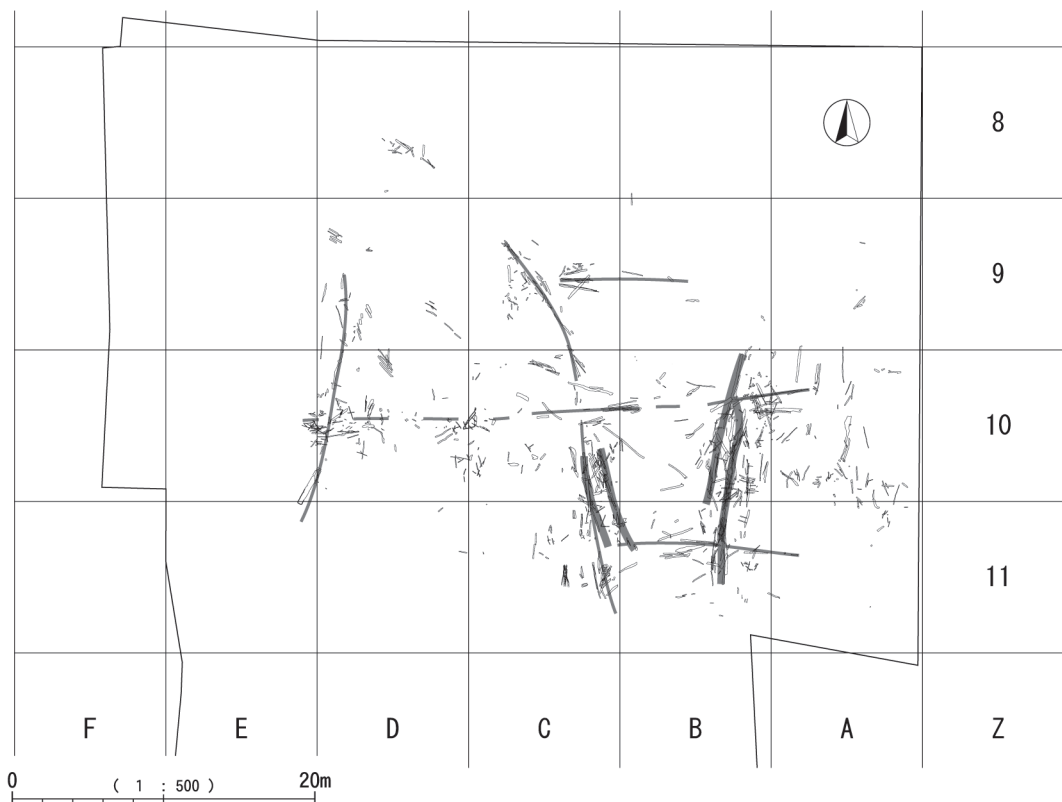
中津野遺跡の低湿地部から木製品の集中部が、Ⅱb層を中心に検出された。この集中部を形成する木製品の多くが、破損品であった。しかし、木製品は一定の方向性をもち、湿地帯を区画するように敷かれていた。第3図に出土状況とアミカケで木製品の敷かれていた方向性を示した。年代測定結果では弥生時代前期から古代の数値を得たが、なかでも弥生前期末から中期初頭の木製品が多くを占めた。また、木製品集中部周辺の土壌試料で自然科学分析を行っている。珪藻分析では、Ⅱ層の堆積時には周辺は池沼等の止水域であったことが想定されている。さらに、植物珪酸体分析によるとⅢ層の下位から上



第1図 中津野遺跡位置図



第2図 調査範囲と道跡



第3図 木製品集中部 中津野遺跡 低地・低湿地部編
第3-61図を一部改変

位にかけて連続して、特にⅡ層下位ではイネ属が産出されている。以上のことから、弥生時代前期には稲作が行われたことを想定している。

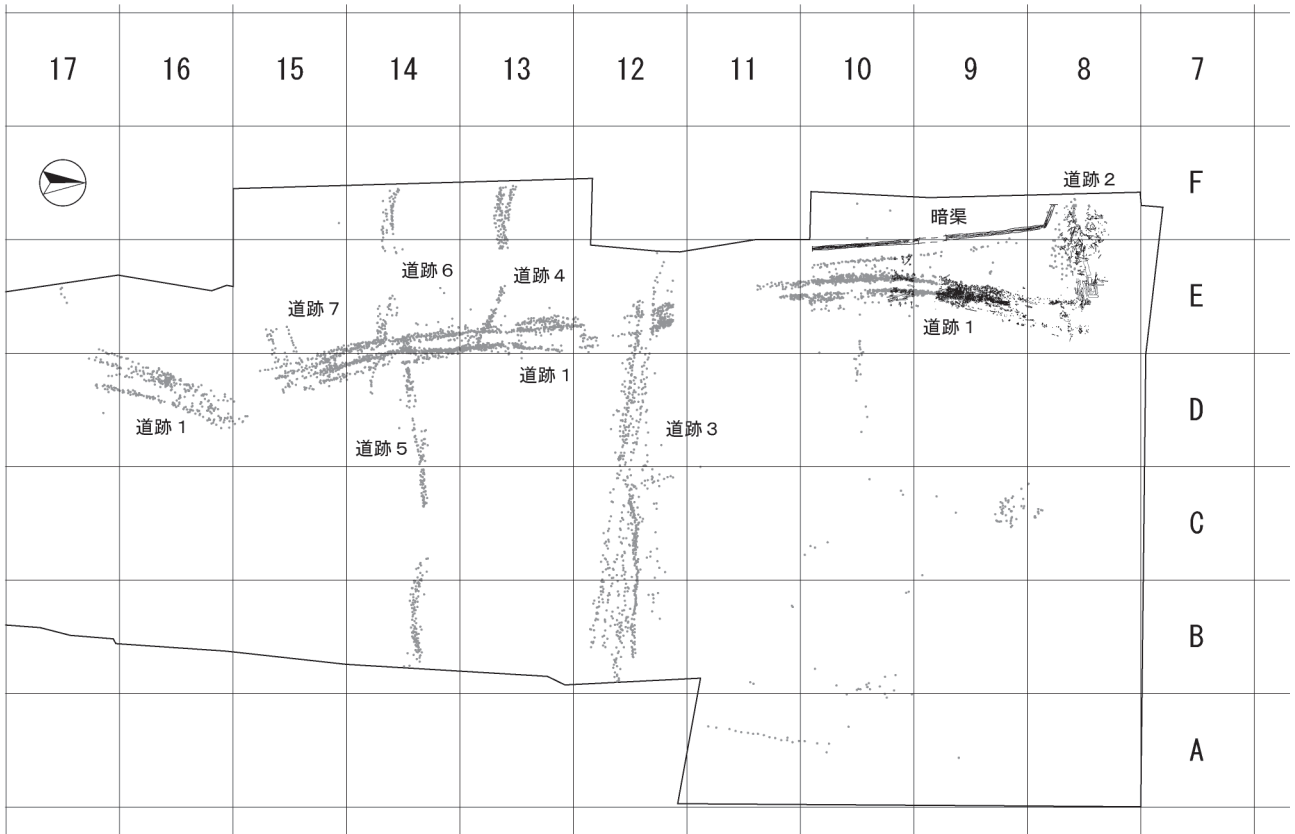
また、低地部から低湿地部にかけてのⅡa層からは打設された状態の杭が、多量に出土した。杭は2列一組を単位として列状に確認され、杭列の間には盛り土や敷粗朶が確認されたことから、道跡としている(第4図)。報告書では想定される7条の道跡について説明を行っている。なかでも道跡1～3は道跡4～7と比べて道幅が広く、打設された杭の数も多い。特に道跡1は盛り土や敷粗朶が確認され、大規模な造成が行われていたと想定する。途中杭列の確認されなかった部分はあるものの長さ約90m、幅約2mでほぼ南北に延びる。道跡1は構成する杭の年代測定結果から、10・11世紀に造成が始まり、14・15世紀には大規模な補修・改修が行われたとする。道跡2は調査区の北端を東西に延び、西側は調査区境まで東側は道跡1と接する付近まで検出された。時期については道跡1と同じと推定している。道跡1と道跡2の接する付近の北側には戦前に構築されたと考えられる幅約7mのコンクリート製の井堰跡が確認され、ここに旧境川が流れていたとする(第5図)。道跡2は旧境川の堤防上に築かれた旧境川に沿った道跡とし、近くに検出された杭列から蛇行

した道を想定している(第5図)。また、尾下台地の南側に残る「馬渡(ウマワタリ)」,「川渡(カワワタシ)」や道跡が検出された西側の「上橋モテ」「下橋モテ」という小字から尾下台地と中津野台地を繋ぐ道があり、その一部が道跡1と想定している(第6図)。さらに、中津野遺跡の北側に隣接する南下遺跡で道跡が確認されていないことから、南下遺跡の調査区域を外れて道が続く可能性も述べている。また、道跡1から西もしくは東方向へ延びる杭列は道跡1よりも杭列の幅が狭く、水田を区画する畦畔としている。

3 これまでの境川流域に関する研究

ここでは「阿多郡司平忠景寄進状案 保延4年」,「関東下知状案 貞永元年」,境川・堀川流域に関する研究について紹介する。これ以外の研究については、それぞれの項で触れることとする。

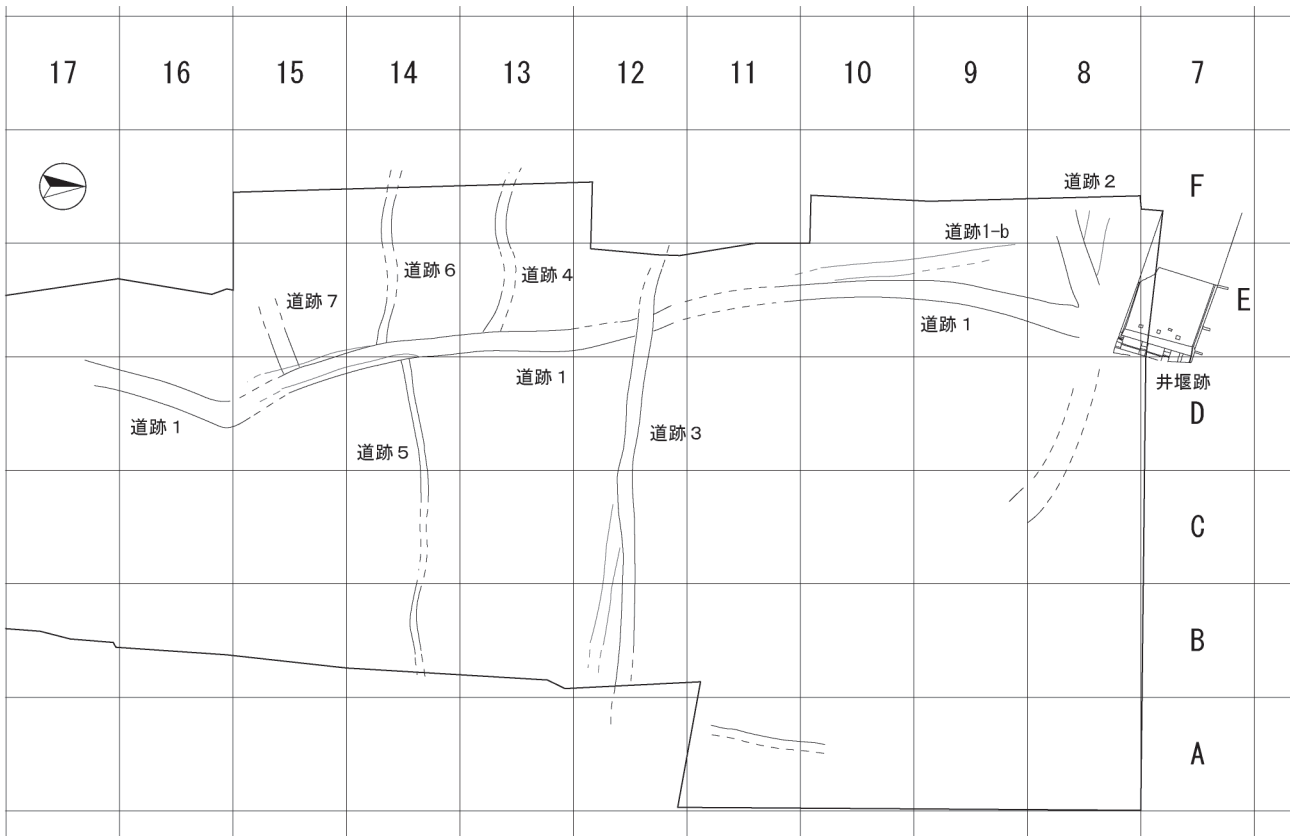
- (1) 「阿多郡司平忠景寄進状案 保延4(1138)年
「阿多郡司平忠景寄進状案」には祈祷料所として平忠景(阿多忠景)(注1)が「牟田上浦壺曲荒地」を観音寺へ寄進したとある。この中に寄進した土地の四至を
「限東御堂東小谷 限南神狩蔵峯并利山
限西船田頭野馬大路 限北不忘崎長崎」



1グリッド10m

第4図 道跡杭検出状況図

中津野遺跡 低地・低湿地部編
第17図を一部修正



1グリッド10m

第5図 道跡配置図

中津野遺跡 低地・低湿地部編
第3-47図を転載

と記してある。西の境は「船田頭野馬大路」で「船田」の字名は現在でも残っている。このことから五味克夫氏は「往事その付近を馬の往来する大路があったのであろう。」とする。柳原敏昭氏は近世の「薩州阿多郡田布施郷絵図」に描かれ、字「船田」付近を通る道を野馬大路と想定する。また、近世の道を前提にしたことを断りながらも「野馬」を南九州市川辺町の「野間」とし、野馬大路は野間に至る道とした。さらに、江平望氏は「牟田上浦」を近世の浦之名村にある門の名称から浦之名に比定している。

一方、観音寺へ寄進したのは「荒地」と記してある。「荒地」について12世紀の例を基に「所領寄進を正当化するために、そこが荒野となっていると称することはきわめて一般的な手段であった。」と黒田日出男氏は指摘している。この指摘を考慮すれば「阿多郡司平忠景寄進状案」保延4（1138）年の段階で少なくとも船田付近までは水田開発が進んでいたことになる。さらに柳原敏昭氏は「阿多忠景の段階で、船田より西側にも開発が及んだと考えられる。」と述べている。また、榎畑光博氏は、都城盆地を例として9世紀中頃から10世紀前半を古代の第一次開発ラッシュと位置づける。そして10世紀後半の気象悪化現象が一因となり、集落が衰退し、耕地が荒廃した可能性に言及している。

（2）「関東下知状案」 貞永元（1232）年

建久3（1192）年、阿多宣澄が保有していた阿多郡地頭職は没収となり、鮫島宗家（注2）が補任される。そして建保6（1218）年に南北に分割され、北方（田布施・高橋）を子の鮫島家高に、南方（阿多）を弟の鮫島宗景に譲った。その後、北方と南方による境界線の道をめぐむ争いがおこり、幕府による裁許を示すのが「関東下知状案」（貞永元年）である。これによると、当時、尾下台地の裾を通る北路と川沿いの南路があり、いずれも高橋に通じる道とある。北方は南路を、南方は北路を境界と主張したが、結局幕府は北方の主張する南路を境界と裁定した。

先の「阿多郡司平忠景寄進状案」にある野馬大路と「関東下知状案」にある南路との関係について五味克夫氏は野馬大路と南路は重なる可能性を指摘する。一方柳原敏昭氏は別の道であるとするが、野馬大路と南路が一部重なるか、交差する可能性は指摘している。さらに南路は「平安時代にさかのぼるものと考えてよからう。・・・自然堤防上の微高地を通過していたと推測される。」と述べている。

（3）境川・堀川流域の水田開発

中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地の水田開発について柳原敏昭氏は「三国名勝図絵」所収の「金峯山由来記」等の史料や阿多忠景と関係の深いとされる施設が検出された小菌遺跡が近くに所在することから「阿多郷絵図」に記された「古田」に着目し、水田開発が平安時

代後半期までさかのぼる可能性を指摘し、「谷部の開発は、郡司時代の阿多忠景によって行われた。」と結論づけた。

境川が高橋集落付近で合流する堀川流域の沖積地の水田開発については様々な指摘がある。市村高男氏は「持躰松遺跡が稼働していた11世紀後半～15世紀、万之瀬川下流域はこのラグーンを中心に荒涼たる湿地が広がる世界」と推定し、「12世紀半ば～後半の阿多忠景の開発は、こうしたラグーン縁辺部や湿地帯のそれであったと考えることができる。」と結論付けている。これに対して柳原敏昭氏は「沖積低地部にはラグーンの存在を想定しにくい。」とする。一方、江平望氏は「・・・高橋貝塚の遺跡が示すように、古くはこの近くまで海が湾入し、入り江に臨んだ港であったと思われる。すなわち中世までは阿多郡の唯一の開港場で、交通運輸上の一要地であった。」とし、先の貞永元（1232）年「関東下知状案」の内容から「これから察すると、高橋と浦之名との連絡は密接なものがあり、その間の開田もかなり進んでいたことが想像される。」と述べ、この地域の開発は阿多忠景によるものとする。また、柳原敏昭氏は「沖積低地部の開発は、忠景によって着手され、一定の成果をあげた後、鮫島氏・二階堂氏（ことに前者）によっても行われた可能性がある。」と指摘する。この地域のラグーンについて森脇広氏は持躰松遺跡の発掘調査報告書の中で周辺の遺跡の立地から縄文時代前期・弥生時代前期は「ラグーン的环境下にあった。」とする。

5 考察

前述のとおり、これまで文献資料をもとに様々な研究が行われてきた。ここでは、中津野遺跡の発掘調査結果もあわせて以下の事柄の検討を行う。

（1）境川流域における水田開発の変遷について

中津野遺跡では弥生時代前期から古代末までの道板（木製品集中部）と古代末から近世までの道跡及び畦畔跡が確認されたことから報告書では中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地に広がる水田を想定している。木製品集中部と道跡から出土した杭等の年代測定を行っているが、これをまとめたものが第1表である。（注3）2σ暦年代範囲を大まかに「⇔」で、あわせて暦年較正用年代（yrBP）も示した。この表からは、境川流域における水田開発の特徴が見て取れる。一つ目は、湿地帯に道板を敷き区画を設けての稲作が弥生時代前期中頃に始まったことである。二つ目は、湿地帯を区画する道板が少なくなる期間が長い間続くことである。三つ目はその後、水田を区画するために杭等で道や畦畔を古代末に造り始めたことである。

道板の年代測定は暦年較正用年代（yrBP）で2,400年代より古くなるものはなく、最も新しいものが900年代である。年代測定結果にばらつきのあった舷側板を除いた試料26点のなか、19点が2,400～2,100年代の範囲

出土 区域	試料 番号	掲載 番号	2σ 暦年代範囲 calBC								2σ 暦年代範囲 calAD								暦年校正用 (yrBP)	備 考											
			8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8			9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	35	879																												1882 ± 27	
	39	882																												2211 ± 23	
	40	869																												2341 ± 24	
	41	874																												2228 ± 23	
	42	877																												2160 ± 22	
	43	528																												1530 ± 22	
	45	878																												2233 ± 24	
	48	883																												2232 ± 26	
	49	385																												1023 ± 25	
	51	870																												1858 ± 26	
	52	876																												2209 ± 19	
	54	885																												2473 ± 21	絨刺版
	55	885																												2401 ± 22	同一試料2回測定
	56	885																												2462 ± 22	絨刺版
	57	-																												2320 ± 22	同一試料2回測定
	67	887																												2491 ± 21	絨刺版
	70	384																												2389 ± 22	同一試料2回測定
	71	894																												2207 ± 21	
	76	-																												2425 ± 22	
	79	893																												933 ± 21	
	80	891																												2195 ± 21	
	82	881																												2362 ± 21	
	84	884																												2166 ± 22	
	85	889																												2176 ± 22	
	89	873																												2165 ± 20	
	91	879																												2481 ± 20	
	92	-																												2216 ± 22	
	93	-																												2370 ± 20	
	96	880																												1815 ± 21	
	58	-																												2478 ± 20	
	59	-																												2211 ± 22	
	60	-																												2065 ± 21	
	61	-																												2446 ± 21	遺跡1下 III層出土
	62	-																												1005 ± 22	遺跡1 杭
	63	-																												645 ± 20	遺跡1 杭
	64	-																												620 ± 20	遺跡1 杭
	65	-																												137 ± 20	遺跡1 杭
	66	-																												358 ± 19	遺跡1 杭
	69	208																												618 ± 19	遺跡1 杭
																														936 ± 19	遺跡3 板材
																														588 ± 19	遺跡1 杭
																														427 ± 22	遺跡1 縄

第1表 木製品等年代測定結果 中津野遺跡 低地部・低湿地部編 第8章のデータを基に作成

に含まれる。また、2,000年代以降のものは7点であった。なお、舷側板は同一試料で2回測定を行い、大まかには暦年較正用年代 (yrBP) 2,300年代と2,400年代とばらつきがある結果であった。舷側板以外に最も古い数値が2,400年代であるが、道板 (木製品集中部) 近辺から土器等の出土がなく、舷側板の年代測定結果にばらつきがあることから時期の明確な特定は難しい状況である。そこで暦年較正用年代 (yrBP) が2,400年代という数値を基に北部九州における弥生式土器型式に当てはめると前期中頃に相当する。舷側板の2,300年代という新しい数値まで含めても前期中頃から中期初頭の板付Ⅱ式〜城ノ越式に相当する。なお、遺跡全体では石包丁や弥生時代前期中頃から後半の土器が多量に出土している結果と齟齬はないと考える。以上のことから、中津野遺跡周辺では道板を湿地帯に敷いて区画を設けて行う稲作は弥生時代前期中頃から始まり、古代末で終わる。しかも、この方法が盛んに行われるのは暦年較正用年代 (yrBP) が2,100年代 (BC 3世紀) までで、その後は極めて少なくなる。この理由として想定できることが二つある。一つは稲作が何らかの理由で衰退すること、もう一つは紀元前3世紀以降、周辺の陸地化が進み道板を敷く必要がなくなったことが考えられる。

中津野遺跡で確認された道板で区画する面積は70〜80㎡と報告されている。これは、当時の水田1枚の面積とするには広すぎる印象がある。弥生時代の後期ではあるが、薩摩川内市の京田遺跡でも水田跡が検出されている。ここでの1区画の面積は広いもので約20㎡で、他は10㎡に満たない。この調査結果からすると、中津野遺跡の木製品を敷いて区画した範囲は大区画で、実際の稲作は大区画を分割した小区画で行っていた可能性がある。

道板で区画する方法が始まる弥生時代前期中頃以前の稲作については言及できるだけの調査結果は少ない。しかし、中津野遺跡の縄文時代早期〜後期の包含層であるⅢ層からもイネ属の珪酸体が産出されていることから稲作が弥生時代前期中頃を遡る可能性も残る。さらに、上流から下流に向かって止水域や陸地化が進むことを考えると中津野遺跡より上流側や境川の支流が浸食した谷部で弥生時代中期以前に稲作が行われ、その時期の水田跡が残っている可能性もある。

前述のとおり道板を使って水田を区画する方法は、古代末に終わる。そして同じ頃に2列1組の杭を打設して道や畦畔を造成し、水田を区画する方法が始まる。中津野遺跡では南北に幅2mの核となる道で大規模に、これから東西に延びる畦畔を造成する土木工事を行っている。畦畔に使われた杭の年代測定は行っていないが、畦畔は道跡に伴うものと考えれば道跡を構成する杭の年代測定結果で類推できる。杭をもって水田を区画する方法は、道板のそれよりも強固な畦畔で水を管理しやすいものであったはずである。それまでの稲作と比べ大規模な水田開発が可能で生産性も上がったと考えられ、まさしく時代の転換期であったであろう。

この水田開発が始まった古代末は律令制度の崩壊と荘園化が進む時代であり、この社会的背景と深い関わりのあると考えられる。このことについて日隈正守氏は「薩摩国における11世紀の時期は郡郷制改編の開始とともに荘園公領制形成の端緒が見え始めた時期であると総括できる。」と指摘する。また、新田八幡宮が鮫島家高との争いで提出された「康和立券紛失状」をもとに阿多郡内に荘園が設定された時期については「康和年間 (注4) より幾らか以前の時期、恐らく11世紀後期であると考えられる。」と述べる。

中津野遺跡で確認された杭を打設するという新しい工法による水田開発は、杭の年代測定の結果によると10世紀まで遡る。阿多郡内における荘園の設定の時期については言及できるだけの発掘調査成果はないが、新しい工法による水田開発と荘園の設定には何らかの関連性があると考えられる。さらに、多くの研究者が指摘しているように大陸との交易で重要な役割をもった持躰松遺跡との関連も考えられる。ここからは貿易陶磁器が多量に出土し、そのピークは12・13世紀とするが、11世紀のものも確認されている。境川流域の水田開発も含め、万之瀬川流域においては11世紀が時代の転換点となったことが注目される。

(2) 阿多忠景が寄進した荒地について

古代末には中津野遺跡の上流側で水田開発が行われていたことがわかる史料が、保延4 (1138) 年の「阿多郡司平忠景寄進状案」である。前述のとおり、阿多忠景が祈祷料所として「牟田上浦壺曲荒地」を観音寺に寄進したとある。ここは中津野遺跡から800mほど上流にある浦之名の一部に比定されている。これまでの研究でも「荒地」ではなく、開発された水田であったという見解が示されている。「牟田上浦」の比定箇所についての発掘調査は行われていないが、中津野遺跡の発掘調査結果から当時の状況が類推できる。阿多忠景が寄進した「牟田上浦壺曲」より下流に位置する中津野遺跡では古代末には杭を打設して道や畦畔を造る新しい方法で水田開発が行われていた。さらに南北に延びる道跡1から西側 (境川下流側) に延びる畦畔 (道跡4・6等) もあることから中津野遺跡の西側へも早い段階で開発が及んでいたことも想定される。つまり、阿多忠景の時代には「牟田上浦壺曲」はもとより中津野遺跡で検出した道跡等よりさらに西側まで開発が及んでいた可能性もある。水田開発は水等の管理がしやすい河川の上流部からと開始されたと考えられる。このことから阿多忠景が寄進した「牟田上浦壺曲」は「荒地」ではなく、既に開発された土地と見ることが妥当であろう。ただ、榎畑光博氏が言及するように荒廃した耕地を再開発した可能性はある。

さらに、中津野遺跡で確認された杭を打設して区画するという水田開発方法の開始は、年代測定結果から阿多忠景が「牟田上浦壺曲荒地」を観音寺に寄進した時よりも100年以上ほど遡ることがわかった。阿多忠景よりか

なり早い時期に新しい方法による水田開発が始まり、ある程度開発が進んだ段階で阿多忠景が引き継いだと考える。さらに14世紀を中心に道跡1は大規模な補修・改修が行われたことから、阿多忠景のあと婿の宣澄、そして鮫島（阿多南方地頭）・二階堂（阿多北方地頭）へと水田開発が引き継がれたと考える。

(3) 境川流域に延びる道について

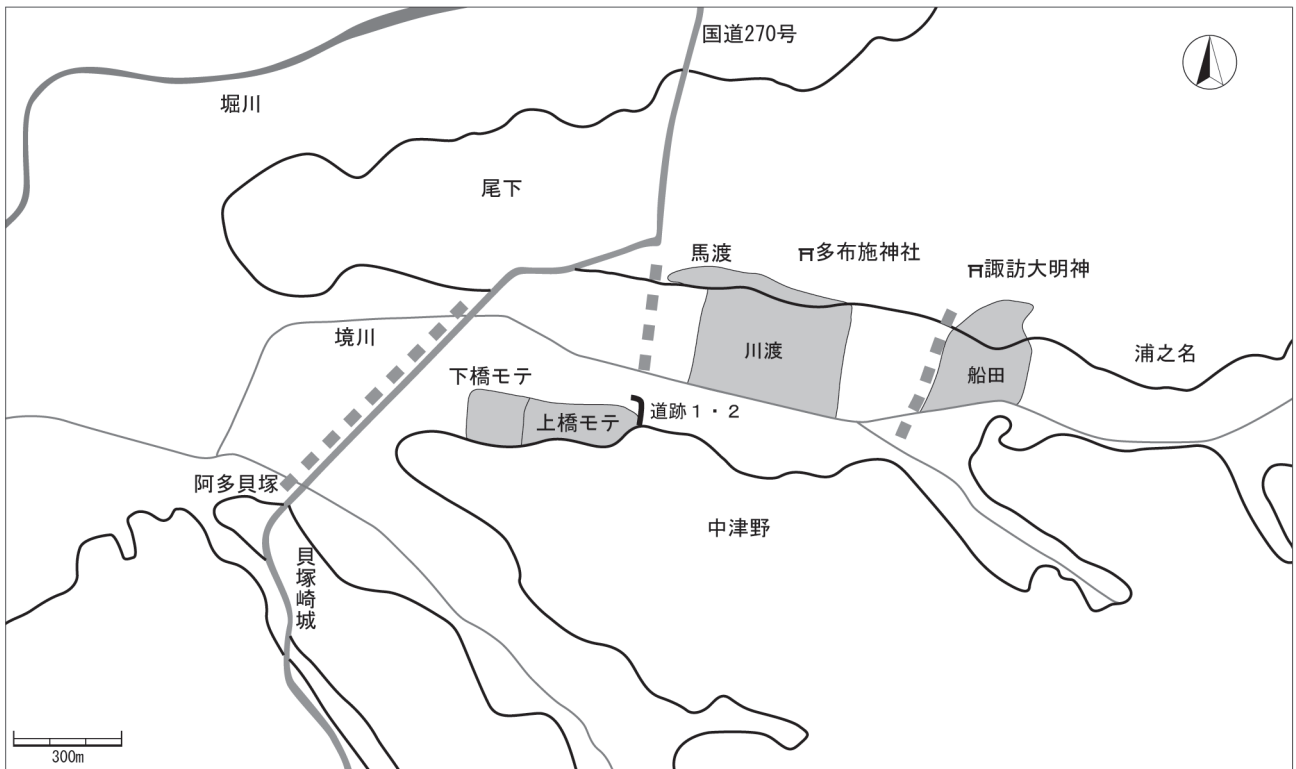
中津野遺跡の発掘調査成果とこれまでの調査研究成果を検討した時に中津野台地と尾下台地を繋ぐ主要な道が時代と共に境川の上流から下流に向かって移動したことが想定される。これらの道については第6図に「■■■■」で、併せて関連する字の位置についても示した。

中津野遺跡では前述の道跡1が検出された。これを構成する杭や敷粗朶に関連すると考えられる縄の年代測定結果から11世紀から19世紀に亘って補修を繰り返しながら継続的に道が使われ、特に14世紀には大規模な造成が行われている。湿地帯に杭を打設して造る道を核とした新たな水田開発は11世紀から始まり、14世紀には中津野台地と尾下台地に挟まれた水田地帯を南北に延びる強固な道になったと考えられる。しかし、中津野遺跡の北側に隣接する南下遺跡からは道跡1に関連する遺構が検出されていないが、報告書では中津野遺跡周辺には「上橋モテ」、「下橋モテ」「川渡」、「馬渡」の字が残ることから尾下台地と中津野台地の間を繋ぐ道があったと想定している。このことから中津野台地から旧境川まで延びた道は、いずれかの場所で境川を渡って尾下台地と繋

がっていたと考えられる。つまり、14世紀には、この道跡1が中津野台地と尾下台地を繋ぐ主要な道として利用されていたと考える。

この道跡1の北端付近では枝別れる2列一組の杭列が検出されている（第5図道跡1-b）。この杭列を構成する杭の1点が、19世紀の年代測定結果をもつ。道跡1と比べると杭の数も少なく道幅も狭くなり、これに沿うように足跡も検出されていることから畦畔と考えられる。反対に、道跡1の杭に19世紀の年代測定結果をもつものはない。つまり、19世紀には道跡1に沿うように畦畔程度の道が造られることから道跡1が主要な道としての役割を失ったことが発掘調査結果から考えられる。さらに、寛政4（1792）年に描かれた「薩州阿多郡田布施郷絵図」には道跡1に関連するような道は描かれていないことから18世紀後半にはすでに主要な道としての役割を失っているといえる。

中津野遺跡から東（境川上流）約800mに「野馬大路」が延びていたとされる字「船田」がある。「野馬大路」は、阿多忠景が寄進した「牟田上浦壺曲」の西の境である。「大路」であるからには、それなりに主要な道であったはずである。字「船田」付近の発掘調査は行われてはいないが、阿多忠景の時代である12世紀には中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地に「野馬大路」があった。この「野馬大路」が、中津野台地と尾下台地を繋ぐ道であったか否かについては定かではない。しかし、中津野遺跡の調査成果から道の造成と水田開発は一体に進められていることから字「船田」付近の開発も同



第6図 境川流域の道

中津野遺跡 低地・低湿地部編
第3-49図を一部改変

様であったと考えられる。つまり、中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地である字「船田」付近にほぼ南北に通した道を中心に水田開発を行ったと考えられることから「野馬大路」は中津野台地と尾下台地を繋ぐ道と想定する。

中津野遺跡からさらに西側（境川下流）約600mには国道270号が、中津野台地の南西側に位置する宮崎台地と尾下台地を繋ぐように延びる。この国道は、前述した「薩州阿多郡田布施郷絵図」に描かれている尾下台地から宮崎台地先端にある貝殻崎城跡へ続く道とほぼ重なる。柳原敏昭氏は「・・・阿多郡一加世田別府間の中世の道は、基本的に国道270号線と同じ道筋であったとしてよいのではなからうか。」と述べている。つまり、18世紀後半には現在の国道270号とほぼ同じ道筋に主要な道が延びていたことと考えられる。ただ、宮崎台地と尾下台地を繋ぐように延びる国道270号に隣接する沖積地の発掘調査は、これまで実施されていない。

以上のことから、尾下台地と中津野台地に挟まれた湿地帯には平安時代末から近世の間に主要な道が3条造られていたと考える。つまり、境川流域の主要な道は阿多忠景の時代は境川上流の字「船田」付近を通る「野馬大路」、14世紀には中津野遺跡で検出された道跡1、近世には現在の国道270号とほぼ同じ道筋と時代毎に移動していったと考えられる。道の造成は当然水田開発に伴うものであり、主要な道が西に移動することは水田開発が西に進んでいったことを物語る。

さらに、「関東下知状案」貞永元（1232）年にある「南路」について述べる。この「関東下知状案」に南路は川に沿った往古からの路であったという。発掘調査で検出された道跡2が南路にあたる可能性について考えてみたい。報告書では道跡1の北端に確認された幅約7mのコンクリート製の井堰跡を根拠に旧境川があったとする。ここで問題となるのが、井堰跡を流れていたのが旧境川だったかという点である。中世の地理的要素を色濃く反映すると考えられる近世に作成された「薩州阿多郡田布施郷絵図」では旧境川は蛇行しながら西流し、この旧境川と中津野台地の間には旧境川に流れ込む小河川が短く描かれている。しかし、この小河川は、今回発掘調査を行った中津野遺跡付近までは到達していないように見える。また、現在の境川は改修され直線的な流路となっているが、それ以前の流路とは異なると考えられる。境川の北側に隣接する南下遺跡の発掘調査では狭小な自然流路跡以外は確認されていないことから、旧境川は現在の境川より南側（中津野遺跡内）を流れていたと想定できる。さらに、場所によって異なるが、現在の境川の低水路幅が10m弱であり、井堰跡の幅とほぼ同じである。以上のことから井堰跡を流れていたのは旧境川と推測できる。この旧境川の堤防に築かれたのが道跡2である。道跡2を構成する杭等の年代測定は行っていないが、道跡1と一連の道であると報告されていることから道跡2も11世紀には造成されていた可能性は高い。以上

のことから先の「関東下知状案」にある「南路」は、道跡2の可能性も選択肢の一つとして考えられる。

（4）堀川流域の自然環境について

境川は国道270号を越えてさらに西側に流れ、尾下台地の北側を流れる堀川と高橋集落付近で合流する。この堀川流域に広がる沖積地の水田開発について今回の調査では直接的に関連する成果はなかった。前述のとおり、これまで議論の経過も踏まえ、自然環境について若干の考察を行う。中津野遺跡周辺は縄文時代後期の包含層であるⅢ層の堆積時には止水域であったことが自然科学分析結果から想定されている。中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地はかなり早い段階から陸地化が始まり、時代とともに境川の下流方向へ広がっていったものと考えられる。また、年代測定で弥生時代前期の数値を得た水田を区画する道板はⅡ層出土であるが、そのⅡ層下位からは植物珪酸体分析ではイネ属が検出されている。この時期には周辺は水田として開発されていたと考えられる。さらに道板の中に準構造船の舷側板が確認され、最大長約272cm、最大幅約30cm、最大厚約5cmを測る。年代測定では弥生時代前期の数値を得ている。この3m近い船の部材を人力で遠い場所から運ぶことは考えにくく、近くに手に入れやすい環境があったと考えられる。つまり、さほど遠くないところまでラグーンが広がっており、近くに廃船の部材を活用できる環境か、もしくは船で部材を運ぶことができる環境にあったと推定する。これらのことから、弥生時代前期には中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地では稲作が行われ、台地間の沖積地を抜けたあたりにはラグーンが広がっていたと考えられる。ただし、いつの時代までラグーンが存在していたか、その範囲等を推定するほどの調査成果はなかった。

6 おわりに

最後に、これまでの内容を以下のようにまとめる。

- （1） 中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地を流れる境川流域において弥生時代前期中頃には道板を敷いて湿地帯を区画した水田で稲作を行っていた。この方法による稲作は古代末まで続くが、紀元前2世紀以降は道板が少なくなる。そして古代末には多数の杭を打設して道や畦畔を造成し、水田開発を行うようになる。
- （2） 自然科学分析結果から、この流域での水田開発は弥生時代前期中頃には始まる。稲作についてはこれを遡る可能性もある。
- （3） 新しい工法による水田開発や近隣の遺跡の発掘調査成果から万之瀬川流域における時代の転換点は、11世紀にある。
- （4） 阿多忠景が寄進した「牟田上浦壺曲」は、既に開発された水田と見ることが妥当である。
- （5） 中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地を流れる境川流域において杭を打設して水田を区画する方法は阿多忠景の時代より約100年以上前に始め

られ、その後、阿多忠景に受け継がれ、さらには
鮫島・二階堂の時代の開発へと続く。

- (6) 中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地を南北に繋ぐ主要な道は3条あり、時代毎に異なる。12世紀は「野間大路」、14世紀は中津野遺跡検出の道跡1、19世紀は現在の国道270号と重複する「薩州阿多郡田布施郷絵図」に描かれた道筋が主要な道であった。
- (7) 「関東下知状案」貞永元(1232)年にある「南路」は、中津野遺跡検出の道跡2の可能性がある。
- (8) 弥生時代前期には中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地では稲作が行われ、台地間の沖積地を抜けたあたりにはラグーンが広がっていたと考えられる。

「中津野遺跡低地部・低湿地部編」の整理作業に多少なりとも携わり、2022年の8月によりやく刊行に漕ぎ着けた。しかし、報告書作成作業においては個人的な技量や時間的な制約の中で調査成果の検討や評価が不十分であったことは反省点である。そこで、報告書作成の作業中に浮かび上がった課題のいくつかについて今回検討を行った。境川流域でも一部分の発掘調査成果で全てを解明できる訳でもなく、単なる想定に終わった部分や不十分な検討に終始した部分も多々あった。今後、境川や堀川などの支流も含めた万之瀬川流域の研究が進む事を期待したい。

- (注1) 阿多忠景 平安末期、薩摩平氏の棟梁的存在で、薩摩国を惣領し、その勢力は大隅にも及んだ領主である。その後、追討軍が派遣され、逐電することとなる。
- (注2) 阿多忠景の逐電後、婿阿多宣澄が跡を継ぐ。阿多宣澄も1192年鎌倉幕府により追放され、阿多郡は鮫島宗家に与えられた。
- (注3) 第1表に示してある資料番号58は道跡1の下位から出土したが、出土層が異なることから道跡1には伴わないと報告されている。また、資料番号69の「縄」は道跡1内の砂質土から確認されたシュロ製のものである。
- (注4) 康和年間 1099~1104年

一引用・参考文献一

- 市村高男 2003 「11~15世紀の万之瀬川河口の性格と持躰 松遺跡―津湊泊・海運の視点を中心とした考察」『古代文化』VOL.55
- 江平望 1972 「古代末期の薩南平氏―とくに平権守忠景と阿多四郎宣澄について―」『知覧文化第9号』
- 江平望 1991 「中世加世田別府史」『笠沙町郷土史上巻』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 「京田遺跡」
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(81)

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011 「南下遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(157)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2022 「中津野遺跡低地部・低湿地部編」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(217)
- 金峰町 1987 「金峰町郷土史」金峰町教育委員会
- 1998 「持躰松遺跡 第1次調査」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 黒田日出男 1981 「中世の開発と自然」『一揆 4』東京大学出版会
- 柴畑光博 2017 「考古学から見る島津荘の成立」『上野原縄文の森考古学講座(第3回)資料』
- 五味克夫 1996 「中世前期の南薩の道―阿多郡を中心に―」『歴史の道調査報告書第四集 南薩地域の道筋』鹿児島県教育委員会
- 原口泉他 1999 「鹿児島県の歴史」
- 日隈正守 2001 「新田八幡宮の阿多郡支配に関する一考察」鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 52」
- 日隈正守 2002 「薩摩国における荘園公領制の形成過程」鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 53」
- 日隈正守 2010 「中世前期薩摩国阿多郡の歴史的位置について―国衙関係寺社を中心に―」鹿児島大学稲森アカデミー研究紀要 2」
- 藤尾慎一郎 2009 「弥生時代の実年代」『新弥生時代の始まり4』雄山閣
- 柳原敏昭 1999 「中世前期南薩摩の湊・川・道」『中世のみちと物流』
- 柳原敏昭 2005 「中世万之瀬川下流域の様相について―近世絵図をてがかりとして―」『中世の地域と宗教』
- 柳原敏昭 2011 「中世日本の周縁と東アジア」

岩川官軍墓地の昭和8（1933）年の手紙について —岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の墓地の配置—

湯場崎 辰巳

Aspects of pottery from Latter half of the late Jomon Period on the Osumi About the letter of 1933 of the Iwagawa government graveyard.

Tatsumi Yubasaki

要旨

令和2年度に西南戦争の官軍兵士が埋葬された岩川官軍墓地（曾於市大隅町）の調査を行った際、昭和8（1933）年の手紙の提供を受けた。

本稿では、要約を行い、当時の岩川官軍墓地の状況を把握することを目的とした。また、この手紙には造営当時の墓石配置が記載されており、現在の配置とは、異なることを報告した（鹿児島県立埋蔵文化財センター2021）。熊本県の官軍墓地との比較を通じて、岩川官軍墓地では造営当時は部隊別に墓石を配置したが、その後の整備の際に、熊本県の配置を参考に、配置し直した可能性があることが判明した。

キーワード 中岳Ⅱ式土器、縄文後期後葉

1 はじめに

筆者は令和2（2021）年に西南戦争時の官軍兵士が埋葬された岩川官軍墓地（曾於市大隅町岩川）の確認調査を担当した。その際、馬場墓地（岩川官軍墓地隣接）の管理の方に、昭和8（1933）年の岩川小学校訓導丸山義武氏の手紙（コピー）の提供を受けた。この手紙には、丸山氏が官軍墓地に眠る官軍将兵の親や配偶者などに、その存在を知らせることの大切さを説いていることが垣間見える。また、造営当時と考えられる墓石の配置が記録されている。現在の配置と異なることから、熊本県の官軍墓地の配置と比較することで、現在の配置に至った経緯を推察したい。

2 岩川官軍墓地について

岩川官軍墓地は、曾於市大隅町岩川に所在し、「大隅弥五郎伝説の里」の北側、岩川・馬場集落墓地内に位置している。現在79基の墓石があるが、昭和8（1933）年の略配置図（資料9）によると、86基余りの墓石が記録されている。なお、墓石の石材は熊本県天草の下浦石（砂岩製）で、熊本県をはじめ、多くの官軍墓地で使用された石材である。

昭和42（1967）年7月には、斜面が崩れ、土砂が流れ込む等したようである。地元商工会議所が中心となり、墓石周辺が掘り出され、墓地の周囲にブロック塀を巡らし、入口もコンクリートで固め、献灯が2つ設けられ、現在に至っている。

当地に埋葬された官軍兵士は、主に西南戦争の大隅地域（百引・大崎・岩川）で戦死した者や、都城の病院で病死した者と刻字されており、特に激戦であった百引での戦死者が多い。一番高位の人物は、陸軍大尉の山形照

方、次に少尉の奥田政実、少尉補の林為隆、以下軍曹、伍長、兵卒、馭卒、軍夫と続いている。戦死者の出身地は、仙台、東京、名古屋、大阪、広島各鎮台から派遣されており、全国各地に及んでいる。また、以前は犬の墓もあったと伝承されている（大隅町誌編纂委員会1990）。

『大隅町誌』によると、埋葬までの流れは、まず大崎假宿、野方荒佐野、百引の激戦地から遺体を運び、いったん現在の墓地北側の空き地周辺に大きな穴を掘り、そこに仮埋葬した。その後、官軍墓地の造営に併せて、現在の場所に移したようである。埋葬形態については、火葬と土葬の両方の記録が残っている。

3 手紙の内容（資料1～4）

資料1～4は、岩川尋常小学校の訓導丸山義武氏が、静岡県小笠群小笠町大石（註1）の大橋敦氏に岩川官軍墓地への思いを綴った内容である。岩川尋常小学校の訓導丸山義武氏は、当時の岩川教育委員会や校長の山口卓志氏の後援を受け、遺族への連絡や官軍墓地の整備に奔走していたことが窺える。手紙の宛先は、大橋良蔵氏（資料7岩川官軍墓地埋葬者名簿57番）の御子息または、子孫の大橋敦氏と推察される。

4 手紙の要約

ここでは、手紙（資料1～4）の要約を記載したい。著者訳のため、可能な範囲で要約した（註2）。なお、要約と資料を比較しやすいように、段落ごと（段落名①～⑤）に要約をまとめている。

資料1 要約

① 是時厳しい寒さ、社会は多難で、満州（内蒙古）は風雲急を告げ、国内は不況の年である。西郷隆盛が死去して50年あまり、日本の発展策の第一は、朝鮮と満州（内蒙古）への大地への発展を堂々と論じたけれど、その政策は受け入れられずしてその地位から下り、下野しも、その政策決行の裁量が反対派により、反乱の罪に問われ、明治10年、賊名を着せられ、「勝てば官軍、負ければ賊軍」と叫んで、城山に永久の遺恨を抱いて露と消えてしまった。だけでも、西郷隆盛の罪は今更、論ずるにおよばない。

時代を達観し、国家百年の大計を樹立する。これが西郷隆盛の精神である。少しの私利私欲もない。

② 明治天皇は、西郷隆盛の生前の忠誠を褒め、情をかけ庇護し、賊軍の汚名を取り払い、位を与え、天皇陛下の限りない恩恵を受ける。以来、幾十年西郷隆盛の精神は鹿児島にのみならず、全国にも躍動し、成長を続け、更に将来への進展を続けている。満州の情勢がただならず、国家の多難なる秋に、西郷隆盛ならば、今日の嵐に道を示していたはずだ。今更だが、西郷隆盛の偉大さをしのばれる。西郷は、大和民族の発展地の第一は、鴨江（高野山？）と興安（満州？）の間であり、詩にして吟じている。

③ 以前は賊名を着せられて、白い目で見られた薩軍の人々、つまり西郷隆盛の部下は、今や西郷とともに行動したため、名誉と栄光を与えられる面がある。戦没者は武勇銘々として、浄光明寺（現在の南洲墓地）や、はたまた各地にあり、墓は苔むしたけれど、光り輝き花が絶えることはなく、生存者は尊敬の的となり、常に当時のことを談じて、意気揚々と元気である。

④ されど、これを討伐した官軍の諸兵卒はどうであろうか。当時薩摩では、兄は官軍、弟は薩軍、父は賊軍、子供は官軍の情景は各地で見られるところだが、これは職務上・大義上の問題だけである。

資料2 要約

① しかるに、当地にて何が正義の戦・軍であろう。本末転倒の有様である。官軍となる賊軍となるのは、これは皆その主や、その職に忠実なるゆえである。将卒の精神は、分かれることはない。錦の御旗を揚げ、命をかけ、反乱の賊軍の討伐を行い、薩軍健児（勇ましい兵士）と決戦した官軍、大和魂の発現であることに他ならず、私たちの模範であることは、言を俟たない。天皇の軍隊、錦の御旗を掲げる官軍も、正義正当なる皇軍、各地に転戦するおりに、不幸にも死して護国の霊となり、草むす屍となりし者はどれくらいか、混乱のおり、遺骨にして故郷に帰れた者はどれくらいか。見えない魂霊は海・山を越え、さまよい帰れど、異郷にある兵士の屍はどれくらいか。風雨50有余年、大部分は温かき父や母、子、孫らの香花もなく、さみしい時を過ごすのみである。

② ああ、国家に命を捧げし兵士の霊、厚き国家の慰霊

に黙祷をささげるとはいえ、子や孫への恩憂の情、切にし、死者の霊が呼びかけるものあるのだろう。何百の他人の供花より、血のつながった親族の供える花が兵士の御霊を慰めると信じている。野原の草木の葉に霜がおり、吹く風が身にしみる晩秋の夕方、これらの兵士の墓前にただ立てば、行く末や往時が忍ばれて、涙なくしてはいられません。

③ 私には祖父がおります。77歳になります。20歳の頃、薩軍に従軍し、肥後・日向・薩摩・大隅の各地に転戦し、生死の境に直面すること一度ならず、幸か不幸か、生き永らえ、未だに健在です。以前の話になれば、祖父は無然として、「当時の官軍と薩軍の両軍の戦没者は、どのようにしたのか。我々も埋葬したが遺骨も各地に数が多く、その他も数が多いが、霊前には香や花を供えることができなかつた。」と、私にも、もらすことが常でありました。

資料3 要約

① それに加えて、私の職は教職に奉じ、県下の何処に赴任するかも分からない。常に授業にて大義を説き、人の道を教える身なれば、これらの勇士に思いをはせて然るべしと更に願い、教えている。これらの勇士の供養を丁重に行うことは祖父の希望でもある。

② 去る11月9日に（消して改行か）

天皇陛下が、鹿児島に幸された。恐れ多いことです。ありがたいことです。その際に、私は、はじめに鹿児島市に入り、浄光明寺に詣で、薩軍勇士の偉人西郷隆盛の眠れる墓前を廻り、感慨深きものがありました。さらに行幸の儀に列せし他の県人の感慨深げにたたずむのを拝見して、更に感銘をうけました。さらに当時の官軍の戦没者の事に及ぶとまた感慨するだろうと思います。

③ 本年の4月に当地に赴任し、程なくして、官軍墓地があると知り、以来、幾度か詣でて勇士の御霊に謝罪し、これらの墓碑の苔を払って勇士の名を探り、生地を検索したりしました。その数百人ほどであります。

④ 去年、当墓地に眠れる一将校？の未亡人、手を尽くして、亡き夫の墓所を探して、遠路から故人の霊前に詣で、愛慕の情、少しばかり滞りて帰られたと聞きました。（不明）

されど幾十年間、一人家庭を守り、子供を育て、帰らぬ夫を待ち、今日、墓所を探り得て、願い叶えたと語り喜んでいと聞き、未亡人の感慨やいかばかりか。涙が頬を伝うのを覚えます。

⑤ 将校の家でもそうなのです、数多き兵卒や軍夫に関してはどうなのか。さらに遠い故郷の人はどうなっているのか。これらの遺族の中には

※資料4に続く

資料4 要約

① いまだに、自分の父や祖父、叔父がこの地に埋葬されていることを知らない人々もいるのではないかと考

えられます。もちろん、国はすぐにこれらを調査し、すでに遺族には通知していると信じ、遺族の方々も重々承知の事とは察しますが、多くの遺族の中には、前記（一将校？の未亡人）の一士官のような家も少なくないことも想像できます。このような方々のために、所在を伝えようと長い間一心に願っているところです。しかし、私は仕事が多忙を極めております。さらに給料も安く、貧しく、遺族への連絡に充てる余裕もなく、念願を果たすことなく月日が過ぎさってしまいました。そのような中、本校校長山口卓志氏がある時は密かに、ある時は表立って励ましていただき、さらに、町教育委員会が物的に援助を提供してくれることになりました。大いに心躍り、念願を果たすこととしました。ありがたきことに、行幸で天皇陛下のお顔を拝した記念として、また、時期が冬休みであり、3～4日をあて、準備を整えることができました。必要以上のことで、かえって迷惑だと叱責を受ける覚悟はできています。必要な人に必要なことができれば良いと思っています。一つ若輩の行うことです。大目にみていただきたいと思っております。

- ② この地に眠る百の魂は皆官軍です。薩摩では敵ですが、大義を敢行し、進んで国難に殉職した兵士で、いささかも恨みや怒りの気持ちはありません。天皇陛下の赤子（せきし）である。同胞である。もし、私の祖父ならば、どこかで死し、所在不明なれば、いかに思うだろう。異郷に参拝する人もなく、さみしく眠る勇士を思うとき、他人事とは思えない。幸いに私の考える所をお酌み取りいただき、許されることを切望します。最後に百人の勇士に代わり、遺族の方から温かき血の通った通信を希望し、併せて来訪を待ちわびています。その仲介を取り持つことを、私は誓って労をいといません。

12月25日記 鹿児島県曾於郡岩川小学校訓導
丸山義武

後援 同校長 山口卓志
〃 岩川教育委員会

昭和8年頃

5 熊本県の調査状況

ここでは、熊本県における官軍墓地調査事例を紹介し、岩川官軍墓地と比較を検討したい。

熊本県八代市にある若宮官軍墓地跡は陸軍の墓地で、シルバーワークプラザ建設に伴う調査が行われている。昭和23年まで官軍墓地であったため、改装後の墓坑やボタンなどの遺物が出土している。114基の棺（木棺111基）が検出され、長方形や方形・円形の墓坑である。遺体のあった将校は、個々に墓坑が設けられたと思われる。墓石は残存していないが、埋葬図が残っている。それによると379基の墓石があったことが判明しており、階級別に配置されている。

熊本県八代市にある横手官軍墓地跡は警視局の墓地

で、球磨川駅地区土地区画整備事業に伴う調査が行われている。65基の棺が発見され、木棺55基、襖棺2基が確認されている。複数の棺を埋葬する溝状墓坑と、個別の墓坑に分類されている。溝状墓坑も個別に木棺が埋葬されており、個々に埋葬されたものと考えられる。墓石は残存していないが、埋葬図が残っている。それらによると270基の墓石が配置されており、階級別に配置されている。

熊本県玉名市にある高瀬官軍墓地は陸軍と警視局の墓地で、都市公園整備に伴う調査が行われている。昭和38年に改葬が行われ、合祀塔に大部分が埋葬されている。調査では、記録上の埋葬者に対して、墓坑の数が少なく、実際に埋葬されている将校は限定的と推定している。各地で葬られた者を含め、一括して高瀬官軍墓地に墓碑が整備された結果と考えられている。記録によると395名が埋葬され、その墓石の配置は陸軍・警視隊とも階級別に配置されている。

熊本県玉東町にある高月官軍墓地は官軍墓地の中では、被葬者数が最大で、陸軍の980名が葬られている。半高山公園整備計画が起因となり、国指定史跡を目指して調査が行われている（平成25年西南戦争遺跡として指定）。墓石が残っており、その配置や墓石の調査が行われている。墓石は32ブロックに分かれており、その配置は、階級別となっている。

玉東町にある宇蘇浦官軍墓地は陸軍と警視局の墓地である。陸軍355基、警視局64基が存在している。21ブロックに分かれており、陸軍は入り口から最も遠い位置に上官が配置されており、階級別である。警視局は、入口に近い者の階級が高いという違いはあるが、階級別に配置されている。同墓地での配置の違いは、陸軍と警視局は別々に発注がなされたためとされている。

6 岩川官軍墓地の墓石の配置について

現在の岩川官軍墓地の墓石の配置は、階級順となっている。しかし、昭和8（1933）年の略配置図（資料9）を見ると、士官（大尉・少尉）を除けば、おおよそ部隊別に配置されていることが分かる。鹿児島県立埋蔵文化財センター2021では、昭和8（1933）年の略配置図が造営当時の配置の可能性が高いことを指摘した。このような墓石の配置が変化したのは、地元の人々が墓地の荒廃のために少しずつ整備を加えた結果といえよう（第1表）。墓石の配置は、熊本県の官軍墓地の類例を参考に、造営当時から改変したものと推定される。

なお、熊本県の官軍墓地の調査報告書では、階級別の墓石の配置なのに対して、岩川官軍墓地は部隊別の可能性が高い理由は明確でない。墓石等は天草の下浦石で陸軍の墓石に主に用いられるものである。以下に、墓石配置の違いの理由について、推察したい。

岩川官軍墓地の発注の経緯などを記した資料は現在のところ不明である。墓石が陸軍墓地で使用されている下浦石（天草産）であることから、岩川官軍墓地も熊本県

などと同時に発注された可能性が高い。しかし、墓石の法量を熊本県の高月官軍墓地と宇蘇浦官軍墓地の陸軍墓石と比較すると、形状は同一であるが（第1図）、岩川官軍墓地の方が若干大きく、違うことが分かる（第2表）。また、墓碑に刻まれた文字の書体も微妙に違うようである（第1図）。このことから、陸軍からの受注者は同一で、石材は下浦石を使用し、石材の加工を下請けとして、地元で行った可能性あるのではないかと考える。

墓石の配置の違いは、墓坑の構築の違いから見いだせるかもしれない。熊本県の例では、個別墓坑や溝状墓坑に木棺が個別に配置されている。多少の違いはあるが、将校や兵士が個々に木棺や甕棺に納められている。それに対して、岩川官軍墓地は大隅半島各地で戦死した官軍兵士を集めており、墓地の北側で仮埋葬を行い、それから現在の岩川官軍墓地へ遷されている。火葬や土葬の両方の記録が残る（大隅町編纂委員会（編）1990）。トレンチ調査の結果では、個々の墓石に墓坑がないことが判明している。また、官軍墓地中央部に2つの墓坑の可能性のある掘り込みを確認しており、合葬された可能性を推定した。

これらから、岩川官軍墓地では、広範囲に渡る戦死者を葬ったために、遺体がない場合や遺体があっても合葬したため、個別の墓坑を考慮する必要がなく、故人が寂しくないように、階級別よりは部隊別に埋葬した結果ではないかと考えられる。

7 あとがき

現時点では、岩川官軍墓地の記載のある資料としては、今回紹介した手紙（資料1～9）が最も古いようである。昭和8（1933）年の手紙にある造営当時に近い配置や埋葬された方の記録を残すことにより、今後の資料として活用・残ることを期待して、紀要に紹介した。手紙を提供していただいた地域の方に感謝し、調査や要約に協力いただいた曾於市教育委員会の加塩氏・橋口氏、県立埋蔵文化財センター浅田氏に感謝したい。

註

- 1 静岡県小笠群小笠は、現在の菊川市にあたる。なお、資料7には番地まで記載があるが、調査した結果、大橋良蔵氏・大橋敦氏の子孫の方が在住している可能性があるため、ここでは記載を控える。
- 2 手紙の要約には、埋蔵文化財センター浅田剛士文化財主事の協力・助言を得た。

【引用・参考文献】

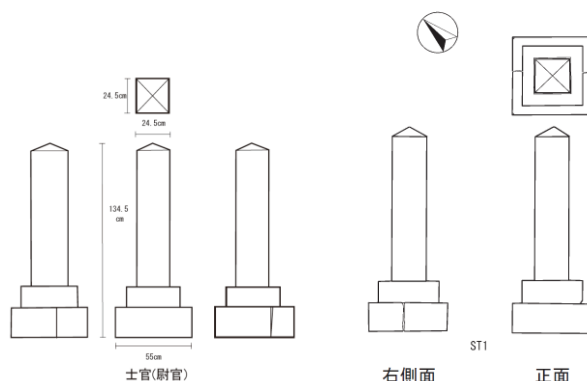
大隅町編纂委員会（編）1990『大隅町誌』（改訂版）
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2021 『滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡・チシャケ迫堡跡群・岩川官軍墓地』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(210)

第1表 岩川官軍墓地整備経過

西暦	元号	岩川官軍墓地整備内容
1877	明治 10	現在の岩川官軍墓地向かいの空き地に仮埋葬『大隅町誌』（改訂版）
1878～1879	明治 11～12	陸軍により、建設及び落成される。（推定）
	明治～昭和	神官をしていた川崎篤義氏が経費をもらって墓地の管理を行う。『大隅町誌』（改訂版）
1933	昭和 8	岩川尋常小学校丸山義武訓導から、静岡県の大橋敦への手紙（第67図配置図あり）
	～	
1945～1955	昭和 20～30年頃	現在の階級別の配置に近い整備が行われる。（推定）
	～	周辺墓地の整備に伴って、岩川官軍墓地も整備される。
1967	昭和 42	大隅町商工会青年部によって、現在の形に近い整備が行われる。
	～	地域住民により、手厚く祀られる。
2013	平成 25	馬場集落の墓地の管理者により、縁石や墓石の修復が行われる。

第2表 官軍墓地階級別墓石法量

高月官軍墓地と宇蘇浦官軍墓地 陸軍墓石法量			
階級／単位 (cm)	高さ (墓石+台座)	墓石幅	台座幅
士官 (尉官)	134.5	24.5	55
下士官 (軍曹・伍長)	91.8	18.4	33
兵卒	77	15.5	30.5
軍夫	41.2	9.5	4.5
岩川官軍墓地 墓石法量			
階級／単位 (cm)	高さ (墓石+台座)	墓石幅	台座幅
大尉	143.5	24	55
少尉・少尉補	139.5	24	55
下士官 (軍曹・伍長)	98.5	18.5	36.5
兵卒	86.5	15	30.5
軍夫	60	9.2	1



第1図 左：高月・宇蘇浦官軍墓地墓石（尉官）
 （玉東町教育委員会2012から転写・縮尺任意）
 右：岩川官軍墓地大尉墓石（鹿児島県立埋蔵文化財センター2021から転写・縮尺任意）



宇蘇浦官軍墓地墓石文字（縮尺任意）
（玉東町教育委員会2012から転写）

玉東町教育委員会 2012『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』玉東町文化財調査報告書 第8集
末吉町郷土史編纂委員会（編） 1987『末吉郷土史』（第3版）
曾於市教育委員会 2017 「曾於市内の西南戦争関連の文化財・史跡について」『岩川官軍墓地・薩軍の墓慰霊祭資料』
曾於市教育委員会 『曾於市の幕末・明治維新・西南戦争関連史跡ガイドマップ』
玉名市教育委員会 2018『高瀬官軍墓地』玉名市文化財調査報告 第39集
八代市教育委員会 2002『若宮官軍墓地跡・横手官軍墓地跡』八代市文化財調査報告書 第16集

※次ページからの昭和8（1933）年の手紙（資料1～9）は、コピーを繰り返したもので、はっきりしない部分がある。



岩川官軍墓地墓石文字（縮尺任意）
（鹿児島県立埋蔵文化財センター2021から転写）

第2図 宇蘇浦官軍墓地（上）・
岩川官軍墓地墓石（下）拓本

① 時は嚴寒、世是多難、滿蒙の風雲急、國內不況の年、二世の英雄大西御南洲翁逝、五十有餘年、日東帝國の發展蒙の第一日、鮮滿蒙の大地也。發辰と喝破した北、其の政策策容れられずして懸危し、而も更に此政策決行の度量が及封虎と作乱の罪に咎はれ、明治十年、賊名を看せし勝は官軍、敗れは是賊と叫んで城山に永く恨を抱いて密と消えたり。とれと南洲翁の罪は更に嘆々と穿せざるべし。時代を運觀し、國家百年、大計を構つる、是公翁の精神なり。僅なる私怨もあらず、さればにや

② 明治聖帝は公翁の往時、忠勤を嘉せられ、公翁の精神を憐み給ひ、賊名を除去せ、敘位賜爵、聖恩と告れ給へり。以來幾十年、公翁の精神は薩隅の地、子ぶらば全國に耀々と成長を續け、更に將來へ進辰を續けつるあり。滿蒙の天地

友は成す、國家多事なるの秋、南洲翁として今日ありしめばの聲蒼に滿つ。公翁の偉大を偲びむ。大和民族發辰地カ分一は鴨江と興安との間、みと詩にかりて吟せられたり。

③ 往時賊名を看て白眼視せられたる御虎翁の部下は令や公翁と行、勳を保たせしを、寧ろ名譽と觀じ得意、而も戰没者は武名赫々と、淨光明寺に將又各地に、これをしりぬれど、禱き、香花純ぶらば、生存者は後輩、勇身敬の的となり、帝に往時を諷し、意氣頓に盛なり。

④ これと之を討伐せし官軍方諸將卒は如何に。往時一薩翁の弟は官軍、父は賊、軍子は官兵なる情景は各所に見らるゝ、こゝろなりき、は職務上大義上問題なり。

① 然るに彼地には何れが我が軍か、主客転倒の有様なり。官と名を賦となさ、之皆其の志、其の職に忠なるの所以にして、將卒の精神に於ては、何れと合はれざるべし。錦旗を戴き、命と毫毛を怪むに比し、身命を堵して作乱の賊を討滅と期して、薩軍健児と決戦せし官軍、は忠、大日和魂の發現に外ならずして、我善後軍の電鑑たやとを俟たず、天子の軍、錦旗を戴き、官軍、正義正産を以て、各各地に転戦せし、折、不孝にして漢國を鬼と化し、草を、下死となりしもの幾許ぞ、混亂を折、それ等も遺留にして、故郷に帰らざる幾許ぞ、見えざる魂靈のみは、幾梅山越えてきよよひかへれど、異郷に曝す面力士の虎、又幾許ぞ。柳風沐、両手有餘年、大部介は温き父の、母のけりからの、又子ら孫らの香花にも梅香しと、淋しく、時を閱するのみ。

② 噫々、國家に人命を捧げし面力士の魂、厚き國家の慰靈に懸せしとは、子へ、孫への恩愛の情、切にして、帝に魂魄の叫びかゝるものあるべし。凡百、他人の供えり、一技の血の通へるもの供へる此花、是等男子の心を慰む、多きを信ず。野辺の草、亦、霜が吹いて、吹く風は身に、しを、曉秋の夕、これら勇士の、墓、二所にたざすまは、まし、方行く、木、転、往時の、但、は、涙なきを得ず。

③ 余祖父あり。七十有七歳なり。二十歳頃、薩軍方へ從軍し、肥日、薩隅の各地に転戦し、生死の境に直面す。幸一、再なり、千と、難、幸か不幸か、主き、永く、今、今、健在なり。談、往時に及べば、祖父、慨然として、往時、官薩兩軍戰没者、如何に成り、成るや。我等の埋葬せし遺骸も各地に数多きに、其の他、は、ま、し、數多からん、これ等の香花や如何にと、余にも、さす、事、常

岩川町馬場西南役官軍遺棄地埋死者名簿				
番	原籍	戦死年齢	所属隊	氏名
1	集瀬肥後国飽摩郡京町主	年 七十八	廣瀨鎮守聯隊隊長	斎藤益山 縣照方
2	新瀨縣新田郡大野村	全右 百廿	第一聯隊附	馬曹 松本 東五郎
3	石川県加賀郡石川郡金澤主	全右 百廿	近衛砲一大隊	兵長 野坂 晴次
4	全 全 全 梅枝町主	全右 全	全右	全 堀井 一之
5	和歌縣紀伊海部郡歌新町	全 全	全右	兵卒 田村 良直
6	堺市大田区邊郡杉本村主	全	全右	" 貴田 竹造
7	石川県加賀郡石川郡金澤主	全	全	" 緒方 與市
8	島根縣出雲郡大田郡主	全	全	" 絹谷 勘藏
9	兵庫縣淡路郡三原郡主	全	全	" 興津 嘉市
10	和歌縣紀伊海部郡歌新町	全	全	" 為井 矢之助
11	兵庫縣淡路郡水上市郡主	全	全	" 上田 定之助
12	三重縣伊勢郡三重郡西郡主	全	全	" 伊藤 長之助
13	四国縣備前郡岡山乃即主	全	全	兵卒 島田 正知
14	岩山長岡郡美根郡岩永村	全	廣瀨鎮守聯隊附	兵卒 伊藤 伊助
15	岩山長岡郡美根郡保津村主	全	全右	全 加屋 葛藏
16	三重縣伊勢郡三重郡主	全	大坂歩上聯隊	" 飯田 林吉
17	兵庫縣淡路郡美根郡主	全	全	" 塩岩 百藏
18	和歌縣紀伊海部郡主	全	全 多隊	" 塚本 平吉
19	岩山長岡郡美根郡主	全	名屋 幸三 聯隊	" 倉橋 房次郎
20	(3) 同之 全 澤町	全	近衛砲一大隊	兵卒 南保 安三郎
21	兵庫縣播磨郡高砂郡主	全	全	兵卒 佐藤 善太郎
22	全 播磨郡高砂郡主	全	全	" 坂口 虎松
23	和歌縣紀伊海部郡主	全	全	兵卒 千品 留次郎
24	兵庫縣淡路郡主	全	全	" 梅田 中造
25	和歌縣河内郡主	全	全	" 内堀 長平

大橋 高次郎 氏 轉 送 様

26	石川縣加賀石川郡金澤長町	明十七、八百	名屋長七郎二天守	會田三守 石橋之高
27	和歌山紀伊日田郡能登村(全)	百七十八	近衛砲二天一小隊	聚 王置玄成
28	栃木下野佐野郡寒川村(全)	百外村	全右	兵卒青不三平五
29	埼玉武藏埼玉郡秋島村(全)	備有側參	奉三解三六一隊	會田留次郎
30	茨城茨城野州郡堤村(全)	百七十八	近衛砲二天一小隊	聚 中野清四郎
31	石川越中礪波郡柴田屋村	百六十八	名屋長七郎二天守	兵卒 宮田勝藏
32	高知阿波名東郡佐古橋(全)	百八	近衛砲二天一小	木村芳藏
33	和歌山紀伊名東郡和歌山	百引	全	田村正則
34	堺泉北吉野郡西谷村	百引	全	鍋谷啓吉
35	石川加賀石川郡長壽寺野	百七十八	名屋長七郎二天守	區田杉坂直喜
36	愛媛伊豫屋敷郡中西村(全)	百七十八	名屋長七郎二天守	兵卒 砂本鉄治
37	高知阿波宇治郡野原村(全)	百七十八	名屋長七郎二天守	佐野與吉
38	愛媛伊豫越前郡魚津村(全)	百七十八	全	高田赤次
39	宮城陸中宮城郡仙台北八幡町	百七十八	借官長四郎二天守	今野清八
40	青森鹽竈三戸郡田子村(全)	百七十八	全 二	山市太里
41	石川加賀石川郡金澤田町(全)	百七十八	名屋長七郎二天守	多胡仁三郎
42	石川越中越前郡富山寺田(全)	百七十八	名屋長七郎二天守	長根塚亀次郎
43	高知阿波名東郡助任町(全)	百七十八	名屋長七郎二天守	兵卒 河野庄吉
44	長門長門郡下村(全)	百七十八	全 十一隊二天守	藤原政市
45	宮内府大島郡秋村(全)	全右	全右	板野庄吉
46	廣島縣宇治郡松尾(全)	全右	全右	花田仁助
47	山長門厚狭郡山川村(全)	全右	全右	西村守吉
48	宮内府佐波郡高瀬村(全)	全右	全右	平野登代吉
49	千葉安房朝比奈郡奈郷村(全)	全右	東京長三郎二天守	鈴木徳次郎
50	宮内府窪屋郡子位庄(全)	全右	名屋長七郎二天守	石井友人
51	石川越中礪波郡三屋村(全)	百七十八	名屋長七郎二天守	坂下忠藏
52	石川加賀河北郡大友村(全)	全右	全	長根長田三郎

静岡県小笠郡小笠町大石

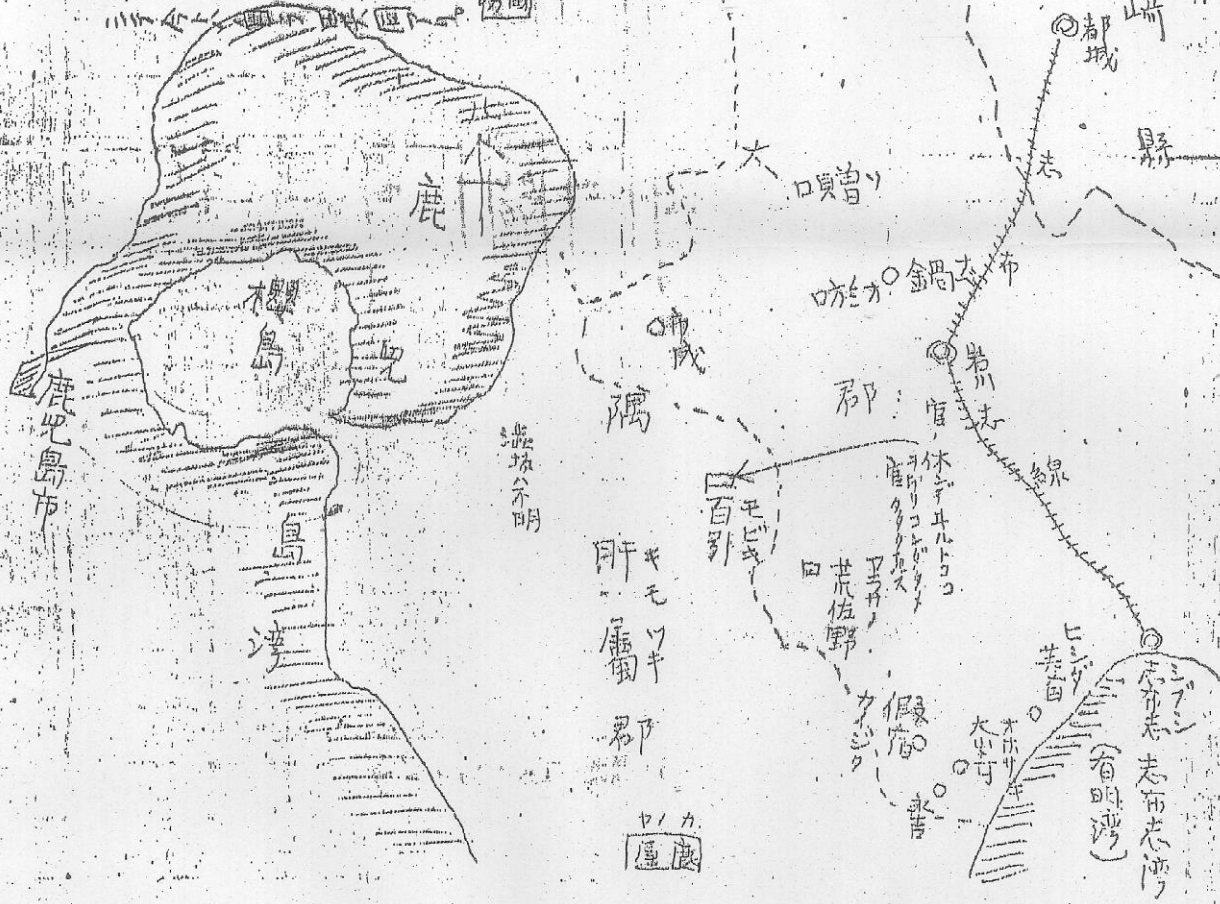
大橋 敦 様

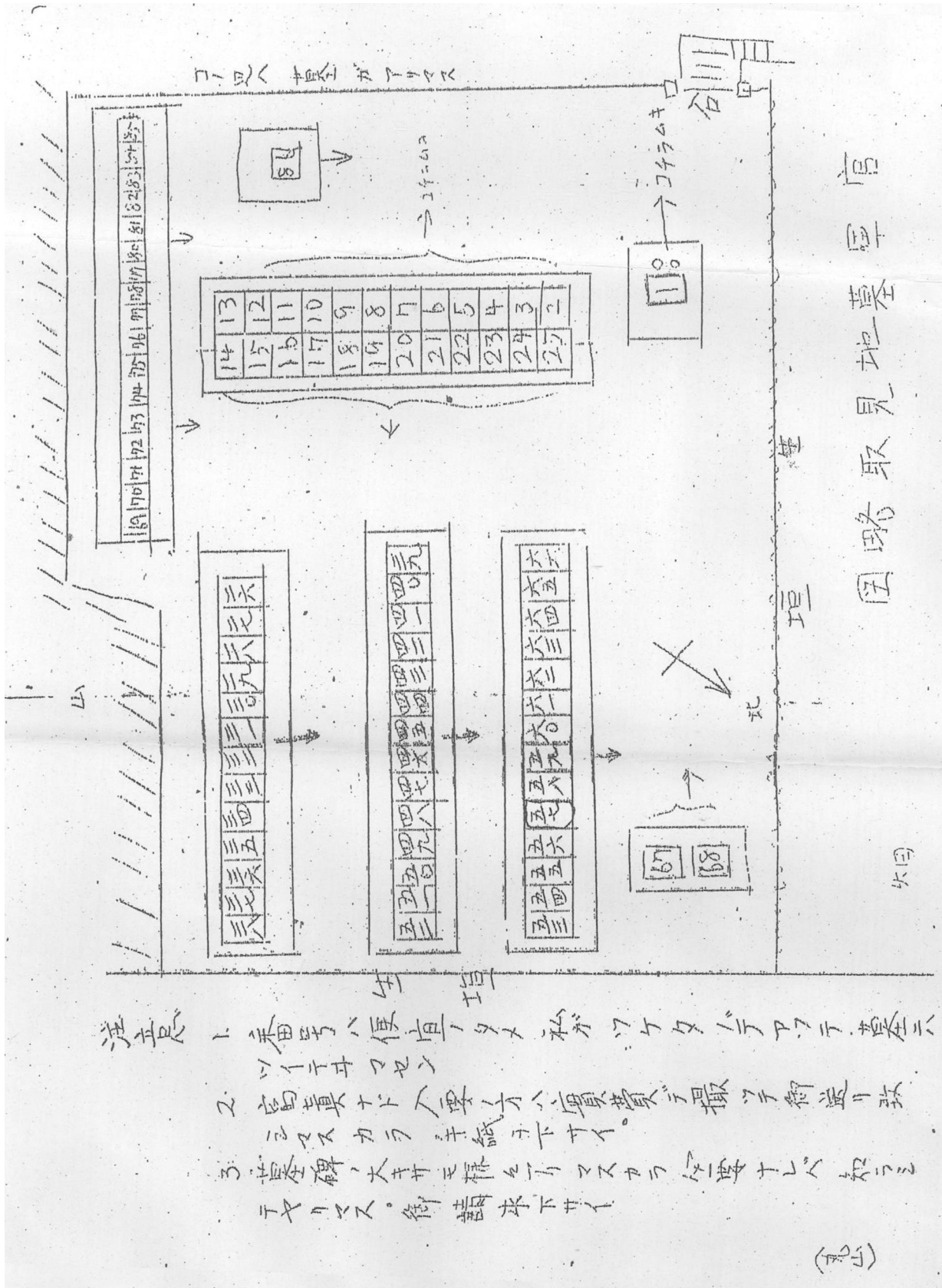
⑧

53	森 常雄 磐城郡常盤村	諸縣郡大崎村	東京歩三聯大一中	軍曹 山川正猛
54	石川 宗賢 石川郡村木町三百	百引村	大橋工兵大一中隊	" 倉 満治
55	渡邊 清 碓氷郡西川町	大崎坂柳村	廣島歩十聯大一中	兵卒 田村彌三郎
56	東城 豊 碓氷郡小山町	諸縣郡鍋橋村	東京歩三聯大一中	兵卒 古葉長藏
57	大橋 良藏 磐城郡大石村	諸縣郡大崎村	名古屋歩三聯大一中	" 大橋 良藏
58	後藤 虎吉 島田郡小幡中島町	全右	" 歩三聯大一中	後藤 虎吉
59	小野 木忠作 碓氷郡登土三郎個畑町	全右	" 大聯大 三中	" 小野 木忠作
60	阿部 三助 秋田縣大森(小区)町	郡城病院病犯	信歩四聯大一中隊	" 阿部 三助
61	鈴木 三之助 福島縣郡下川町	郡城病院病犯	" 中隊	" 鈴木 三之助
62	" 庄多郡坪田村	諸縣郡病院病犯	全右	" 大橋 勘治
63	大友 善次郎 碓氷郡大九郎畑町	全右	全	" 大友 善次郎
64	渡邊 四吉 福島縣郡大崎町	全右 三自裁	信歩四聯大一中	" 渡邊 四吉
65	伊藤 栄五郎 宮城 第五大五北牧目村	全右 病院	信歩四聯大一中	" 伊藤 栄五郎
66	五十嵐 慶治 形勢前田川郡廣野新田町	全右	信歩 全右 二中	" 五十嵐 慶治
67	少尉 林 為隆 愛知 尾張 春日井郡本町	御城 三子歌	名古屋歩三聯大一中	少尉 林 為隆
68	少尉 奥田 政實 高知 佐賀 高見(全)	大崎 野犯	廣島歩三聯大一中	少尉 奥田 政實
69	伊藤 本彦七 熊 肥後 津島郡大石町	百引 丸	別働隊第一旅團警部	伊藤 本彦七
70	" 伊藤 本彦七 水村	"	"	" 伊藤 本彦七
71	" 伊藤 本彦七 水村	"	"	" 伊藤 本彦七
72	" 伊藤 本彦七 水村	"	"	" 伊藤 本彦七
73	" 伊藤 本彦七 水村	"	"	" 伊藤 本彦七
74	" 伊藤 本彦七 水村	"	"	" 伊藤 本彦七
75	" 伊藤 本彦七 水村	"	"	" 伊藤 本彦七
76	福園 新 熊 肥後 津島郡大石町	"	"	" 福園 新
77	熊 肥後 津島郡大石町	"	"	" 熊 肥後
78	全右	"	"	" 下田 平次
79	" 第三大五上立田村	"	"	" 西村 藤七

80	能 肥後國第五天正竹池村	百十九	別當第一源圓體厚	庫次 内田全次
81	"	"	"	" 垣哥門
82	全奉 全村	"	"	" 古雄直七
83	全 兼五天正永村	"	"	" 山隈能藏
84	福岡兼三天正津屋村	"	"	" 大神甚平
85	全 兼五天正永村	"	"	" 火ノ夫一平
86	(不明)	明聖皇後病記	"	屏夫六名七墓

傳香白引、鹿兒島縣新島郡石引村
 百一十六日鹿兒島縣下日向國諸縣令(令ノ才部)
 某日舟員傷後、同日三日
 同縣大鹿國成屋病院ニ入レ命ア
 (王太子)ニ奉送神ニ奉旨ナリ
 本院ニ奉送略
 ○村名、多ク、本島方名ナリ
 ○船名、本島時、本島時
 ○今、本島國一、





令和3年度
年報

県立埋蔵文化財センター
第一調査係の成果(県事業関係)

番号	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査表面積(m ²)	調査期間	時代		遺構	遺物	担当者	箱数
								縄文・古代～中世	近世				
1	北山遺跡 新城跡	阿久根市 山下地内		県内遺跡 事前調査	確認	8,035	5月 ～ 6月	北山	縄文 早期	土坑	土器、礫器、鉄製品、チップ	湯場崎 上浦 (三垣) (浅田)	1
									縄文・ 古代～ 中世	土坑、柱穴	陶磁器、鉄製品、鉄滓		
						1,438		新城跡	—	縄文土器、須恵器、陶磁器、鉄滓			
2	光台寺跡	指宿市	鹿児島県 教育委員会	廃寺は語る！ よみがえる鹿児 島の仏教文化		460	10月	中世	—	青磁、白磁、備前焼	上浦 隈元 (三垣) (前迫) (大久保) (湯場崎) (浅田) (福園)	5	
近世	土坑1基、石垣							瓦(軒、棧、丸、塀)、薩摩焼(黒薩摩、白薩摩、搦鉢)、備前焼、琉球陶器、土師器					
3	光台寺跡 ほか				整理	—	R3	中世	—	青磁、白磁、備前焼	浅田 (上浦) (三垣) (西野)	—	
								近世	土坑1基、石垣	瓦(軒、棧、丸、塀)、薩摩焼(黒薩摩、白薩摩、搦鉢)、備前焼、琉球陶器、土師器			
4	井手原遺跡	さつま町		県単道路整備改良(久富木工区)	本調査	80	5月 ～ 6月	旧石器	ブロック1か所	三稜尖頭器、細石刃、細石刃核、スクレイパー、フレーク、チップ	大久保 隈元 (三垣) (前迫) (上浦) (山下 (智))	8	
								縄文草創期	—	土器(無文)			
								縄文早期	—	土器(加栗山式、無文)、フレーク、チップ			
								縄文前期	集石4基	土器(轟B式、曾畑式)、打製石鏃、スクレイパー、磨石、フレーク、チップ、土師器			
							古代	—	—				
5	虎居城跡	さつま町		北薩広域公園整備	確認	N地区 5,700 O地区 1,700	12月 ～ 2月	旧石器・縄文	—	縄文土器、残核、磨石・敲石	大久保 湯場崎 (三垣) (倉元) (隈元) (上浦) (浅田)	2	
								中世・近世	石垣、柱穴2基、工具痕、石列、礫集中域、巨石群(ヒット2、溝状加工跡1、工具痕)	土師器、青磁、白磁、染付、青花、備前焼、瓦質土器、石鏃、石臼、鉄製品			
								近代・現代	石積み、炭窯	染付、鉄製品(楔)			
6	鹿児島(鶴丸) 城跡 (石垣等保全)				整理 報告書 刊行	—	H26 ～ R2	近世	石垣、石管水道排水溝、溝、能舞台橋掛り、庭園遺構、外御庭堀(築山・池)、土橋	染付、青花、青磁、茶入、土瓶、搦鉢、植木鉢、鞆羽口、瓦、石製品、金属製品	黒木 三垣 彌榮 (西野) (山下 (智))	—	
								近代	砲弾・銃弾痕、鑄鉄管、第七高等学校造土館、プール	染付、瓦、金属製品、ガラス製品			
7	鹿児島(鶴丸) 城跡 (範囲確認・ 国庫補助)	鹿児島市	鹿児島県 総務部 文化振興課	鶴丸城跡保全整備	確認	24	5月 ～ 6月	近世	柵列、土坑10基、石組み排水溝	陶磁器、瓦	西野 山下 (智) (三垣)	1	
								近代	—	陶磁器、瓦、ガラス片、鑄鉄蛇口			
								近現代	コンクリート基礎	—			
					整理 報告書 刊行	—	H26 ～ R3	中世	土坑	陶磁器	西野 山下 (智) 浅田 彌榮 (三垣) (黒木)	—	
								近世	石垣、排水溝、坪地業、布地業、土坑、柵	染付、青花、青磁、茶入、土瓶、搦鉢、植木鉢、瓦、石製品、金属製品			
								近代	鑄鉄管、石垣	染付、瓦、金属製品、ガラス製品			
8	鹿児島(鶴丸) 城跡 (大迫物馬場・ 火除地)		国土交通省 九州地方 整備局宮繕 部	鹿児島第3合同 庁舎建築	本調査	1,106	12月 ～ 3月	中世	—	青磁	馬籠 彌榮 (株)島 田組	84	
								近世	整地・造成面(痕)、瓦溜まり	染付、瓦、木製品、石造物			
								近代	暗渠、石列、溝状遺構等	磁器、ガラス製品、瓦、石製品、鉄製品			

県立埋蔵文化財センター
第一調査係の成果(県事業関係)

番号	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査表面積(m)	調査期間	時代	遺構	遺物	担当者	箱数
9	河口コレクション(上加世田遺跡)	南さつま市	鹿児島県教育委員会	よみがえる「河口コレクション」の世界事業	整理報告書刊行	—	S45 S46 S48	縄文後～晩期	土坑, 礫群, 焼土域, 埋設土器	土器(上加世田式, 入佐式), 石鏃, 石匙, 打製石斧, 軽石加工品, 玉類	前迫(今村)	—
10	下桃木渡瀬遺跡	南九州市	鹿児島県土木部道路建設課	(主)石垣上加世田線改築事業	整理報告書刊行	—	R2	旧石器	礫群6基	角錐状石器, 二次加工剥片, 削器, 搔器, 抉入石器, 磨石, 凹石, 被熱破砕礫	上浦湯場崎	—
								縄文早期	集石2基	土器(加栗山式, 石坂式, 桑ノ丸式, 型式不明), 有溝砥石, 磨石, 剥片, 被熱破砕礫		
								縄文晩期	—	土器(指宿式, 黒川式, 組織痕)		
								弥生	—	土器(入来式)		
								古墳	竪穴建物跡1基	土器(東原式, 辻堂原式)		
11	川上・鶯原・猫塚遺跡	鹿屋市	鹿児島県土木部道路建設課	(主)鹿屋吾平佐多線改築事業	整理報告書刊行	—	H30 ~ R1	縄文早期	鶯原遺跡(集石6基, 石器集中5か所) 猫塚遺跡(集石1基)	川上遺跡(土器(石坂式, 塞ノ神式, 苦浜式, 西之蘭式), 石皿(台石), 石鏃, 敲石, 二次加工剥片, 剥片, チップ) 鶯原遺跡(土器(下剥峯式, 押型文, 手向山式, 妙見・天道ヶ尾式, 平椀式, 塞ノ神式, 苦浜式, 轟A式), 磨製石斧, 石鏃, 石匙, スクレイパー, 剥片, 石核, チップ, 磨石, 礫器, 石皿) 猫塚遺跡(土器(石坂式, 下剥峯式, 平椀式, 塞ノ神式, 鎌石橋式), 石鏃, スクレイパー)	大久保湯場崎	—
								縄文前期	猫塚遺跡(土器(轟B式))			
								弥生	川上遺跡(円形周溝1基)	鶯原遺跡(土器(山ノ口式)) 猫塚遺跡(土器(弥生式))		
								古墳	鶯原遺跡(古道跡5条) 猫塚遺跡(土坑1基)	鶯原遺跡(土器(中津野式, 東原式))		
								古代	鶯原遺跡(古道跡3条)			

県立埋蔵文化財センター
第二調査系の成果(県事業関係)

番号	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査表面積(m ²)	調査期間	時代	遺構	遺物	担当者	箱数
12	久保田牧遺跡	鹿屋市	土木部 道路建設課	(主)鹿屋吾平佐多線(吾平道路)道路改築	本調査	5,720	6月 ~ 1月	縄文早期		土器(塞ノ神A式)、石鏃、磨石、敲石、石斧	上床 徳永 新和技術コンサルタント(株)	31
								縄文前期末 ~ 中期	石器製作跡、土坑3基、集石	土器(条痕文、春日式、縄文施文)、石鏃、石匙、打製石斧		
								縄文晩期 ~ 弥生初頭		土器(刻目突帯文、組織痕)、打製石斧		
								古墳		土器(笹貫式)、鉄鏃(方頭鏃)		
							古代以降	帯状硬化面2条、畝間状遺構、溝状遺構2条	土師器、須恵器、陶器			
13	立塚遺跡	鹿屋市	土木部 道路建設課	(主)鹿屋吾平佐多線(吾平道路)道路改築	整理	-	H30 ~ R3	縄文早期	集石13基	土器、石鏃、削器、石核、打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿等	山形 馬籠 徳永 大福コンサルタント(株)	-
								縄文前期 ~ 中期	集石3基、土坑14基、落とし穴6基、土器集中1か所	土器(野久尾式?)、石鏃、石匙、削器、石核、打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿等		
								古墳	竪穴建物跡19基、土坑3基、土器集中2か所	土器(成川式)、棒状鏃		
								古代~中世	掘立柱建物跡27軒、土坑17基、焼土跡1か所、埋設土器1基、溝状遺構等26条、畝間状遺構1条、不明遺構9状	土師器、須恵器、陶磁器、鉄滓		
14	廣牧・立塚遺跡	鹿屋市	土木部 道路建設課	(主)鹿屋吾平佐多線(吾平道路)道路改築	整理	-	H28 H30 ~ R3	縄文後期		土器(市来式)、石鏃	森 山下 (勤) (株)島田組	63
								縄文晩期		土器(黒川式、干河原段階)		
								弥生	石斧集積1か所、炉跡1基、溝状遺構1条、竪穴建物跡1基、土坑2基、遺物集中部1か所、ビット397基、大型土坑1基、不明遺構1基	土器(刻目突帯文、山ノ口式、山ノ口II式、高付式)、不明土器片、土製勾玉、打製石斧、石鏃、打製石鏃、磨製石鏃、石包丁、石皿、薄片石器、磨石		
							古墳	古道跡1条	土器(東原式)	西園 山形	-	
							古代	畝状遺構13条、土坑1基、ビット271基、溝状遺構4条、古道跡16条	土師器、須恵器			
							近世・近代	古道跡7条	薩摩焼、鉄滓(炉外流出滓)、機銃弾			

県立埋蔵文化財センター
第二調査系の成果(県事業関係)

番号	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査表面積(m ²)	調査期間	時代	遺構	遺物	担当者	箱数
15	中津野遺跡	南さつま市	土木部 道路建設課	国道270号線(宮崎バイパス)道路 改築	整理 報告書 刊行	-	H18 ~ H21 H25 ~ H29	縄文前期		土器(曾畑式)	鮫島 倉元 (前迫) (湯場 崎)	-
								縄文中期		土器(轟式, 春日式, 阿高式)		
								縄文後期	集石2基, 土坑3基, 埋設土器1基, 遺物集中10か所, 集積遺構1か所, 特殊遺構1基	土器(南福寺式, 出水式, 岩崎上層式, 指宿式, 磨消系, 福田K2式, 小池原下層式, 小池原上層式, 鐘崎式, 松山式, 市来式, 丸尾式, 北久根山式, 三万田式, 西平式), 石鏃, 石匙, スクレイバー, 石鏃, 軽石製品, 異形石器, 石核, 打製石斧, 磨製石斧, 磨石, 敲石, 石皿		
								縄文晩期		土器(黒川式)		
								弥生	竪穴住居跡5基, 土坑17基, 集石1基	土器(夜臼式, 刻目突蒂文系, 板付式, 高橋式, 入来式, 黒髪式, 須玖式, 免田式, 中津野式), 石鏃, 石包丁, 打製石斧, 磨製石斧, 柱状片刃石斧, 磨石, 管玉, 木製品(農具, ハシゴ, 鉸側板, 杭)		
								古墳	溝状遺構1条	土器(中津野式, 東原式), 木製品		
								古代		土師器, 須恵器, 木製品		
								中世	掘立柱建物跡7棟, 柱穴5基, ビット1019基(掲載5基+遺物のみ24基), 土坑13基, 溝状遺構19条, 足跡3か所, 炉跡2基, 土木遺構(敷粗朶, 暗渠, 杭群(掲載6)等)	輸入陶磁器(白磁, 青磁, 青白磁, 青花), 陶器(古瀬戸, 備前焼, 常滑焼), 須恵器(東播系, 榊万丈系), 土師器, 古銭, 滑石製品, 木製品		
近世		磁器(肥前系, 在地), 薩摩焼, 寛永通宝, 敷粗朶, 敷丸太, 杭, 縄, 鉄滓, 鉄鎌										

市町村関係:市町村の機関による発掘調査(支援)

番号	市町村名	遺跡	支援要件	時代	注目される成果・指導内容等	市町村担当	センター担当
1	鹿児島市	朽ヶ丸遺跡	本調査 (都市計画事業)	古墳	【支援内容】 ・木製品の保存処理について	徳永 愛雄	隈元 俊一
2	志布志市	原田古墳群	町内遺跡 発掘調査等事業	古墳	【支援内容】 ・玉類の蛍光X線分析 ・写真撮影	相美 伊久雄	隈元 俊一 西園 勝彦
3	始良市	前田遺跡	剥ぎ取り資料に 関する確認作業	縄文	【支援内容】 ・堅果類(ドングリ)の保存処理	岩元 康成	隈元 俊一
4	東串良町	唐仁古墳群	中間まとめ報告 書作成 (町内遺跡発掘調 査等事業)	古墳	【支援内容】 ・実測図・原稿チェック ・報告書支援 ・写真撮影	清水 航平	森 幸一郎 黒木 梨絵 今村 結記
5	屋久島町	楠川城跡	本調査 (町内遺跡発掘調 査等事業)	中世	【支援内容】 ・発掘調査支援 ・写真撮影 ・実測図チェック	濱岡 尚志	鮫島 えりな 倉元 良文
		安房城跡	整理・報告書作成 (町内遺跡発掘調 査等事業)	中世	【支援内容】 ・整理報告書作成支援 ・写真撮影		鮫島 えりな 倉元 良文 今村 結記 西園 勝彦
6	瀬戸内町	近代遺跡 (戦争遺跡)	整理・報告書作成 (町内遺跡発掘調 査等事業)	近代	【支援内容】 ・報告書作成に係る支援	鼎 丈太郎	前迫 亮一 今村 結記
7	和泊町 知名町	沖永良部島古墳群	確認調査 (町内遺跡発掘調 査等事業)	近世	【支援内容】 ・調査方法等に係る打合せ	和泊町:北野 堪重郎 木場 浅葱 知名町:宮城 幸也	森 幸一郎 西野 元勝
8	与論町	与論城跡	整理作業・ 確認調査 (町内遺跡発掘調 査等事業)	中世	【支援内容】 ・整理作業 ・与論城跡発掘調査	南 勇輔	西野 元勝

(公財)埋蔵文化財調査センター
調査第一係

整理作業・報告書作成

東九州自動車道建設関係

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査対象面積(m ²)	調査年度	時代	遺構	遺物	成果	担当者
1	荒園	曾於郡大崎町仮宿	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	東九州自動車道建設	整理報告書	—	H24～H26 H30	旧石器	ブロック2か所	細石刃・細石刃核	H24～26の調査では、旧石器時代の細石刃核、縄文時代早期では塞ノ神式土器と苦浜式土器の良好な資料が出土した。 弥生時代では、竪穴建物跡5基が検出され、山ノ口式土器の出土が多い。 古墳時代では外来土器を模倣した甕が出土し、古代以前の溝状遺構(片葉研堀)や中世の掘立柱建物跡が検出された。	宮田宮崎
								縄文早期	集石37基、磨石集積3基、素材剥片集積2基、土器集中1か所、土坑1基、ブロック3か所	前平式、石坂式、下割峯式、葵ノ丸式、押型文、手向山式、平袴式、塞ノ神式、苦浜式、轟A式、耳栓、石鏃、石匙、磨石、敲石、石核、フレーク、チップ		
								縄文前～晩期	—	轟B式、入佐式、石鏃、石斧、礫器、磨石		
								弥生	竪穴建物5軒、土坑1基	土器(山ノ口式)、磨製石鏃、砥石		
								古墳	竪穴建物跡6軒	古式土師器、砥石、軽石製品		
								古代以前	堀跡1条	—		
2	小牧	鹿屋市串良町細山田	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	東九州自動車道建設	整理	—	H27～H29	縄文前期～中期前半	土坑6基、集石4基、小土坑11基	土器(曾畑式、深浦式)、石鏃、石匙、磨石、石皿、軽石製品	(縄文時代中期後半から後期中葉) 20軒以上の竪穴建物跡を中心とする集落跡を検出した。土坑、集石の数も多く、特に石皿を割った後埋めた土坑(石皿立石)、埋設土器は鹿児島県内で検出例の少ない希少なものである。 出土した土器をみると集落は複数の土器形式の長期間にわたって営まれたものであり、土器型式毎の遺構を把握することで、集落の形成過程を知ることができる。また、他の遺跡と比較することで、当時の交流や生活の様子、地域性などの解明が進むことが期待される。 (弥生～古墳時代) 東原式土器、布留式模倣甕、宮崎系土器を一括資料として伴う竪穴建物跡が検出され、周辺地域との交流を裏付ける資料となった。	大保北園永瀬(弥生・古墳時代刊行) (弥生・古墳時代整理) 樋之口(宮崎)国際文化財(縄文時代前期～晩期、弥生時代早期整理)
								縄文中期後半～後期	竪穴建物跡23軒、土坑83基(石皿立石23基含む)、集石66基、埋設土器2基、打製石斧集積1基、土器集中12か所、小土坑多数	土器(阿高式、南福寺式、指宿式、松山式、市来式、磨消縄文土器、凹線文系)、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、ノミ型石器、磨石、石皿、横刃形石器、軽石加工品、石製品(鐘飾)、玉砥石		
								縄文晩期～弥生時代初頭	土坑3基、集石2基、小土坑多数	土器(入佐式、黒川式、刻目突帯文、組織痕)、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、ノミ型石器、磨石、石皿、横刃形石器、軽石加工品、石製品(鐘飾)、玉砥石		
					弥生			竪穴建物跡5基、土坑4基	土器(高橋式、入来式、入来Ⅱ式、山ノ口式、高付式)、磨製石鏃、石斧、砥石、磨敲石、台石			
					古墳			竪穴建物跡15基、土坑31基、土器集中8基、礫集中1基、焼土集中域1基、ピット多数	土器(中津野式、東原式、辻堂原式、笹貫式、布留式系土師器、初期須恵器、須恵器大甕)、磨製石鏃、磨敲石、台石、軽石加工品、砥石、鉄製品、勾玉、管玉、臼玉、輪の羽口、土製紡錘車、土錘			
					報告書			—	—			
3	牧山	鹿屋市串良町細山田	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	東九州自動車道建設	整理	—	H25～H29	縄文前期	埋設土器1基 土坑1基	土器(轟B式)、磨石、石皿	[縄文時代後・晩期] 遺構は、掘立柱建物跡、落とし穴、土坑、集石、土器集中部、石器集中部が検出されている。中でも掘立柱建物跡は環状を形成するように配置されており、土器も環状の外側に多く出土している。環の内側からは石冠や玉髓を埋納するかのようになられた石皿などの特殊な遺物が出土している。 遺物は、西平式とその前後関係にあたる磨消縄文系土器が多く出土し、主体をなしている。西平式以前の丸尾式や納管式、以後の中岳Ⅱ式なども一定量出土しており、幅広い時期に利用された遺跡であることが伺える。	本高松下(株)バスコ
								縄文後・晩期	土坑285基、貯蔵穴1基、落とし穴13基、埋設土器13基、土器集中17か所、石器集中25か所、石器集積2基、小土坑2511基、掘立柱建物跡21棟、埋納遺構1基	土器(西平式、納管式、丸尾式、中岳Ⅱ式)、石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、礫器、石皿、台石、石匙、凹石、剥片、チップ、石冠		
								弥生以降	土坑2基、古道跡10条、炭化物集中部1か所	土器(入来式、山ノ口式、成川式)、磨製石斧、磨石、敲石、剥片、チップ、青磁、白磁、青花、薩摩焼		

(公財)埋蔵文化財調査センター
調査第二係

発掘調査

南九州西回り自動車道建設関係・東九州自動車道建設関係

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査対象面積(m ²)	調査期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
4	北山	阿久根市山下・波留	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所	南九州西回り自動車道建設	本調査	3,104	5月～7月	縄文	—	土器(甕式、出水式)、石鏃、石匙	北山遺跡では、古墳時代の竪穴建物跡2軒、古代の土坑2基及び中世の掘立柱建物跡11棟、竪穴建物跡3軒検出された。古墳時代の竪穴建物跡では、完形に近い小型丸底壺や杓子型土製品、高坏の脚部、壺等の破片が出土した。また、中世の掘立柱建物跡や竪穴建物跡が検出されたエリアでは、それらを大きく囲むようにして6条の溝跡が検出され、溝跡や掘立柱建物跡等の関係性から2時期あったことが想定される。遺物は、縄文土器(塞ノ神式土器、出水式土器等)や石器(石鏃、凹石、磨製石斧、打製石斧等)、須恵器、土師器、黒色土器A類、貿易陶磁器、備前擂鉢、常滑焼、滑石製石鍋等が出土している	加世田肥後田上林田
								古墳	竪穴建物跡2軒	土器(東原式)		
								古代	—	土師器、須恵器		
								中世	溝状遺構2条	土師器、瓦質土器、貿易陶磁器		
								近世・近代	—	陶磁器、寛永通宝、キセル、瓦		
								時期不明	土坑20基、柱穴78基、溝状遺構2条	土鏃		
	本調査(民活)	7,721	10月～1月	縄文	—	土器(塞ノ神式)、石鏃、磨・敲石、凹石、磨製石斧、打製石斧	加世田田上 国際文化財(株)					
				古墳	—	土器(成川式)						
				古代	土坑	土師器、須恵器、黒色土器A類						
				中世	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、ピット	土師器、瓦質土器、貿易陶磁器、合子、滑石製石鍋、洪武通宝						
				近世・近代	ピット	陶磁器、寛永通宝						
				時期不明	竪穴建物跡、土坑、ピット	土製品						

整理作業・報告書作成

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査対象面積(m ²)	調査年度	時代	遺構	遺物	成果	担当者
5	木森	志布志市有明町	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	東九州自動車道建設	整理報告書	—	H26 H30	縄文早期	集石72基、連穴土坑23基、土坑104基、土器溜まり1基	土器(前平式、加粟山式、吉田式、石坂式、下割釜式、押型文)、石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨・敲石	縄文時代早期は調理施設と考えられる連穴土坑が23基、集石が72基検出された。連穴土坑は、2基以上切り合ったものが多く、廃棄した土坑壁面を再利用して新たな連穴土坑として活用している。中世の掘立柱建物跡は8棟検出された。集落の北限に構成された建物群と想定され、3面に庇を持つ15m×7m程度のやや大型の建物も含まれる。	新保森(有馬)
								縄文中期以降	—	土器(春日式、凹線文系)、須恵器、石匙、打製石斧、磨・敲石		
								中世	掘立柱建物跡8棟、ピット列2条、ピット77基	土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋片		
								時期不明	土坑6基、溝状遺構1条、性格不明遺構1基	—		
6	田原迫ノ上・立小野堀	鹿屋市串良町	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	東九州自動車道建設	整理報告書	—	H22 ～ H26 H28 H30	縄文早期	竪穴建物跡1軒、土坑2基、集石15基	土器(石坂式、下割釜式、押型文、塞ノ神式)、石鏃、磨製石斧、磨石	縄文時代早期では、竪穴建物跡や集石などの遺構が検出されている。また、土器は石坂式土器を主体としており、縄文時代早期中葉から早期後葉をつなぐ時期の人々の生活を知る上で貴重な資料である。弥生時代中期では、竪穴建物跡や掘立柱建物跡、円形周溝などが検出され、大隅半島中央部での当時の集落の在り方の情報をもたらす遺跡である。 立小野堀遺跡は、今回新たに地下式横穴墓3基が検出され総数193基の地下式横穴墓の調査報告となる。刀子や短剣などの副葬品も出土しており、南九州の古墳時代を考える上で重要な遺跡である。	有馬林田(高吉)
								縄文前～晩期	—	土器(春日式、指宿式、市来式、中岳式、黒川式)		
								弥生	竪穴建物跡3軒、掘立柱建物跡1軒、円形周溝1基、土坑2基、集石3基、帯状硬化面13条	土器(山ノ口式)、打製石斧		
7	六反ヶ丸	出水市六月田町	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所	南九州西回り自動車道建設	C・D地点報告書	—	H29 ～ R2	縄文時代	なし	南福寺式土器・西平式土器・磨製石斧	調査区全体に古墳時代の竪穴建物跡、土器溜り、古代の糠敷遺構、焼成土坑、近世の掘立柱建物跡、近世～近代の石列遺構及び時期の異なる多数のピットが検出された。 遺物は流れ込みのものも多く含まれるが、古墳時代の壺や壺、高坏、小形仿製鏡、ガラス小玉、古代の土師器・須恵器、転用硯、近世～近代の陶磁器、古銭、キセル、青銅鈴などが出土した。	小田池畑
								弥生時代	なし	突帯文土器・板付式土器 磨製石鏃・打製石斧		
								古墳時代	竪穴建物跡10軒 土坑34基 土器溜り6か所	土師器・石皿・砥石・台石・磨石 鉄鏃・小形仿製鏡・ガラス小玉		
								古代	掘立柱建物跡1軒 糠敷遺構1か所 土坑6基 土器焼成土坑2基	土師器 須恵器 緑釉陶器、青磁(越州窯系)、土鏃、転用硯		
								中世	なし	青磁・白磁・瓦質土器・滑石製石鍋片、瀬戸焼		
								近世～近代	掘立柱建物跡3棟 土坑5基 溝状遺構1条 埋納遺構1基 石列遺構5か所 石垣1か所	陶磁器(薩摩焼・伊万里焼・琉球焼など)、石臼、石硯、石製田の神像(笠)、キセル、青銅鈴、鉄製品、古銭		
								時期不詳	ピット380基	—		

(公財)埋蔵文化財調査センター
調査第三係

発掘調査

国道220号古江バイパス建設関係・川内市街部改修事業・東九州自動車道建設関係

No	遺跡名	所在地	事業主体	起回事業名	調査の種類	調査対象面積(m ²)	調査期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
8	石鉢谷B	鹿屋市古里町	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	国道220号線古江バイパス建設	本調査	1,854	10月～1月	縄文時代晩期	土坑10基, ビット2基	入佐式土器(三叉文施文土器), 黒川式土器(組織痕土器), 石鏃, ドリル, 黒曜石(剥片・石核), 扁平打製石斧, 磨製石斧, 磨石, 石皿, 三角埴形石器(石冠か?), 土器片加工の装飾品	遺構は縄文時代晩期の土坑10基, ビット2基, 古墳時代の溝状遺構1条を検出した。 遺物は縄文時代晩期～古墳時代の土器や石器が出土した。中でも縄文時代晩期の三叉文施文土器, 土器片加工の装飾品, 三角埴形石器(石冠か?)は県内でも出土例が少なく貴重な資料である。	高吉野田
								古墳時代	溝状遺構	東原式土器		
								近世・近代	—	陶器		
								時期不詳, 検討中	土坑2基	—		
9	平佐焼窯跡群	薩摩川内市天辰町門口	国土交通省九州地方整備局 川内河川事務所	天辰第二地区引堤事業	本調査	1,669	10月～1月	近代	窯跡(扇形連房式登窯・素焼き窯)2基 物原1か所 工房跡(溝・方形区画溝・埋設壺・石垣・階段・土坑・井戸), 石垣, 貝溜まり 陶磁器(碗, 皿, 鉢, 蓋, 小杯, 酒注, 瓶, 茶器, 仏飯器, 戸車, 壺, 水滴, 人形, 鳥餌皿) 窯道具(ハマ, センペイ, トチン, チャツ, ツク, 安定土, 色見孔(穴)栓) 成形道具(小皿・鉢・匙・土瓶の注口用の型, シッタ) ロクロの軸受け 土鍾, 土鍾, 手水鉢	扇形連房式登窯・素焼き窯・物原・工房等の窯業関連施設が検出され, 近代における民窯の構成を知る手がかりとなった。また, 素焼きから本焼きへの工程が確認でき, 製品・窯道具の種類と数量の把握をすることが可能である。 他にも明治期に呉須からコバルト釉へ変化したことが明らかとなった。	百枝池畑	

整理作業・報告書作成

No	遺跡名	所在地	事業主体	起回事業名	調査の種類	調査対象面積	調査年度	時代	遺構	遺物	成果	担当者
10	春日堀	志布志市有明町連原	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	東九州自動車道建設	整理報告書	—	H26～H30	縄文早期	竪穴建物跡32軒, 連穴土坑121基, 集石434基, 土坑385基, 落とし穴10基, 磨石集積1基	土器(岩本式, 前平式, 加栗山式, 小牧ⅢA, 吉田式, 札ノ元Ⅶ類, 倉園B式, 石坂式, 下刺釜式, 辻タイプ, 桑ノ丸式, 押型文, 中原式, 塞ノ神式, 縄文・擦糸文, 無文土器, 小型土器, 妙見・天道ケ尾式, 土製品, 平袴式, 塞ノ神Aa式, 苔浜式), 打製・磨製石鏃, 石鏃, スクレイバー, 石核, トロロ石器, 石斧, 磨石, 敲石, 石皿, 砥石, 石鍾, 礫器, 軽石製加工品	縄文時代早期前～中葉の集落跡を検出。貝殻文系土器と押型文土器との関係を理解する上で重要な資料が出土している。	松山 兒島 黒川
11	川久保(A地点)	鹿屋市串良町細山田	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	東九州自動車道建設	整理報告書	—	H26～H29	旧石器～縄文草創期	礫群28基 ブロック37か所	三稜尖頭器, 尖頭器, 台形棒石器, ナイフ形石器, 細石刃, 細石刃核, 礫石器, フレーク, チップ隆帯文土器	A地点では主に古墳時代の整理作業を行った。竪穴建物跡65基は東原式～笹貫式期の遺構であり, 6基の鍛冶関連建物と認められる。 その他, 縄文後期・晩期・弥生時代の整理作業を行った。	岩永 (株)九州文化財研究所
								縄文早期	連穴土坑12基 集石276基 遺物集中3か所 土坑21基	土器(岩本式, 前平式, 志風頭式, 加栗山式, 札ノ元Ⅶ類, 小牧3A段階, 吉田式, 石坂式, 石坂式, 下刺釜式, 辻タイプ, 押型文, 変形擦糸文, 塞ノ神A・B式, 苔浜式, 石京西式, 轟A式) 打製石鏃, 石鏃, 石匙, スクレイバー, 剥片石器, 磨石, 石皿, 台石, 石核, 耳栓, 石製垂飾品		
								縄文前期	集石23基	土器(西之園式, 轟B式, 管畑式) 打製石鏃, 石匙, スクレイバー, 磨製石斧, 磨石		
								縄文後期	集石7基	土器(出水式, 岩崎上層式, 中岳Ⅱ式)		
								縄文晩期～弥生	竪穴建物跡1軒 土坑2基 遺物集中1か所	土器(上加世田式, 黒川式, 刻目突帯文, 高橋式, 入来Ⅱ式, 山ノ口Ⅱ式, 免田式), 土鍾, 線刻土器, 土製動物型垂飾品 打製石鏃, 磨製石鏃, 石匙, スクレイバー, 打製石斧, 磨製石, 石皿, 台石, 石庖丁, 石鍾, 大型軽石加工品		
								古墳	竪穴建物跡65軒 土坑28基 焼土域4か所 炭化物集中1か所 土器集中3か所 遺跡5条 溝跡4条	土器(東原式・辻室原式・笹貫式), 土製勾玉 礫石器, 砥石, 石製品 鉄鏃, 鉄斧, 鉄製品, 鉄滓 鉄滓粒, 鍛造剥片, 羽口 粟玉, 炉壁		
								古代	土坑	土師器, 須恵器, 墨書土器		
中世	掘立柱建物跡34棟 竪穴建物跡3軒 土壇墓3基 古道, 溝状遺構, 土坑, 柱穴	青磁, 白磁, 土師器, 須恵器, 滑石製品										
近世	掘立柱建物跡1棟 炭窯跡2基 炭堆積土坑2基 古道, 土坑, 柱穴	薩摩焼 古銭, 五輪塔, 石臼, 釘										

(公財)埋蔵文化財調査センター
調査第三係

整理作業・報告書作成 国道220号古江バイパス建設関係・川内市街部改修事業・東九州自動車道建設関

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査対象面積	調査年度	時代	遺構	遺物	成果	担当者
12	石鉢谷A	鹿屋市古里町	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	一般国道220号 古江バイパス建設	整理報告書	—	H30 ～ R1	旧石器		剥片	縄文時代早期では集石を4基検出し、壱ノ神A式土器のほか磨石、石皿等が出土した。 古墳時代では成川式土器が出土している。	藤崎黒川
								縄文早期	集石4基	土器(壱ノ神A式) 石匙、磨石、石皿、剥片石器		
								縄文晚期		土器(型式不明)、磨石、打製石斧、剥片石器		
								古墳		土器(東原式～笹貫式)		
13	山ノ上B	鹿屋市小野原町	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	一般国道220号 古江バイパス建設	整理報告書	—	H28 ～ H29	旧石器	礫群1基	石核、ハンマーストーン	旧石器時代では礫群が1基検出され、ハンマーストーン、石英の石核が出土している。 縄文時代早期では集石28基、集積遺構2基、硬化面1条が検出された。 古墳時代は竪穴建物跡が3軒と土坑が3基検出されている。	高吉百枝野田
								縄文早期	集石28基 集積遺構2基 硬化面1条	土器(加栗山式、石坂式、桑ノ丸、下剥釜式、右京西式) 打製石鏃、石核、黒曜石剥片、石匙、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、凹石、石皿、台石		
								縄文晚期		土器(黒川式)		
	古墳	竪穴建物跡3軒 土坑3基	土器(東原式、笹貫式)									
	その他		機銃弾(12.7mm・20mm)									
	縄文晚期	土坑1基	土器(黒川式)	縄文時代晩期の土坑1基と黒川式土器、古墳時代の成川式土器が出土している。								
白水A	鹿屋市白水町						古墳		土器(東原式、笹貫式)			

1 資料調査・貸出等

資料調査受け入れ数

博物館等	行政	大学	出版社	新聞社	企業	研究会	合計(件)
4	11	14	1	0	0	0	30

調査遺跡数	調査遺物数
のべ59	(999) ほか一式

写真・図版貸出数

博物館等	行政	大学	出版社	新聞社	企業	研究会	合計(件)
5	2	1	10	1	2	0	21

写真・図版・遺物・剥ぎ取り資料貸出数

遺跡数	点数
のべ69	375

遺物・剥ぎ取り資料貸出数

博物館等	行政	大学	小中高	自治会等	企業	研究会	合計(件)
8	1	5	0	3	1	0	18

主な貸出先

文化庁(列島展), 那覇市立壺屋焼物博物館,
宮崎県立西都原考古博物館 ほか各博物館等

2 ホームページ(<https://www.jomon-no-mori.jp>)アクセス数

9

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
アクセス数	8,049	9,870	10,137	10,136	8,944	8,656	11,105	9,071	7,682	7,788	7,240	7,568	106,246

3 データベース登録数(ホームページにて検索可能)

No	登録遺跡名	登録遺物		登録遺構		
		登録実測図	登録写真	登録実測図	登録写真	
1	見帰遺跡	200	194	20	20	
2	牧B遺跡	134	88	13	8	
3	原村遺跡	375	643	104	38	
4	上加世田遺跡	219	179	19	7	
5	西南戦争を掘り学ぶ報告書	32	32	117	35	
6	鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)	351	162	29	23	
7	細山田段遺跡2	2,107	1,012	196	153	
8	山ノ段遺跡	286	280	4	2	
9	川久保遺跡3_A地点	663	490	32	10	
10	川久保遺跡4A地点	952	869	494	291	
11	小牧遺跡2	787	740	121	115	
12	六反ヶ丸遺跡2	269	140	21	10	
13	上野原遺跡	2,731	1,607	724	375	
令和2年度合計		遺跡数: 13	9,106	6,436	1,894	1,087
累計		遺跡数: 475	592,446			

4 分析・保存処理点数(令和3年度中に処理が完了した遺物数)

No	処理名	処理点数	遺跡名
1	金属器処理	141	知覧飛行場跡, 六反ヶ丸遺跡, 宮脇遺跡, 宇都上遺跡, 小牧遺跡, 川久保遺跡他
2	木器処理	50	前田遺跡, 中津野遺跡, 浜町遺跡
3	分析(蛍光X線, 赤外線, レントゲン)	122	小牧遺跡, 中津野遺跡, 牧山遺跡, 上加世田遺跡, 白寿遺跡, 与論城跡他

5 研修・講座等

埋蔵文化財専門職員養成講座

No	講座名	実施日	参加者数
1	初級講座(考古学講座と体験学習)	8月5日～8月6日	2市4町6人
2	中級講座(長研究生フォローアップ研修講座)	2月14日～2月16日	新型コロナ感染拡大防止のため中止
3	上級講座(技術研修講座)	1月20日	5市6町のべ14人 ※一部オンラインで実施

教員の研修講座

No	講座名	実施日	参加者数
1	一般教員夏季研究 (フレッシュ研修「先生のための考古学講座」)	8月5日～8月6日	一般教員20人 初任者0人
2	パワーアップ研修(10年経験者研修) 「体験・体感 縄文の森」	7月29日～7月30日 8月5日～8月6日	小・特・養・栄:10人 中・高:10人

6 普及・啓発関係

鹿児島県立埋蔵文化財センター遺跡フォーラム202

開催日	会場	内容	参加者数
令和4年1	鹿屋市	かごしま遺跡フォーラム2021 「中津野遺跡と掘り出された南さつまの歴史と文化」	※新型コロナウイルス感 染 拡大防止のため令和 4年度に延期

遺跡公開(現地説明会等)

遺跡名	場所	期日	内容	見学者数
光台寺跡	指宿市	10月24日	遺跡概要説明, 遺跡見学	70
立塚遺跡	鹿屋市	11月6日	遺跡概要説明, 遺跡見学	50
合 計				120

(公財)埋蔵文化財調査センター実施分

遺跡名	場所	期日	内容	見学者数
平佐焼窯跡群	薩摩川内市	11月3日	遺跡概要説明, 遺跡見学	216
北山遺跡	阿久根市	12月4日	遺跡概要説明, 遺跡見学	100

発掘体験等

遺跡名	場所	期日	内容	学校名等	員数
井手原遺跡	さつま町	令和5年5月26日	遺跡見学	山崎小教諭	1人
鹿児島(鶴丸)城跡	鹿児島市	5月～6月	遺跡見学	一般県民	59人
北山遺跡	阿久根市	5月～6月	遺跡見学	一般県民	6人
井手原遺跡	さつま町	令和5年6月2日	発掘体験	山崎小6年生	10人
立塚遺跡	鹿屋市	10月～11月	遺跡見学	一般県民	2人
虎居城跡	さつま町	1月	遺跡見学	一般県民	2人
久保田牧遺跡	鹿屋市	1月	遺跡見学	一般県民	2人
合 計					82人

職場体験学習・インターンシップ等

期 日	体験学習	内容	員数
45.210	鹿屋工業高校生徒	職場体験学習	4人
合 計			4人

まいぶんキット貸出事業(ワクワク考古案を含む)

貸出内容							貸出対象数
本物の遺物(土器や石器など)をセットにしたものを学校等に貸出し、授業で本物に触れる機会を提供							対象23件, 768人以上
	貸出期間	学校等名	市町村名	対象			内容
				学年	学級数	児童・生徒数	
1	5月28日～6月18日	上小川小	霧島市	6	1	37	縄文土器
2	5月31日～6月11日	陵南小	霧島市	6	2	60	土器・石器
3	6月1日～6月15日	青葉小	霧島市	6	2	56	縄文土器・石器等
4	6月8日	南永小	伊佐市	5・6	2	3	縄文土器・石器, 弥生土器・石器
5	6月9日	伊敷台小	鹿児島市	6	3	99	縄文土器・石器, 弓矢・石斧複製等
6	6月10日	山崎小	さつま町	6	1	10	縄文土器・石器, 弥生土器・石器
7	6月17日	佐多小	南大隅町	6	1	8	縄文土器
8	6月23日	潤ヶ野小	志布志町	5・6	2	9	縄文土器・石器, 弥生土器・石器
9	7月1日	尾野見小	志布志町	6	1	8	縄文土器・石器, 弥生土器・石器
10	7月1日	岩北小	曾於市	5・6	2	6	縄文土器・石器, 弥生土器・石器
11	7月27日	大口高	伊佐市	3	2	55	縄文土器・弥生土器
12	10月6日	神川小	錦江町	5	1	12	縄文土器・弥生土器, 火起こし
13	10月19日～10月21日	指宿商業高	指宿市	3	3	73	廃寺(廃仏毀釈)について
14	10月21日	今和泉小	指宿市	5・6	2	28	廃寺(廃仏毀釈)について
15	11月17日	東桜島中	鹿児島市	1	1	5	縄文土器・弥生土器, 火起こし体験
16	11月17日	星原小	中種子町	5・6	1	5	縄文土器・弥生土器, 廃寺(廃仏毀釈)について
17	11月17日	納官小	中種子町	3～6	2	11	縄文土器・弥生土器, 廃寺(廃仏毀釈)について
18	11月18日	野間小	中種子町	6	1	43	縄文土器・弥生土器, 廃寺(廃仏毀釈)について
19	11月18日	南界小	中種子町	5・6	2	11	縄文土器・弥生土器, 廃寺(廃仏毀釈)について
20	11月18日	岩岡小	中種子町	1～6	4	19	縄文土器・弥生土器, 廃寺(廃仏毀釈)について
21	11月19日	中種子中	中種子町	1	2	52	縄文土器・弥生土器, 廃寺(廃仏毀釈)について
22	11月25日	上場小	出水市	1～6	3	12	縄文土器・弥生土器, 廃寺(廃仏毀釈)について
23	1月27日	国分小	霧島市	6	4	146	縄文土器・弥生土器, 廃寺(廃仏毀釈)について
合計							768

※「ワクワク考古案」とは、専門的な知識を持ったセンター職員が、学習指導案を作成し、本物の資料や発掘調査の成果等を効果的に使用して行う授業支援。令和3年度からは「廃寺は語る！-よみがえる鹿児島島の仏教文化」事業として実施している。

おでかけ体験隊支援

支援内容							対象数
土器、石器等の実物資料を活用した教育活動の支援と郷土教育推進を目的とした「上野原縄文の森」主体の出張講座で、埋文センター職員は随時支援を行う形で関わっている。							対象6件, 54人以上
	出期間	学校等名	市町村名	対象			内容
				学年	学級数	児童・生徒数	
1	6月17日	佐多小	南大隅町	6	1	8	縄文土器
2	6月23日	潤ヶ野小	志布志町	5・6	2	9	縄文土器・石器, 弥生土器・石器
3	7月1日	尾野見小	志布志町	6	1	8	縄文土器・石器, 弥生土器・石器
4	10月6日	神川小	錦江町	5	1	12	縄文土器・弥生土器, 火起こし体験
5	11月17日	東桜島中	鹿児島市	1	1	5	縄文土器・弥生土器, 火起こし体験
6	11月25日	上場小	出水市	1～6	3	12	縄文土器・弥生土器, 廃寺(廃仏毀釈)について
合計							54

7 刊行物等

発掘調査報告書

No	シリーズ	発掘調査報告書名	所在地	執筆担当	発行月
1	セ212	下桃木渡瀬遺跡	南九州市川辺町	上浦麻矢・湯場崎辰巳・三垣恵一	令和3年3月
2	セ213	川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡	鹿屋市吾平町	大久保王義・湯場崎辰巳	令和3年3月
3	セ214	鹿児島(鶴丸)城跡 —北御門跡周辺・御角櫓跡周辺・能舞台跡—	鹿児島市 城山町ほか	西野元勝・黒木梨絵・山下智沙子・彌榮久志・三垣恵一・浅田剛士・金子智	令和3年3月
4	セ215	鹿児島(鶴丸)城跡 —総括報告書—	鹿児島市 城山町ほか	西野元勝・黒木梨絵・山下智沙子・彌榮久志・三垣恵一・浅田剛士・永濱功治・有川孝行・平美典	令和3年3月
5	セ216	上加世田遺跡2	南さつま市加世田町	前迫亮一	令和3年3月
6	セ217	中津野遺跡 低地部・低湿地部編 第1分冊・第2分冊	南さつま市金峰町	鮫島えりな・倉元良文・湯場崎辰巳	令和3年3月
6	財41	山ノ上B遺跡・白水A遺跡	出水市下鯖町	高吉伸弥・百枝勇一・野田清志	令和3年3月
6	財42	六反ヶ丸遺跡3 -C・D地点	出水市六月田町	小田裕人・眞邊彩・浦博司・百枝勇一・池畑耕一	令和3年3月
7	財43	荒園遺跡2(第2・3地点)	曾於郡大崎町	宮田靖弘・宮崎大和・鶴田静彦・堂込秀人・木場浅葱	令和3年3月
7	財44	牧山遺跡3(縄文時代前期以降編) 第1分冊, 第2分冊1	鹿屋市串良町	本高謙治・松下寛正・堂込秀人・福地祥平・株式会社バスコ(関口真由美・関口昌和・翁長武司)	令和3年3月
8	財45	木森遺跡1	志布志市有明町	新保朋久・森えりこ・有馬孝一	令和3年3月
9	財46	小牧遺跡3(弥生時代～古墳時代編)	鹿屋市串良町	大保秀樹・永濱功治・北園和代	令和3年3月
10	財47	田原迫ノ上遺跡3・立小野堀遺跡2	鹿屋市串良町	有馬孝一・高吉伸弥・郷原麻鈴	令和3年3月
11	財48	春日堀遺跡2(縄文時代早期編) 第1分冊, 第2分冊, 第3分冊, 第4分冊	志布志市有明町	松山初音・兒島直美・黒川忠広・株式会社九州文化財研究所(長野眞一・佐藤武大)	令和3年3月
12	財49	石鉢谷A遺跡	鹿屋市古里町	藤崎光洋	令和3年3月

埋文だより(各2,400部発行)

No	シリーズ	内容	発行日
1	85号	国内最古級の舷側板(中津野遺跡), 中津野遺跡について, 万之瀬川流域の弥生時代の遺跡, 新刊報告書紹介, 河コレ遺跡めぐり(② 別府原古墳群), 令和3年度 発掘調査予定遺跡	8月5日
2	86号	鹿児島城跡大奥の遺構を発見, 発見!(鹿児島城跡), 発掘速報, 新刊報告書紹介, 夏季研修講座, 河コレ遺跡めぐり(③ 中岳洞穴), ワクワク考古楽授業支援	10月30日
3	87号	国内最大級の管玉を発見, 発見! 発掘速報, 寅年に掘る虎居城, 篤姫ゆかりの地での発掘調査とワクワク考古楽, 現地説明会を開催, 遺跡を持って帰る!?, 河コレ遺跡めぐり(④ 山ノ口遺跡)	2月28日

8 鹿児島県立埋蔵文化財センター来所者数(令和2年度)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計	
個人	小学生	13	3	5	28	57	1	10	10	4	21	2	15	169	
	中学生	1	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	3	16	
	高校生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	4	
	一般	164	92	96	105	131	62	131	115	134	79	126	320	1,555	
	その他	0	0	0	9	45	0	0	0	0	0	0	0	54	
	計	178	95	101	142	245	63	141	125	138	100	130	340	1,798	
団体	小学生	人員	125	0	0	0	0	0	18	0	0	0	0	0	143
		団体	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
	中学生	人員	4	0	0	0	0	0	0	26	0	0	0	0	30
		団体	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
	高校生	人員	67	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	67
		団体	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	一般	人員	6	0	0	0	13	0	5	3	0	0	0	0	3
		団体	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	27
	計	人員	202	0	0	0	13	0	23	29	0	0	0	0	1
		団体	5	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	16
	計	小学生	138	3	5	28	57	1	28	10	4	21	2	15	312
		中学生	5	0	0	0	12	0	0	26	0	0	0	3	46
高校生		67	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	71	
一般		170	92	96	105	144	62	136	118	134	79	126	320	1,528	
その他		0	0	0	9	45	0	0	0	0	0	0	0	54	
計		380	95	101	142	258	63	164	154	138	100	130	340	2,065	

9 (公財)鹿児島県上野原縄文の森との連携

企画展・特別展関係

No	開催期間	企画展テーマ	講演会期日	職名・講師	講演会参加者数	総来園者数
				講演会テーマ		
第60回	4月24日 ～7月4日	どうして?! 縄文体験 ～縄文時代の暮らしを学ぼう～	6月5日	縄文の森職員 ワークショップ「縄文体験学習」	4	3,911
第61回	7月17日 ～11月17日	「新発見! かごしまの遺跡2021 ～発掘調査速報展～」	8月21日	「北山遺跡」(公財)埋蔵文化財調査センター 文化財専門員 加世田 尊	24	5,783
				「中津野遺跡」 県立埋蔵文化財センター 文化財研究員 鮫島 えりな		
			9月25日	「牧B・原村遺跡」(公財)埋蔵文化財調査センター 文化財専門員 宮崎 大和	18	
				「高橋貝塚」(公財)埋蔵文化財調査センター 文化財専門員 松山 初音		
第62回	11月20日 ～3月6日	海と活きた古代人Ⅱ ～古墳時代から近世の鹿児島～	2月5日	國學院大學 研究開発推進機構教授 池田 榮史氏 鹿島神崎遺跡と水中考古学	中止	3,887

考古学講座

No	期日	タイトル	講師	参加者数
第1回	4月17日	「太古の森を歩く! 森さんぽ」	寺田 仁志氏 (環境カウンセラー)	19
第2回	5月15日	「上野原遺跡をめぐる火山」	井村 隆介氏 (鹿児島大学 准教授)	25
第3回	7月4日	「文字から見る鹿児島の古代」	永山 修一氏 (ラ・サール学園 教諭)	41
第4回	11月27日	「御楼門散策～鹿児島(鶴丸)城を歩く～」	西野元勝 (県立埋蔵文化財センター 文化財主事)	20
第5回	3月19日	「遺跡は語る」	東 和幸 (県立埋蔵文化財センター 南の縄文室長補佐)	26

「河ロコレクション」の展示(常設展示コーナー)

	期日	展示内容
第1回	5月15日～9月17日	河ロコレクション ～山ノ口遺跡～
第2回	9月18日～1月14日	河ロ貞徳氏の軌跡Ⅳ(面縄貝塚・朝仁貝塚・宇宿貝塚・喜念貝塚・嘉徳遺跡)
第3回	1月15日～5月13日	標式遺跡シリーズⅤ(高橋貝塚・入来遺跡・山ノ口遺跡)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第15号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2023年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
